

西之表書史

ダイジェスト版



西之表市史

ダイジェスト版









ベニトンボ



あっぱーらんどで飼育されているマゲシカ



タマゴタケ



ヤコウガイ



上能野貝塚出土遺物



種子島家文書（鹿児島県指定文化財）



新當流錘十問智合位許状（西之表市指定文化財）



木折坂からの眺望 (伊関校区)



西之表市 校区図



日高 (安納) 隠岐守の墓 (安納校区)



堂月の峯・院坊遺跡遠景 (現和校区)



カシミア号船員が漂着した舞床海岸 (立山校区)



安城の新絶景スポット「汐見台」からの眺望 (安城校区)



塩屋の歴史を伝える大崎塩屋神社と記念碑（上西校区）



かつて笹の宮が祀られていた浦田小島（国上校区）



サンゴの石垣（榕城校区）



日典寺の温産祈念（下西校区）



満開の河津桜（古田校区）



浜之町のガジュマル（住吉校区）



鴻峰小のシンボルツリーだったヤクタネゴヨウ（中割校区）



発行にあたって

西之表市長 八板 俊輔

このたび、『西之表市史ダイジェスト版』を刊行する運びとなりました。刊行にあたり、長年にわたり編さんに携わってこられた編集委員の皆様をはじめ、資料の提供や調査にご協力いただきました多くの関係各位に対し、深く敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。本市のある種子島は、日本列島の南西部に連なる島々の北端に位置しています。ヨーロッパと日本、大和と琉球など、地球上の航海によって人々が移動し、交流するときにいろいろな役割を果たしてきました。先人たちは幾多の困難を乗り越えながら地域社会を築き、その営みは幾世代にもわたり受け継がれ、今日の西之表市の礎となっております。本市の歩みは、市民一人ひとりのたゆまぬ努力と地域への思いの積み重ねにほかなりません。

本市の有する豊かな自然、歴史文化という「島の宝」を次世代に引き継ぐと、令和元年度から五カ年計画で編さんした『西之表市史』は令和六年春に発刊いたしました。『西之表市史』は、本市の成り立ちや社会の変遷、産業や文化の発展の過程を体系的に整理し、後世に正しく伝えるための重要な基礎資料であります。今回刊行する『西之表市史ダイジェスト版』は、その要点をまとめ、より多くの市民の皆様が郷土の歴史に親しんでいただくことを目的として編集いたしました。幅広い世代の皆様が『西之表市史ダイジェスト版』を通してふるさとの歩みに触れ、地域への理解と誇りを深めていただければ幸いに存じます。

歴史を学び、その歩みを次代へ継承することは、将来のまちづくりを進めるうえで大切な礎となります。『西之表市史ダイジェスト版』が『西之表市史』への理解を深める橋渡しとなり、市民の郷土への理解と誇りの醸成につながるものと期待しております。本書が広く親しまれ、本市のさらなる発展の一助となることを願い、発刊にあたってのあいさつといたします。

令和8年3月



発刊にあたって

西之表市史編集委員長 徳水 和喜

このたび、「西之表市史ダイジェスト版」を上梓できましたことは、この上ない喜びであります。

『西之表市史』本編は、多大の費用と地域に根差した知見に加え、学術的専門性を有する研究者による体制、議会・市行政・事務局の全面的な協力のもとに完成いたしました。この専門性の高い市史本編をより深く理解していただくため、ここにダイジェスト版を作成することいたしました。ダイジェスト版は、本編を読み解く案内書ともいえるものです。本編の要点を整理し、誰にでも理解しやすい形にまとめたものであり、学校現場や地域社会活動の教材として活用されることを期待して制作いたしました。広く活用されることを願っております。

ここで改めて、『西之表市史』の主眼とその背景について述べ、種子島を取り巻く歴史を正しく理解するために重要な点を二点確認しておきたいと思えます。

一つは、種子島の政治・文化の実像を明らかにすることです。種子島は中央から離れた地域として捉えられ、「辺境」とのイメージで語られることもありました。しかし、薩摩のさらに海を隔てた地域として独自の役割を果たしてきた歴史的事実を、正當に評価すべきであるとの問題意識から、その実像を明らかにすることを市史編纂の主眼といたしました。

二つ目は、南に開かれた文化の導入口としての役割を提示することです。種子島が地理的条件を生かし、外来文化の導入および交流の拠点として果たしてきた歴史的作用、実績と史料に基づいて明確に示すことが、もう一つの主眼であります。

これら二つの主眼を実現するためには、豊富な一次史料や散在する史資料を丁寧に収集し、個々の学術研究や大学による地域調査の成果を積極的に活用する必要があります。そのため、編纂には五ヶ年の歳月を要しました。さらに、『西之表市史』本編には写真・図表などの視覚資料を十分に取り入れ、複雑な歴史事象を視覚的に理解できるよう配慮しております。ダイジェスト版を活用する際には、本編と併せて参照することで、より補完的に活用していただけるものと考えております。また、ダイジェスト版では外来文化の導入や交流、社会構造などの複雑な内容を、より明確かつ分かりやすく整理しております。

『西之表市史』の主眼は、種子島の歴史を「辺境」という固定的なイメージから解放し、外来文化の受容と交流の拠点としての実像を、豊富な史料と研究成果に基づいて明らかにすることにあります。本ダイジェスト版が、その理解を深める一助となれば幸いに存じます。

西之表市史ダイジェスト版 目次

□ 絵
発行にあたって 西之表市長 八坂 俊輔
発行にあたって 西之表市史編集委員長 徳永 和善

第1部 西之表市の概要と自然

第1編 西之表市の概要

第1章 西之表市の概要……………12

位置・面積／地勢／土地利用／人口／西之表市の気候／地形・地質

第2編 西之表市の動植物

第1章 植 物……………18

種子島の植生／種子島・馬毛島だけに分布する植物／種子島と屋久島だけに分布する植物

第2章 菌 類……………19

第3章 哺乳類・鳥類ほか（爬虫類・両生類）……………19

第4章 魚 類……………21

第5章 昆虫類ほか……………22

第6章 陸水産の甲殻類……………22

第7章 貝 類……………23

第2部 西之表市の歴史概観

第1編 先 史

第1章 取り扱う時代区分と年代……………24

第2章 旧石器時代……………25

第3章 縄文時代……………25

草創期／早期／前期／中期／晩期

第4章 弥生時代・古墳時代相当期……………35

弥生時代の墓／古墳のつくられなかった種子島

第2編 古 代

第1章 古代の種子島……………40

「日本書紀」の披玖と「隋書」の夷邪久国／天武・持統期の南島・集人政策／多岐嶮停廃後

第2章 多岐嶮停廃後……………45

9・10世紀の大隅国と南島／南蛮襲来事件と島津荘

第3章 鎌倉幕府の南島支配……………47

第3編 中 世

第1章 種子島氏の系譜……………48

中世の種子島

第2章 鎌倉・室町時代の種子島……………49

種子島氏の出自と入島／南北朝の種子島氏／種子島氏と島津氏

第3章 中世種子島の社会と文化……………51

律宗と法華宗／中世の城郭／種子島氏の家臣団／古地図の中の種子島

第4章 鉄砲伝来と種子島……………54

種子島と琉球・遣明船／就船記 から見た鉄砲伝来／鉄砲の原材料／鉄砲が語る歴史／鉄砲鍛冶

第5章 戦国時代の種子島……………58

天文の種子島氏内訌（内紛）／種子島氏の島津氏への従属

第4編 近 世

第1章 種子島の政治……………60

近世種子島氏の形成と島津氏／一所持と「私領」領主／種子島の行政組織／種子島の身分制度／種子島家当主の系譜

第2章 種子島の経済……………68

藩検地と種子島領石高／藩の財政改革／種子島の主な生業／種子島の人口推移／伊能忠敬の種子島測量

第3章 種子島家の外交……………72

異国船種子島漂来／種子島家の唐通事／近世の種子島と琉球

第4章 種子島の宗教

種子島の寺院の三類型／法華宗寺院の僧侶／生活と密着した法華宗寺院
／キリスト教禁止と水俣尼

73

第5章 種子島の文化

種子島家学問所・記録所兼大國学校／藩政期に編集された「種子島家譜」
／近世の種子島の和歌／西之表市の石造物／大的地式

74

第5編 近代

第1章 明治維新と西南戦争

76

第2章 鹿仏毀釈と宗教

77

第3章 西之表市の移住と人口

77

第4章 太平洋戦争

78

第5章 産業

80

農業／甘蔗・製糖／茶／養蚕／煙草／樟脳／番屋／漁業／製鉄・鍛冶・
種子鉄

第6章 交通

82

第7章 明治大正に活躍した医者

83

第8章 教育

83

第6編 現代

第1章 西之表市の市政

84

西之表市の誕生／姉妹都市／友好都市／行政付属機関等(区会等)／集落
支援員制度／地域おこし協力隊／行政と市民の意見交換の場(町)区と語
る(西)／ふるさと応援寄附金(ふるさと納税)／平成の大合併／鹿毛島の
沿革と概要

第2章 市議会

88

第3章 産業

88

西之表市の産業構造／農業／畜産業／糖業／水産業／商業／鉱業／観
光業

第4章 構築(建設・土木)

94

道路／橋／公園／港湾／漁港

第5章 衛生・環境

水道／生活排水(「尿処理」)／ごみ処理

96

第6章 厚生・福祉

西之表市連済会／児童館／西之表市老人福祉センター／西之表市社会
福祉協議会／保育園

97

第7章 保健・医療

西之表市保健センターすこやか／種子島産婦人科医院

98

第8章 治安・消防

警察／消防

99

第9章 交通

海上交通／陸路交通／航空交通

100

第10章 教育

しおごい留学／小学校／中学校／高等学校／給食／生涯学習／文化祭／
国民文化祭／市民会館／図書館／種子島開発総合センター「鉄砲館」／
社会体育(生涯スポーツ)／スポーツ行事／体育施設

101

第3部 西之表市の民俗・文化

第1編 民俗

108

第1章 神社・仏閣

神社／仏閣

108

第2章 カシミア(ヤ)号事件

111

第2編 文化財

112

第1章 文化財の概要

西之表市の文化財／郷土芸能の保存

112

協力機関・協力者／西之表市中編さん委員会／
西之表市中編集委員会／西之表市中編集委員会専門部会／
事務局／関係機関

第1部

西之表市の概要と自然

第1編

西之表市の概要

第1章 西之表市の概要

位置・面積

種子島は、九州本土最南端の佐多岬から南東方向に約40キロメートル・鹿児島市から約115キロメートルの海上にある。一般に山地・台地が多く、海拔は最高282・3メートルである。種子島の面積は444・96平方メートルで日本の有人離島の中では5番目に大きな島である（架橋により本土との往来が可能な島は除く）。

種子島の北部に位置する本市は、南北の長さは25・2キロメートル、東西の幅は8・2キロメートル、周囲は63キロメートル、東・西・北は海に面し、南は中種子町と接している。面積は205・66平方メートルで、種子島の総面積の約45割を占めている。

いる。

西之表市の西方12キロメートルの海上に浮かぶ馬毛島は、面積8・17平方メートル、最高地点で71・7メートルの極めて低平で、定期航路はないが、周辺は豊かな漁場となっている。

地勢

地勢とは、土地の形勢のことであり、地形の高低・傾斜、山・谷・川・湖の配置など、その土地全体のありさまを示すものである。

種子島は海岸段丘の島で、数段の平坦面と、これを取り巻く急崖の組み合わせを基本地形としている。

また、地質は種子島全域に広がる新生代古第三紀熊毛層群に属し、随所に洪積台地が発達している。ほとんど砂岩からなっているが、



西之表市の位置図

管内極地

東：東経131° 05'
西：東経130° 50'
南：北緯30° 35'
北：北緯30° 50'

広ぼう

東西8.2km
南北25.2km

面積

205.66km²
(うち馬毛島8.17km²)

人口と世帯数

(令和7年12月末現在)
男性：6,812人
女性：7,009人
全体数：13,821人
世帯数：7,945世帯



甲女川のこいのぼりと園児たち



浦田海水浴場



鉄浜海岸(サーフィン)

6月に厚生労働省による戦没者遺骨収集調査が行われ、海底に眠っていた旧日本海軍の「九七式艦上攻撃機」を引き上げたが、機体番号や遺骨等は確認さ



九七式艦上攻撃機 (宇佐市教育委員会提供)

●河川
種子島には1級河川はなく、2級河川が13

●山岳
本市で最も高い山である廻峯山の標高は270㍇あり、市の南西部である古田校区の十三番に位置し、中種子町との市境に広がっている。島内で最も高い場所であることから、テレビアンテナ塔が設置されており、島内各地域に電波を発信している。

カとして有名である。現在は、サーフィンのメッカとして有名である。

●海岸
浦田海水浴場は、白い砂浜と青い海、緑あふれる森に囲まれた自然環境に優れた海水浴場として「日本の水浴場88選」に選定されている。
鉄浜海岸は、砂鉄が多量に砂に混ざっており、昔から砂鉄が採取できることからこの地名がついている。現在は、サーフィンのメ

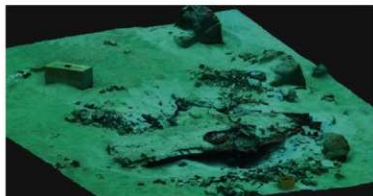
場所によっては礫岩、頁岩、火成岩が見られ、東部の丘陵地は亜炭層を包含している。土質は淡褐色の粘土と黒ボク土が主となっている。海岸は磯の発達が見られ、ところによっては小規模な海岸砂丘も存在する。

水系、13河川ある。本市の河川は短小で河川勾配が急である。
甲女川は古田校区から山間部を蛇行しながら北流し、愛蔵川や今年川川と合流しながら市街地を貫流し、西之表港赤尾木湾へ注いでいる。全長は約7.5㍇である。

●岬
種子島の最北端にある喜志鹿崎には海の安全を守る灯台がある。喜志鹿崎と本土最南端にある佐多岬との間の海域は大隅海峡と呼ばれる。この海峡は、国際海峡のため、各国の船が自由に航行できることから、喜志鹿崎は船の位置を把握するための重要な目標になっている。



喜志鹿崎灯台展望所から見る大隅海峡



3次元(3D)モデル(フォトグラメトリ)



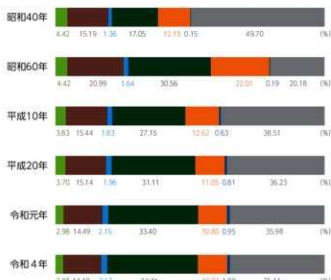
機体の引き上げ

れず、飛び立った基地や搭乗員の特定には至らなかった。しかし、引き上げた機体からは鉛筆や工具などが発見され、日本兵の存在を感じるものであった。

引き上げた機体は西之表市民体育館駐車場において一般公開を行った後、戦中に宇佐海軍航空隊が置かれていた大分県宇佐市に運ばれ、保存・調査されている。なお、九七式艦上攻撃機は、太平洋戦争のきっかけとなった真珠湾攻撃の主力の戦闘機であり、戦争末期には特攻機としても使用されていた。

土地利用

本市の土地の多くは、山林・原野が占めており、令和4年度の総面積の約44%を占める。また、近年は農用地が減少しており、市では地域の特性を生かし、調和の保たれた秩序あるまちづくりを推進している。



利用区分別 土地利用状況の推移

人口

●種子島の人口の変遷

『懐中島記』によると、貞享元年(1684)の人口は8100人(男4359人、女3741人)となっている。また、『伊能忠敬測量当時の種子島の場合』によると慶応4年(1868)の人口が1万8000人となっていることから約200年で人口が2倍以上増加していることがわかる。以降、種子島の人口は増加していったが、昭和35年(1960)の6万4532人をピークに、年々減少し、令和2年では2万7692人となっている。

●西之表市の人口の変遷

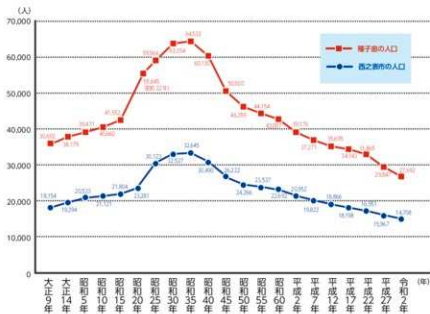
『懐中島記』によると、元禄2年(1689)の人口は2046人、全島の人口は6130人となっている。これは土族と僧侶は含まれていない人口と推定されるため、目安にしかない。

晩晴堂(桑山定芳)作の「種子島全図の書き込み」によると、明治11年(1878)の人口は、8420人となっている。この数字は土族、僧侶等を含んだ、北種子村の絶対人口と見ることが出来る。

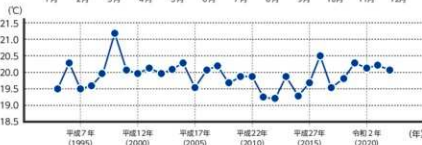
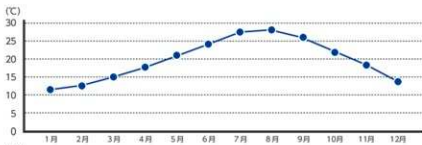
明治19年の甌島や大正3年(1914)の桜島からの移住に伴い、人口は増加し、大正

14年には1万9294人となった。大正15年には町制を施行し北種子島村が西之表町となった。

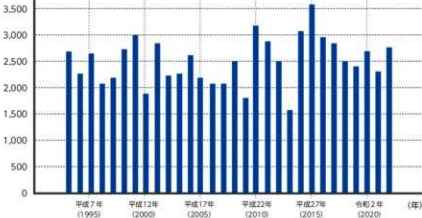
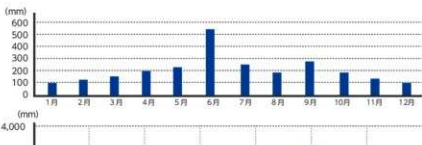
その後、昭和33年に市制特例法により西之表町が西之表市となり、昭和35年の3万2645人をピークに、以後は徐々に減少し、令和2年には1万4708人と最盛期から半減した人口となっている。



種子島と西之表市の人口の推移



西之表市の気温の推移 (上：月別、下：年別)



西之表市の降水量の推移 (上：月別、下：年別)

西之表市の気候

本市の年平均気温は摂氏19・5度と、すこぶる温暖で、5月から10月までは月平均気温が20度を超え、夏の期間が長い。真夏の日照は強いが、常に快い海風が吹いているため日中の暑さは九州本土と変わらず、むしろ涼しいくらいである。一方、冬の気温は10度から14度であり、日の最低でも0度を下回るこ

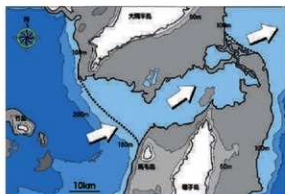
はほとんどない。年間降水量は2000mm前後で3月から9月の期間が比較的に多雨である。梅雨は5月末頃に入り7月初め頃には明け。台風は、7月から10月にかけて年に4〜5回来襲する。また、冬期には季節風により北西の風が強くなる。このように、本市の気候は温暖気候に近い亜熱帯性気候であるが、台風常襲地帯に当たるので、農作物への影響も大きくなっている。

地形・地質

●地 形

本市がある種子島・馬毛島は琉球列島の一部である。琉球列島は、種子島から与那国島まで約1300kmあり、地質的に北琉球・中琉球・南琉球に分けられる。種子島を含む大隅諸島は北琉球に含まれ、その中でも種子島は最も東側に位置している。

種子島近海の海底地形は、浅く、種子島屋久島間の海底は水深100mに満たない。西隣の馬毛島との間の海底も50mに満たないほど浅い。種子島と大隅半島の間の大隅海峡においても水深100m程度の浅い海が細長く伸びた地形となっている。黒潮の一部がここを通過して太平洋側へ流



大隅海峡の海底地形

最終氷期最寒冷期（約2万年前）は鹿児島県本土と陸続きであった

れ込んでいる。海上アルプスと呼ばれるほど急峻な屋久島に対して、種子島は全体的になだらからか細長い。このような地形の違いは地質の違いによって生じる。

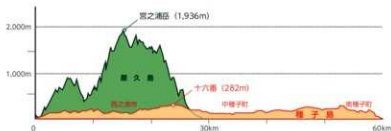
種子島は、熊毛層群という砂岩と頁岩からなる地層でできている。この地層は北北東から南南西の方向に延びていることから、種子島はその影響を受けて、細長い地形となった。

対して、屋久島は主に花崗岩でできている。花崗岩は、周囲の岩石より密度が小さく、上昇しやすい。また、花崗岩は

地表に現れると降雨や風化によって侵食され、軽くなることよってさらに上昇することから、屋久島は標高が高い島となった。

種子島の砂丘は、西海岸沿いに連なって発達している。砂丘は先史時代の人々の生活の場になっており、各地で遺跡が発見されている。

種子島には活断層が4本ある。本市には花里崎一田之脇断層（西之表断層）がある。活断層は過去に繰り返し活動し、将来も活動する可能性がある断層のことで、これが動くとき地震が発生する。



低島タイプの種子島

●地 質

種子島の地質は、古第三紀から第四紀にかけて形成された堆積岩の地層の上に、ローム層や火山噴出物が何層も重なって形成されている（基盤となる堆積岩の地層は、古い順に熊毛層群、葦水層群、増田層、長谷層、竹之川層という）。市内住吉形之山の増田層からは、ソウ化石や魚類化石、植物化石などが産出し、当時の環境を復元する貴重な資料となっている。

種子島周辺には多くの火山やカルデラが存在しているため、始良カルデラ起源のATテフラ（約3万年前）、鬼界カルデラ起源の鬼界アカホヤテフラ（約7300年前）など、時代や噴出源の異なる多くのテフラが市内には堆積し



発見当時のゾウ化石と発掘調査の様子

第2編

西之表市の動植物

『西之表市史』第一編自然第三～四章

第1章 植 物

種子島の植生

種子島で最も広い面積を占める植物群落は、常緑広葉樹林の一つであるシイ・カシ二次林で、37・3%を占める。シイ・カシ二次林にはスタジイ林やマテバシイ林等があり、秋にはドングリをつける森である。次いで耕作地（畑地・水田・放棄地等）が34%、スギ植林地が15%を占める。

本市で最も広く分布しているのは41%を占めるシイ・カシ二次林、次いで20%の畑地、18%のスギ植林と続く。水田も6%を占め、市街地・住宅地は4%となる。いずれも人の手によって変わった代償植生である。原生に近い自然は10%程度残っている。

植生図を見ると、シイ・カシ二次林は海岸辺から内陸の丘陵地に多く、畑地は北部では低地に、また、中央部や太平洋側では水平になった段丘平面に多く分布する。スギ植林

は丘陵の谷間から頂部にかけ、特に種子島の脊梁中央部に分布している。マツ林はマツクイムシ被害で枯死し、シイ・カシ二次林に遷移して、僅かに若狭公園周辺に残る。

また、種子島にはマングローブ林があり、規模の大きなメヒルギ群落が西之表では国上湊川に、中種子・南種子では阿蘇川、大浦川に成立している。

種子島は砂丘が発達し、自然植生の砂丘植生が0・2%を占めることは特筆され、砂丘草原、矮性低木林（樹高が低く、地面に押し付けられるように育つ低木が密生している林）、風衝低木林（強い風の影響で樹高が低く抑えられた低木林）、沿海地林と連続する見事な植生分布が見られる。

種子島の植生は人の手が加わった代償植生が中心であるが、多様で他地域ではほとんど見られないものもある。

また植生を構成する植物相も豊かで、千数百種に及ぶ。



タネガシマアザミ

種子島・馬毛島だけに分布する植物

●タネガシマゴンスイ（ミツバウツギ科）

ゴンスイの品種あるいは変種で、基本種のゴンスイより、小葉の主脈に毛が密生する特徴がある。ゴンスイは一般に伐採地や崩壊地など自然破壊があった場所に生える先駆的な落葉広葉樹である。

●タネガシマアザミ（キク科）

かつてヤクシマアザミと同一種とされていたが、別種となった。ヤクシマアザミが矮性

で葉が厚く葉のとげも鋭く、屋久島の標高が1500m以上の高地に生えるのに対して、本種はより高茎、広葉で、主に種子島中部以北の林縁や草地に生える。

●ムラクモアオイ(ウマノスズクサ科)

屋久島に分布するクワイバカンアオイの変種に分類される。葉は10cm前後の卵状三角形で厚く光沢があり斑が入ることが多い。花期は10月から2月頃に地表面に目立たない花を咲かせる。西之表ではシイ林やスギ林中で比較的多く見られるが南種子町では少ない。

●タネガシヤママツツジ(ツツジ科)

赤い花弁を持つヤママツツジの変種で、ヤマツツジとしては遅い6〜7月に開花する。太平洋岸の基水層群(新第三紀中新世の砂岩・泥岩・礫岩)地域に点々と見られ、本市現和付近にも分布する。風衝低木林のウバメガシやシヤリンバイ、マルバニツケイ、リュウキユウチクなどの優占する林縁部で見られる。

●タネガシマアリノトウグサ(アリノトウグサ科)

かつてホソバアリノトウグサとされていたもので昭和33年(1958)に本種に改称された。種子島ではなく馬毛島の牧場に分布し

ていたもので、現在は諸事情により攪乱され、確認されていない。アリノトウグサに比較し茎葉は大型で立ち上がる。

種子島と屋久島だけに分布する植物

ヤクタネゴヨウ(マツ科)、カンツツワブキ(キク科)、ヤクシマサルスベリ(ミソハギ科)、ヤクシマオガラバナ(カエデ科)、ヤクシマヤマスマミレ(スマミレ科)、タネガシマシコウラン(ラン科)

第2章 菌類

菌類(きのこ・かび・酵母菌)は、私たちの生活になじみ深い生き物の一つで、植物でも動物でもない生物群としてグループ分けされている。分子系統学上、菌類は植物よりむしろ動物に近い生き物と考えられている。

本市には、菌類の発生に適した湿度が保たれる場所が至る所にある。令和2〜4年(2020〜22)にかけて調査を行い、54科247種の発生を確認した。

菌類の分類学的研究は動植物に比べて著しく遅れているが、西之表市において今後も通



ピロードカワキタケ

年調査が行われることで、菌類の多様性をはじめ、さらに多くの種の生態が明らかになるだろう。

第3章 哺乳類・鳥類ほか (爬虫類・両生類)

哺乳類

多くの島から構成される日本列島では、海峽が生物相の特徴を分ける境界線となってい



馬毛島上空から見たマゲシカ個体群

る。種子島は大隅海峡などの海峡によって長く隔離されたという歴史から、独特の生物相を形成し、種子島に生息する生物は独自の進化を遂げ、ほかの島とは異なる特徴を持つようになった。

環境省の自然環境保全基礎調査によると、日本に現存している陸生哺乳類は、外来種を含め116種報告されている。そのうち種子島では14種の陸生哺乳類が確認されているが、イノシシ・ニホンザル・タスキの3種は

現代までに地域絶滅した。イノシシは大正初期までわな猟で盛んに捕獲されていたように、この狩猟圧が絶滅の要因として考えられている。

ニホンザルは昭和30年代に地域絶滅したようで、当時の森林伐採による自然林の減少が地域絶滅の主な原因と考えられている。タスキも大正時代から戦後にかけて、住民による目撃情報があったが、いつどのようない理由で地域絶滅したのか、詳しくはわかっていない。これら3種が自然分布していたのか、人為的に移入されたのかは不明である。

また、野外でカイウサギを見たという情報も複数あるが、現段階においてそれが野外で繁殖して野生化しているとは考えられない。

現在、目撃情報が多いのは、中大形哺乳類のニホンイタチとニホンジカである。ニホンイタチは近年目撃情報が増えており、交通事故で死亡・負傷する個体も多く見られている。馬毛島に生息するニホンジカは、種子島の個体とともに亜種マゲシカに分類された固有の進化史を有する独自系統である。令和元

年(2019)に実施した個体数調査によると、シカはシバ群落やスキ群落などの二次草原で多く観察され、観察された頭数は平均で659個体、推定密度は86個体/平方キロメートルであった。

鳥類・爬虫類・両生類

現在国内で日本産鳥類は、外来種を含め670種余が記録されている。このうち約230種が種子島で記録されているが、そのほとんどが渡り鳥である。種子島を含む南西諸島は鳥の渡りのルートに位置しているため、多くの渡り鳥を観察することができ、鳥には季節的に南北に移動するものと一年中移動することなく定着するものがあり、前者を渡り鳥(夏鳥・冬鳥・旅鳥)、後者を留鳥(漂鳥)という。

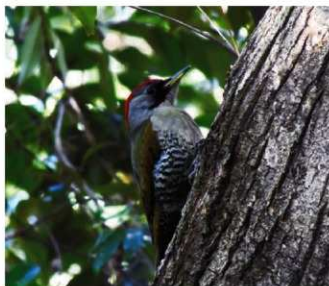
種子島には留鳥は少なく、ほとんどが渡り鳥である。また、観察記録が少なく、留鳥か渡り鳥か明確でない鳥もいる。一年中、種子島内にいる種(留鳥)はカルガモ、ミサゴ、トビ、キジ、イソシギ、キジバト、クロサギ、カワセミ、タネアオケラ、イソヒヨドリ、ウグイス、セツカ、ホオジロ、スズメ、ハシブトガラス、タネヤマガ、ヒヨドリ、コジュケイ、カワラバトなどである。

種子島の両生類・爬虫類の種数は両生類8種、爬虫類19種(うち陸生爬虫類14種、海生爬虫類5種)が確認されている。

ウミガメ類では、種子島で産卵するウミガメが2種いるが、アオウミガメは少数で、アカウミガメが大部分を占める。島内各地に長



タネヤマガラ



タネアオゲラ



アオウミガメ

第4章 魚類

い砂浜海岸のある種子島は、ウミガメ類の産卵場として非常に重要な地域である。

種子島では多くの研究者によって魚類が報告され、令和5年(2023)4月までに635種の魚が記録されている。このような

文献記録の調査に加え、鹿児島大学総合研究博物館が主導した学術調査によって得られた1万点の種子島・馬毛島産標本を調べたところ、種子島・馬毛島に生息する魚類は1179種であることが明らかになった。これは奄美大島と屋久島に次ぐ国内3番目の魚類の種多様性を示すものである。

一方で、種子島の純淡水域から記録された魚類は27種にとどまり、豊かな海水魚の多様性に比べて淡水魚類相は貧弱であるといえる。

また、種子島では相次いで新種や日本初記録種が報告されている。

このうち令和2年に西之表港で標準体長25cmの大型ニホンイトヨリが釣獲された。本種は学名の種小名が日本を意味する「Japonicus」、標準和名にもニホンが含まれるが、これまで日本国内からの確かな分布記録は知られていなかった。種子島産の一標本がニホンイトヨリの日本における初めてかつ唯一の記録である。

このほか、ヨウジウオ科のタマヨリタツは、本市美浜町沖の水深20mから漁獲された2個体に基づき日本初記録として報告された。令和7年現在、本種の国内からの記録はこの2個体のみである。



マホロバハタ



イワナガヒメジ



シラタマアゴアマダイ
最近種子島から発見された新種の魚たち



ベニシジミ

第5章 昆虫類ほか

種子島の昆虫相は九州本島とよく似ており、トカラ列島や奄美諸島とは異なる。これは、地史の影響を強く受けているためと考えられる。屋久島を含む熊毛諸島を分布南限とする種が多く見られるのもこのような理由からである。

ツマベニチョウ(シロチョウ科)は、九州南部以南に生息する前翅(ぜんし)の紅色が鮮やかな大型種で、鳥民にもよく知られている。食樹となるギョボクは、湿気が多い谷沿いに生える

ことから、谷間を飛翔したり近くの集落に植えられたハイビスカスなどに訪花したりする姿がよく見られる。蛹(まご)で越冬し、年に何回も発生する。

ツマベニチョウは、昭和53年(1978)に本市の「市の蝶」に指定している。

ベニシジミ(シジミチョウ科)は、種子島では昭和47年に初めて確認された。鹿児島県本土では春先に見られる温帯系の普通種で、分布南限となる屋久島では平成18年(2006)に発見され、種子島から広がったと考えられている。

温暖化が進行する現在の時代に、分布を南

に広げた珍しい例である。食草のギシギシやスイバ(いずれもタデ科)は道路や田畑の脇に生えており、本種は現在では種子島全島に見られる。多化性で、春型は夏型に比べて翅(は)の朱色斑(あか)が明るく広い。

第6章 陸水産の甲殻類

文献及び今回の調査より種子島の陸水産甲殻十脚類(エビ・ヤドカリ・カニ類)の、出現総種数は49種であり、最も多くの種が確認

されたのがスナガニ科13種、次いでモクスガニ科が12種、そして、テナガエビ科とベンケイガニ科が6種と続いた。

西之表市の湊川の調査では、モクスガニ科のモクスガニ、タカノケフサイソガニ、アシハラガニ、ヒメアシハラガニ、ハマガニ、ベンケイガニ科のクロベンケイガニ、ユビアカベンケイガニ、フタバカクガニ、スナガニ科のチゴガニ、コメツキガニ、ヒメシオマネキ、及びハサミシヤコエビ科のハサミシヤコエビの生息が確認された。

種子島全体の陸水産甲殻十脚類相は、多様



アシハラガニ

な生息環境の存在、黒潮の存在とその強い影響、各種の生活史型、そして島嶼部の地形とその形成過程が関連して作られてきたと言える。

第7章 貝類

種子島の近海を流れる黒潮は台湾の東側から南西諸島に沿うように北上し、奄美大島付近で東西に分かれ、さらに日本列島に沿って



タネガシマイマイ

北上していく。種子島の貝類の分布は黒潮の影響を強く受けており、暖帯系の貝を主として亜熱帯系のものも多く見られる。

図鑑に「奄美大島以南に分布」と書かれている貝が、実際は種子島周辺にも多種類生息している。これまでに種子島（沿岸を含む）では950種以上の貝類が記録されている。馬毛島周辺を含めると1250種以上の記録がある。

●種子島のみに分布

固有種：クビマキムシオイ

固有亜種：タネガシマアツブタガイ

●種子島と屋久島に分布

固有種：ハラプトギセル、イトカケノミ

ギセル、ウチマキノミギセル、

ヤコビギセル

固有亜種：タネガシマムシオイ

●種子島と屋久島、口永良部島共通

固有種：タネガシマギセル、ハラプトギ

セル

▽晩期

32000年～25000年前

▽弥生時代・古墳時代併行期

25000年前～6世紀前半

第2章 旧石器時代

日本列島における旧石器時代とは、土器が使用される以前の、主に石器を使用し狩猟採集を行いながら遊動生活を行っていた時代であり、人類史上最も長く続いた時代でもある。

南九州の旧石器時代石器編年については、次頁編年図のとおりである。石器は石斧や大型の剥片石器から小型のナイフ形石器や台形石器へと変遷する。

種子島における旧石器時代石器群の注目される特徴として、約3万年前頃A.T（始良丹沢火山灰）下位の後期旧石器時代前半期Ⅰ・Ⅱ期の遺跡群が見られることが挙げられる。本市馬毛島の八重石遺跡をはじめ、中種子町立切遺跡（立切地区、大津保畑地区、小園地区、今平・清水地区）や南種子町横峯遺跡などが該当し、火山灰との層位的関係と放射性炭素年代測定値も調和的である。その後のナイフ形石器などの遺跡は現在のところ見られ

ず、旧石器時代末の約1万9000年前からの細石器文化の遺跡が現れる。

西之表市出土旧石器時代遺跡分布図は図「西之表市出土旧石器時代遺跡分布図」、種子島遺跡一覧（旧石器時代）は表「種子島遺跡一覧（旧石器時代）」のとおりである。

なかでも特徴的な遺跡は、3万5000年前とされる中種子町坂井の立切遺跡と南種子町の横峯遺跡である。これらの遺跡からは、刃部磨製石斧、斧形石斧、鉞状石器のほか剥片類、また砂岩製の磨石・敲石類などの礫塊石器が出土している。

立切遺跡の第Ⅰ文化層では、種Ⅳ火山灰直下のXⅢ層上面で、日本列島内でも最古級の落とし穴状遺構が12基検出された。これは、後期旧石器時代前半期に該当する静岡県高島市初音ヶ原遺跡で見つかったいる落とし穴と類似している。横峯遺跡では、種Ⅳ火山灰の上下の層で、調理場の跡と考えられる礫群（こぶし大の焼けた石がまとまった状態）が検出されており、これも最古級の調理場である。水期の日本列島内において、暖温帯に属し豊富な植物性食糧を背景に、落とし穴類を行い、礫群で調理する特異な狩猟採集民の活動を示すものであり、日本列島内の地域性、人類の適応性を示している。

第3章 縄文時代

日本列島では、およそ1万5000年前から25000年前まで縄文文化が展開する。弥生時代とは水稲耕作の有無で区別されるが、最近では縄文時代にもマメやエゴマ、アサやヒョウタンなどの栽培植物が存在したことが明らかになっていく。

土器の発生は、人類が火の使用中に偶然発見したものと考えられ、どこかで発生した土器が伝播したというより、多元的に発生したという説が有力である。

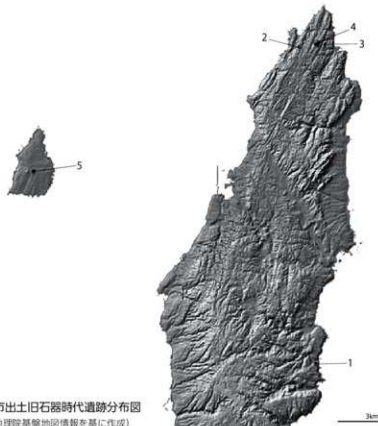
草創期

全国の草創期土器を概観してみると、朝鮮海峡と津軽海峡で大陸から切り離された当時の一つの大きな島の南側の太平洋沿岸部で、南関東から種子島、そして九州西岸の長崎県佐世保市福井洞穴などを含む地域が、更新世（地質時代の一区間で、第四期前半。水河時代）にあってもドンングリなど植物質資源の獲得が見込める地域で、土器製作を含めた情報の交流があったとした。隆起線文土器・隆帯文土器という、粘土を貼りつける土器が共通して出土している（29頁・写真「鬼ヶ野遺跡

熊本 水曜 2010	宮田 2006	宮崎 2005	主要石器群	
5	IX	9	<p>細石刃石器群</p>	
		VII	8	
	VII	7	<p>小形台形石器, 小型ナイフ形石器, 片鼻型ナイフ (東九州)</p>	
4	P15	6	<p>角錐状石鏃主体, 国府型ナイフ形石器</p>	
		Vc	<p>基部加工ナイフ形石器, 今神型ナイフ形石器, 枝去木型台形 (西北九州), 両面加工尖頭器, 台形石器</p>	
	P17	<p>多様な器種・型式、顕著な地域差</p> <p>剥片尖頭器主体 (九州全域), 原の辻型台形 (西北九州), 国府型ナイフ (東九州)</p>		
3	Va	<p>鎌谷型ナイフ (切り出し形), 掻器ほか</p>		
	IV	4	<p>ナイフ形石器主体 掻器ほか</p>	
2	AT	III	3	<p>ナイフ形石器主体 台形様石器, 掻器, 削器ほか 石刃技法</p>
		II	2	<p>台形様石器, ナイフ形石器, 掻器, 削器, 敲石ほか</p>
1	I	1	<p>台形様石器, 尖頭状石器, 威曲線石器, 削器, 環状石器 (磨石敲石類), 斧形石器</p>	

九州地方における旧石器時代編年

(■は種子島出土資料)



西之表市出土旧石器時代遺跡分布図
(国土地理院基礎地図情報を基に作成)

遺跡名	所在地	立地	標高	層序(文化層)	主な遺構	主な遺物	文献
1 芦野	西之表市立山芦野	海成段丘	約60m	AT面上層	礫集積状遺構		西之表市報20(2007)
2 大中華	西之表市国上中目	台地	約80m	採集		細石刃核、細石刃、プランク、剥片	桑波田・大久保(2000)
3 湊	西之表市国上湊	台地	約50m	採集		細石刃核	堂込(1998)
4 鷺山	西之表市国上奥	台地	約85m	V層		細石刃核、剥片	西之表市報21(2008)
5 八重石	西之表市馬毛島	海成段丘				石器類	
6 立切 (立切地区)	中種子町坂井本村	台地	約120m	XⅢ層上面(第Ⅰ文化層)	碑群1、土坑10、焼土跡32、ビット状遺構	石斧、局部磨製石斧、鉈状石器、磨石、敲石、石核、礫石、石皿、剥片類	中種子町報3(1999)、中種子町報4(2002)、中種子町報6(2003)
				XⅠc層(第Ⅱ文化層)		礫石器類	中種子町報15(2012)
				V層上面(第Ⅲ文化層)	碑群2	細石刃、細石刃核、プランク、接合資料、調整剥片、使用痕剥片、剥片類	中種子町報3(1999)、中種子町報18(2022)
7 立切 (大津保畑地区)	中種子町坂井本村	台地	約120m	XⅢ層上面(第Ⅰ文化層)	土坑12		鹿兒島県埋文セ報135(2009)
				XⅠc-XⅡ層(第Ⅱ文化層)	焼土跡10、炭化物集中区3	礫器、石核、敲石、石皿、礫石、破砕礫ほか	
				V層上面(第Ⅲ文化層)	焼土跡3	細石刃核、プランク、石核、剥片、石鏡	
8 立切 (小園地区)	中種子町坂井本村	台地	約120m	XⅣ層上面		敲石	鹿兒島県埋文セ報135(2009)
				XⅠc層(第Ⅱ文化層)	碑群4、焼土跡2	磨石、敲石、礫石、石皿、台石、礫	
9 立切 (今平・清水地区)	中種子町坂井本村	台地	約120m	XⅢ層上面(第Ⅰ文化層) XⅠc-XⅡ層(第Ⅱ文化層)	碑群1	磨石、敲石、礫	中種子町報15(2012)
10 長野崎	中種子町坂井長野崎	台地	約120m	V層上面	碑群1	細石刃核、細石刃、石核、剥片類	中種子町報18(2022)
11 三角山I	中種子町砂中	台地	約240m			細石刃核	鹿兒島県埋文セ報46(2002)
12 横峯C	南種子町島間横峯	台地	約120m	XⅢ層(第Ⅰ文化層)	碑群3、炭化物集中区10	石斧未製品、削器	南種子町報4(1993)、町報5(2000)、町報12(2005)
				XⅠ層(第Ⅱ文化層)	碑群6	磨石、敲石、礫器、台石、剥片	南種子町報8(2000)、町報12(2005)
				Ⅳ層(第Ⅲ文化層)	方形土坑1、ビット状遺構	磨-敲石	
13 銭亀	南種子町西之銭亀	台地	約85m	Ⅱb層		細石刃核、細石刃、プランク、削器	南種子町報14(2006)

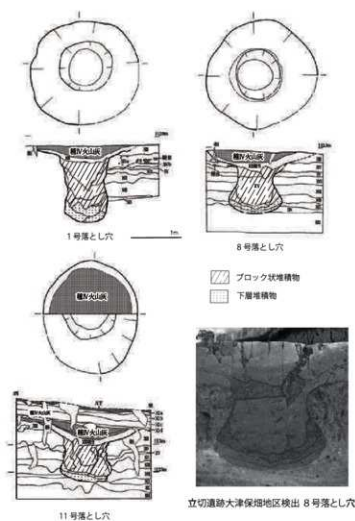
種子島遺跡一覧(旧石器時代)

出土縄文時代草創期遺物)。

縄文時代草創期の石器は、図「縄文時代草創期の石器」のようである。1と2は石鏃で弓矢の鏃である。22は石皿で、堅果類へ堅く木化した果皮に包まれた、裂開しない果実の殻を割ったり、粉にしたりする加工具としても、いろいろな食材を入れて団子状にしたりする調理具としても使われた。

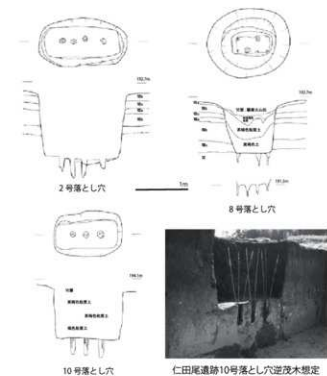
種子島の草創期の遺跡は、種子島中央部では、二本松遺跡、三角山I遺跡、瀬戸口遺跡など尾根状に立地している。

中央部東海岸には、奥ノ仁田遺跡、鬼ヶ野



立切遺跡大津保畑地区検出 8号落とし穴

立切遺跡大津保畑地区検出 落とし穴



仁田尾遺跡10号落とし穴逆茂木想定

仁田尾遺跡検出 落とし穴(細石刃期)

遺跡・長迫遺跡・二石遺跡といずれも東海岸から太平洋を見下ろす場所にある。

南部西海岸は横峯C遺跡・横峯D遺跡・平松B遺跡・宮田遺跡が立地し東シナ海を見下ろす。

いずれも見晴らしが良く遠望でき、また煙が上がれば周囲から認知されやすい場所である。

奥ノ仁田遺跡は、太平洋に突き出した東海岸の台地を望む標高133mの台地尾根上にあり、集石19基・配石遺構2基・土坑1基などが検出された。土器については、隆帯文土

器は貝殻で文様を施す個性的なものを含め、棒・ヘラ・貝殻で施文される土器などが見られる。石器は、磨製石鏃・丸ノミ型石斧・磨敲石と石皿が大量に出土し、植物性食料を中心とする生業形態と考えられた。土器の分布状況では、東側から西側に向けて新しく移っていくことがわかり、堅果類利用の季節的な回帰の利用を想定できる。

鬼ヶ野遺跡は、標高約70m強、隆帯文土器を中心に草創期の堅穴住居跡1基・堅穴状遺構4基・土坑6基・配石5基・集石4基が検出されている。石鏃の完成品が300本以上



鬼ヶ野遺跡出土縄文時代草創期遺物

出土し、未製品・石核・チップも多量に出土していることから、石器製作遺跡であり、石斧の破損品とともに砥石もあることから、石斧の修復したものと考えられる。

土器と石器の分布状況から、草創期の長い期間にある時期は狩猟キャンプ、ある時期は丸木舟の部材の伐採・加工、ある時期は堅果類の採集・加工の場であった。

石器は、石鏃では石材に玉髄と黒曜石があ

り、これらは火山岩や熱水鉱床由来のもので、明らかに九州島から持ち込まれたもので、丸木舟の利用が証明される。

このほかに磨製石鏃（図「縄文時代草創期の石器」…3）、鬼ヶ野型尖頭器と呼ばれる尖頭器（同…4～7）、楔形石器（同…13～14）、彫器（同…11～12）、搔器（同…10）などの剥片石器と、丸ノミ石斧などを含む磨製石斧（同…16～18）、ハンマーストーン（同…19）、

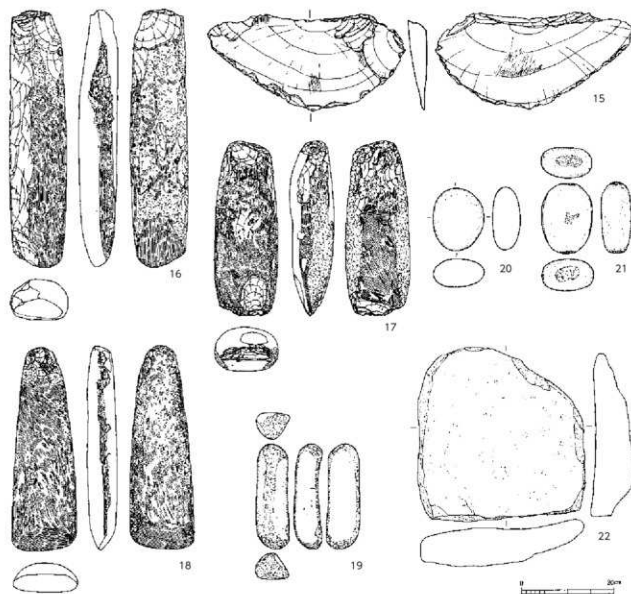
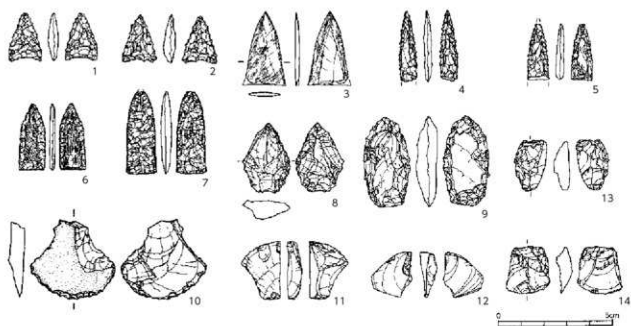
磨石（同…20）、敲石（物をたたいたり、すりつぶすために使われた石）（同…21）、砥石、石皿（同…22）などが出土した。狩猟具も充実しており、磨石・敲石類は多量で植物性食料を中心とする生業もうかがえる。

磨製石鏃の出土は草創期の種子島での出土が顕著で、早期に南九州に拡散するものと考えられる。

鬼ヶ野遺跡、奥ノ仁田遺跡では「楯ノ原型石斧」といわれる刃部が丸ノミ状の磨製石斧が出土している。同様の丸ノミ形状の石斧が沖縄や小笠原硫黄島、種子島や薩摩半島で採集・出土することから、丸木舟を製作する石器であることがわかる。さらに先島地方の貝斧との関連も指摘されている。

温暖化するなかで、食生活で用いる食材の幅は大きく広がっていく。漁労等が占める割合が大きかった可能性があり、三角山I遺跡の土器付着炭化物の分析では、土器で煮炊きされたのは動物質のものであり、特に海産物が含まれていた。

また、土器の圧痕から栽培植物や加害害虫などを調べてみると、1万6000年前以前に有用植物の栽培が開始され、次の段階でアサ・エゴマ・ヒエ・アブラナ科が出現し、織維用の植物以外の食用作物の栽培開始が古く遡る可能性を推定している。

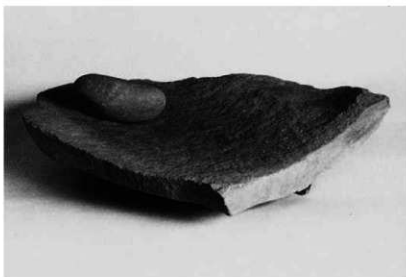


縄文時代草創期の石器 (1~15はS=1/2, 16~21はS=1/4)

1・2・4~9・10~14 鬼ヶ野遺跡, 3・15・19~22 栗ノ仁田遺跡



種子島の隆帯文土器出土遺跡分布図



奥ノ仁田遺跡の磨石と石皿



約1万年前 縄文時代早期の「ムラ」の様子

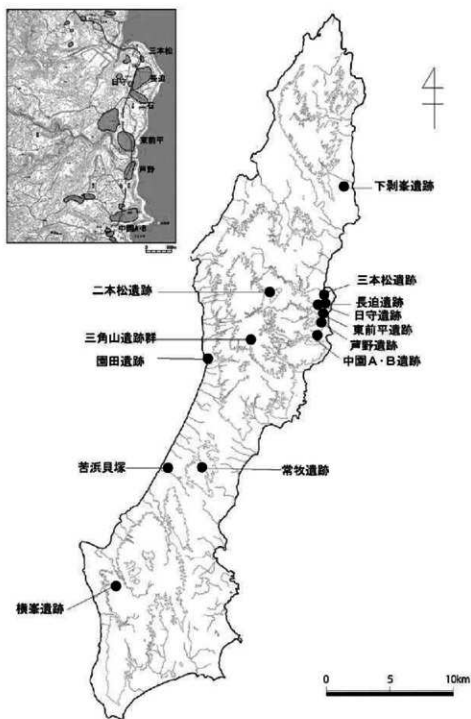
早期

縄文時代早期は、約1万1000年前から7400年前頃までの約3600年間で、縄文文化の基礎がつけられた時代といえる。種子島を含む南九州では、温暖化と歩調を合わせるように、貝殻を使った文様（貝殻文）のある土器が作られた独特な文化が展開するようになる。

草創期の隆帯文土器にも貝殻文が部分的につけられていたが、種子島で出土する早期土器の多くが土器に貝殻を使った文様がつけられている。種子島を含む南九州の早期土器の特徴である。

このことは、この地域で漁労活動など海との関わりが常に盛んであったことを示しており、貝はその象徴であったと考えられる。

本市の東海岸の現和地区から安城・立山地区の県道沿いには、早期の遺跡が多く発見



種子島の縄文時代早期の主な遺跡
(小畑2019を基に作成)

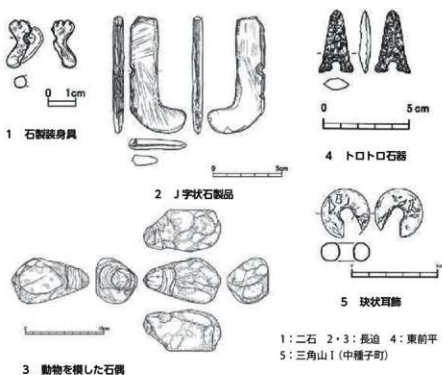
されており、「種子島縄文ロード」と呼ばれている。なかでも早期の人々の暮らしの様子が明らかとなったのが三本松遺跡である。

遺跡は、住居と考えられる竪穴状遺構を中心に、調理施設である集石遺構や石器を製作した跡が見つかっており、集落の中で目的に応じて各施設が作られたと考えられる。遺跡からは、堅果類を粉砕するための道具である石皿・台石と磨石・敲石が多数出土している。

また、西之表市安城の二石遺跡からは石製の装身具（図「縄文時代早期の石製品」…1）、隣接する長迫遺跡からはJ字形石製品（同…2）と動物を模した石偶（同…3）、東前平遺跡からは「トロトロ石器」（同…4）と呼ばれる異形石器が出土しており、祭祀行為に関係するものと考えられる。

前期

縄文時代前期は完新世（水河期が終わり、温暖化が始まった1万年前から現在まで）を通して、自然環境が最も大きく変化した時期といわれている。約8000年前から始まる世界的な気候の温暖化に伴って、いわゆる「縄



1：二石 2・3：長迫 4：東前平
5：三角山I（中種子町）

縄文時代早期の石製品

種子町赤石牟田遺跡・同平六間伏遺跡・屋久島町屋久横峯遺跡でも採集・出土しており、鬼界カルデラ噴火の400年後には種子屋久地域の全域に広がった。
曾畑式土器は、土器の外周全体に幾何学的に文様が描かれる、轟B式土器の次の時期の土器である。分布範囲は朝鮮半島から西北九

文海進（最終水河期以降の海面上昇に伴い、日本周辺で現在の海岸線よりも奥まで海が侵入したこと）が起こり、約7000年前にピークに達する。海水面は現在より3〜5m高かったといわれる。

鬼界アカホヤ噴火は、約7300年前に九州南端から約40mの海底で起こったカルデラの巨大噴火である。大隅諸島では種子島の北部と屋久島の南部の一部を除き、火砕流にのまれ、ほぼ壊滅状態であった。

縄文時代前期では、「轟B式土器」のような、貝殻条痕を地紋として、微隆な突帯を貼りつけ、刺突文などをめぐらせる土器が出土する。泉原遺跡や三角山遺跡・高峯遺跡・仁田本遺跡・南

州、九州の西南部も含めた広い範囲で屋久島の一湊松山遺跡が南のセンターとして機能していたものと考えられる。
曾畑式土器は海岸部のこれらの遺跡以外にも、本立遺跡、寺之門遺跡、指辺遺跡や中種子町千草原遺跡、中種子町京塚遺跡、三角山遺跡などの台地にも分布する。



轟B式土器（鹿屋市牧山遺跡出土の完形品）

中期～晩期

縄文時代中期になると、九州では地域での土器型式が確立し、その土器の中に中国地方

	遺跡名	所在地	時期	遺物名等	備考	報告書等	
北 上	土器	高橋貝塚	南さつま市	晩期	仲原式土器		1963九州考古学18
		市来貝塚	いちき串木野市	後期	藤目系土器		1993町報告(2)
		南閣ヶ浜遺跡	指宿市	晩期	宇宿上層式		1993市報告(14)
		喜水流遺跡	南さつま市	晩期	喜念1式土器		2007埋セ(113)
		中町馬場遺跡	薩摩川内市	後期	面縄西濶式		1987鹿児島古6
				晩期	宇宿上層式		2004村報(2)
		下刺衝遺跡	西之表市	中期	室川下層式		1978市報告(1)
		田之脇遺跡	西之表市	後期	藤目系土器	採集	2021鹿児島考古51
		三角山I遺跡	西之表市	中期	室川下層式		2006埋セ(96)
		一湊松山遺跡	屋久島町	中期	室川下層式	採集	2022鹿児島考古52
後期	面縄前庭式			採集			
晩期	面縄西濶式			採集			
石器	大年田遺跡	伊佐市	後期後半	サメ歯状の石製垂飾品		1981町報告(1) 2005市報告(24)	
南 下	土器・土製品	出水貝塚	出水市	後期	足形土器		2012九研研資料
		前原遺跡	出水市	中期	北裏CⅡ式土器(東海)		2016調セ(10)
		前畑遺跡	薩摩川内市	中期	新崎式土器(北陸)		2003埋セ(56)
		大龍遺跡	鹿児島市	中期	船元式土器(瀬戸内)		1986市報(7)
		仁田尾遺跡	鹿児島市	中期	船元式土器(瀬戸内)		2008埋セ(128)
		山ノ中遺跡	鹿児島市	後期前半	松ノ木式土器(南四国)		2006埋セ(103)
		椋原貝塚	垂水市	後期	動物土製品		2006市報告(9)
		濃畑・芝原遺跡	南さつま市	後期	足形土器		2010埋セ(151)
		松美堂遺跡	伊佐市	中期	船元式土器(瀬戸内)		1990町報(5)
		前谷遺跡	志布志市	中期	船元式土器(瀬戸内)		1986町報(1)
		桐木・耳取遺跡	曾於市	中期	北屋敷式(東海)、船元式土器(瀬戸内)		2005埋セ(91)
		中原遺跡	志布志市	後期前半	雷毛式土器(西南四国)		1985町報告(9)
		干迫遺跡	姪良市	後期	加曾利B式土器系の未塗り注口土器		1997埋セ(22)
		榎木原遺跡	鹿児島市	中期	船元式土器(瀬戸内)		1987県報(44)
		石鉢谷B遺跡	鹿児島市	晩期	三叉文土器、その二次加工品		2011発掘調査
		下刺衝遺跡	西之表市	中期	船元式土器(瀬戸内)		1978市報告(1)
		浅川崎遺跡	西之表市	後期	福田KⅡ式土器(瀬戸内)		1994埋セ(10)
		花里崎遺跡	西之表市	中期	里木Ⅱ式土器(瀬戸内)	採集	2022鹿児島考古51
		大花里一之鳥居貝塚	西之表市	後期前半	雷毛式土器(西南四国)	採集	1989潮流(3)(5)
		大園遺跡	中種子町	晩期	大洞C式土器		1999県報告(24)
藤平小田遺跡	南種子町	中期	船元・里木系土器(瀬戸内)		2002町報告(9)		
宇宿小学校遺跡	奄美市	後期	津雲A式土器		2003奄美考古5		
ウツタ遺跡	龍郷町	晩期	大洞C2新(東日本系)		2002町報告(2)		
石 器	土器	出水貝塚	出水市	後期	刻文付石皿	採集	2003縄文時代14
		御岳遺跡	出水市	後期	刻文付石皿	採集	2003縄文時代14
		麦之浦貝塚	薩摩川内市	後期	刻文付石皿		1987川内市土地開発公社
		草野貝塚	鹿児島市	後期	刻文付石皿		1988市報告(9)
		上之城遺跡	南さつま市	後期	石棒		1980市報告(2)
		市ノ原遺跡	日置市	晩期?	三角講式土製品、石製品		2006埋セ(105)
		椋原貝塚	垂水市	後期	石刀		2006市報告(9)
		塚ヶ段遺跡	曾於市	晩期	石刀		1998町報告(17)
		干迫遺跡	姪良市	後期	石冠		2012九研研資料
		水の谷遺跡	鹿児島市	晩期	石刀		1986市報告(5)
		天神段遺跡	鹿児島市	晩期	石刀		2016調セ(6)
		町田塚遺跡	鹿児島市	後期	天附型石刀		2016調セ(7)
		牧山遺跡	鹿児島市	後期	石冠(中部地方)		2021調セ(44)
		石鉢谷B遺跡	鹿児島市	晩期	石冠		2011発掘調査
		藤平小田遺跡	南種子町	後期	三角講形石製品		2002町報告(9)
		屋久島橋峯遺跡	屋久島町	後期	石棒	住居跡	2004町報告(2)
		宇宿小学校遺跡	奄美市	後期から晩期	刻文付石皿		2003奄美考古5
		半川遺跡	龍郷町	後期から晩期	石棒		2005町報告(4)
		中里遺跡	天城町	後期から晩期	三角講形石製品	採集	2010町報告(4)
		沖縄県(九州島からの由來土器型式を除く)					
土 器・ 石 器	伊礼原遺跡	北谷町	中期	船元式土器(瀬戸内)		2010町報告(26)	
	平安山原B遺跡	うるま市	晩期	大洞A1式土器		2017南島考古36	
	宇佐浜貝塚	国頭村	後期から晩期	刻文付石皿		1989県報告(93)	
	ヌバタキ	宜野湾市	晩期	石棒	石柱	1991市報告	
	平敷屋トウバル遺跡	うるま市	後期	線刻石版		2014市報告(22)	
具志堅貝塚	本部町(弥生)		石冠		1986町報告(3)		

*埋セは鹿児島県立埋蔵文化財センター、調セは(公財)鹿児島県文化遺産調査センターを指す。市町村報告は現市町村と合併前の市町村報告がある。

縄文時代中期～晩期の交流を示す土器と石製呪術具

の土器が紛れ込むようになる。前期のように広域な土器型式が九州全域で使われることはなく、他地域の土器が持ち込まれる。

前頁の表「縄文時代中期～晩期の交流を示す土器と石製呪術具」に見られるように、中期以降、北の北陸・東海、南は沖繩の土器が見られ、列島の広い交流がうかがわれる。特に後期になると、東日本縄文文化で盛んに使用される石刀・石棒・石冠などの石製呪術具が出土するようになり、種子島・奄美・沖繩まで縄文文化化したといえる安定した社会を形成していった。新潟県糸魚川産のヒスイの大珠の再利用用品が現和果で採集されており、列島全体の玉文化とつながっている。

そして土器圧痕等の研究から、後期後半からヒエ・アズキ・ダイズなどの在来系栽培植物とアサ・ヒヨウタン・シソ属などの外来系栽培植物が全国に広がり、植物の栽培・管理の役割が大きくなることから、縄文人を「狩猟・栽培民」と再定義する学説がある。打製石斧などは土地に対する働きかけや除草・栽培、枝払いなど多様に使われた石器とされ、南九州・大隅諸島で多く出土するようになる。後期から晩期には九州・大隅諸島・奄美大島・沖繩に、規模の大きな集落が形成されるようになり、屋久島の屋久横峯遺跡のように各島にも拠点的な「ムラ」が存在する。

一定期間暮らした後に、また別の集落適地に移動を繰り返していた。また木材伐採や漁業や交易などで小さな「ムラ」が作られることもあった。

晩期になると、種子島・奄美大島・沖繩本島で、東北の大洞系土器が出土し、東日本縄文文化の南下が続く。朝鮮半島からの畑作文化も九州島へは南下してくるが、種子島に伝わったかは不明である。米や稲作は知っていたも、縄文文化の生活をしばらく続けて、少しずつ稲作が導入されていく。

人々は、円形の堅穴住居に住み、小集落を形成し、小型犬を伴って狩猟生活を送り、海岸近くでは、貝を採集し、海棲哺乳類（生活史の一部又は全部を海洋で過ごす哺乳類）や大型の魚類を含む漁労活動を行っていた。

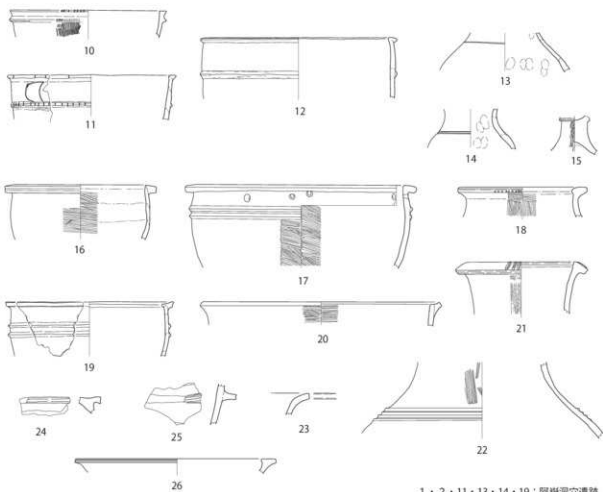
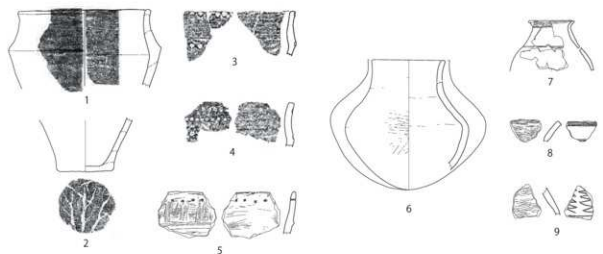
第4章 弥生時代・古墳時代相 当期

弥生土器は、朝鮮半島の土器文化が日本列島に受容され、さまざまな文様で器面を飾る縄文土器と異なり、無文化（文様を多くは描かない）と器種（食器類の組み合わせが増加する。特に甕形（煮沸具）、壺形（貯蔵具）、

高坏形・鉢形（供膳具）が主要な器種である。種子島を含む大隅諸島における弥生土器文化は、当然ながら、地理的に近い九州南部の影響を受けている。

弥生時代早期～前期土器とされる突帯文系土器の存在は明確でなく、縄文時代晩期の黒色磨研系土器の黒川式土器を系譜に持つ深鉢形が、この時期まで存在していた可能性が高い（図「種子島の弥生時代相当期の土器（前期～中期）」1～6）。弥生時代中期は、ほぼ九州南部の土器様式変化に連動し、前半から後半にわたり、入来Ⅰ式土器（同・11～13）、入来Ⅱ式土器（同・14～18）、山ノ口式土器（同・19～26）という変遷をたどる。これまでに弥生時代中期に、他地域の土器の持ち込まれた例は確認されていなかったが、西之表市教育委員会取蔵庫資料内に、九州北部の須玖Ⅱ式甕（同・27）と九州中部の黒髪Ⅱ式甕（同・28）が保管されていることが判明した。現和の泉原遺跡採集品のケースに保管されていた。下洞峯遺跡で出土するような口縁部と突帯間を沈線文（木・竹・貝などを引きずって、直線や曲線などを描いた文様）で埋める土器については、奄美弥生系土器群との関わりも指摘されている。

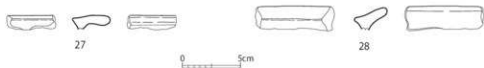
弥生時代後期については、後半段階に相当する土器として地域性の強い鳥ノ峯式土器が



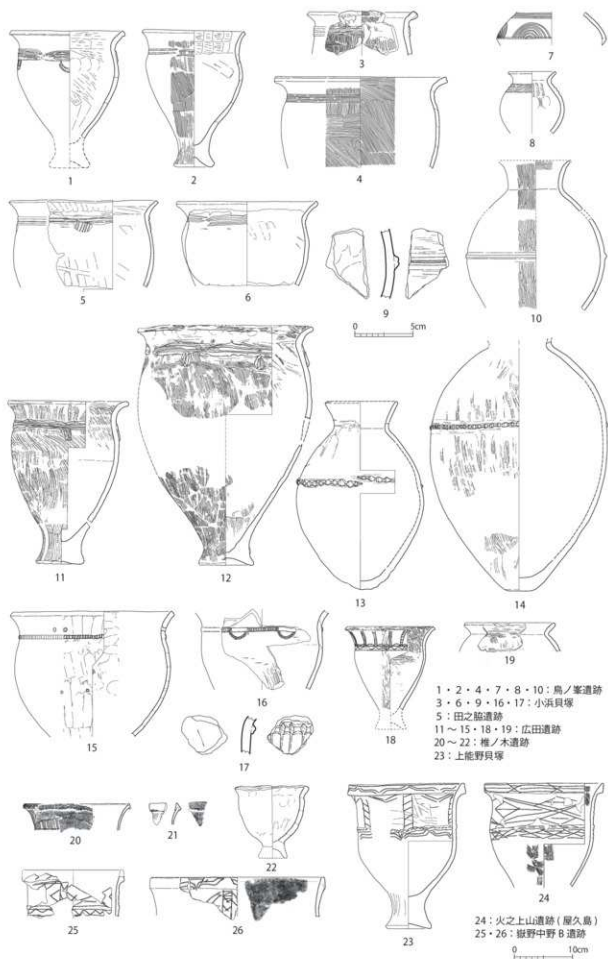
1 ~ 22 (S=1/8)
27・28 (S=1/4)

0 10cm

1・2・11・13・14・19：阿根洞穴遺跡
3～6・10・12・15：大園遺跡
7～9：広田遺跡
16～18・20～22・26：下刺峯遺跡
23～25・27・28：泉原遺跡



0 5cm



種子島の弥生時代後期～古墳時代相当期の土器

存在する（図「種子島の弥生時代相当期の土器（前期～中期）」・7・10・13・14）。種子島の弥生土器は、弥生時代前期まで縄文時代晩期の形態を保持すること、中期に九州南部の様式圏に取り込まれること、後期前半期が不明であること、後期後半になって壺形の製作をやめ、他地域から持ち込んでセットにすることなど、興味深い現象が見られる。

弥生時代の墓

種子島で確認される先史時代の墓は、弥生時代後期から古墳時代のものがほとんどで、その大半が海に近い砂丘で確認されている。

現和田之脇の砂丘地に位置する埋葬遺跡で、工事中に3体分の人骨が出土したが、確認発掘調査では、1基の覆石墓を検出した。上浅川遺跡は、現和上浅川の砂丘地に所在する埋葬遺跡で、覆石墓1基が検出されている。

中種子町・鳥ノ峯遺跡は、30基以上の墓が確認された集団墓地として知られる。中種子町増田中瀬の浜に所在する砂丘上の埋葬遺跡で、本格的な発掘調査は、昭和36年（1961）、同41年・同46年の3次にわたり、覆石墓と土坑墓合わせて計37基の墓が検出され、人骨は31体分ある。この遺跡では、覆石上部におけ

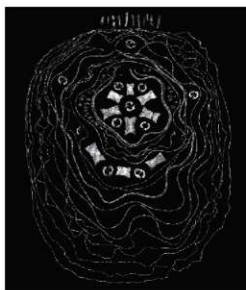
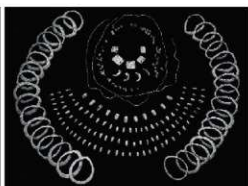
る、燔火（死者を祀るために墓で燃やす火）跡や供献土器の多さが特徴である。おそらく祭祀行為の痕跡と考えられる。また、副葬品として墓坑内外のヤコウガイ容器やシャコガイ、貝製装身具も認められる。また、鉄鏃を真似た磨製石鏃の出土も多く、墓に副葬された可能性がある。貝製、骨製などの装身具を持つ被葬者は認められない。

古墳のつくられなかった種子島

この時代の種子島・屋久島には、前方後円墳の造営はなく、古墳文化は波及していないといっているが、鉄器、ガラス玉などの散発的な出土が認められているため、外部との接触によってもたらされたものと考えられる。また、貝釧（貝輪）などは、次に述べる広田遺跡の状況から、種子島が主要な供給中継地として想定されている。

広田遺跡は、南種子町平山広田の砂丘地の埋葬遺跡で、昭和32年（1957）から3年間にわたって発掘調査が行われた。広田遺跡では、多数の墓が検出されており、集落構成員の共同墓地である。

埋葬人骨数は158体とされ、埋葬遺構のタイプは、〔下層〕覆石タイプ→馬蹄状配石タイプ→箱形石槨タイプ→〔上層〕石囲



左：D-III-2号人骨装身具
右：D-I-5号人骨装身具

広田遺跡の貝製品の種類

（タイプ）の順に形成される。埋葬された90%の人骨が何らかの貝製品を伴うが、貝輪の保有率は女性が多く（女性骨中95%）、貝符の使用にはさほど男女差がない。貝符が下層の装飾品から上層では儀礼品へと変化し、下層では貝符と貝小玉を多く持つことを特徴とす



ま

4世紀頃 南島産貝を積んで帰港の様子

る「貝符・小貝玉型」と、貝輪と貝大玉を多く持つ「貝輪・大貝玉型」の系統が並存する。「広田型装身様式」があり、前者が女性、後者が男性のように性差が認められるという。

その後、平成16～18年（2004～06）の南種子町教育委員会の調査により、新たに北区で9基、南区で11基の墓が確認された。地中レーダー探査の結果を基にすると、まだ144基以上の墓が残存すると想定される。

豊富な貝製品を伴う種子島特有の墓制のあり方と、列島の文化形成の多様性を知るうえで重要であると平成20年に国史跡に指定されている。

このほかに、椎ノ木遺跡は馬毛島西南端の砂丘に位置する埋葬遺跡で、覆石墓1基が検出され

た。人骨からは背筋などの強度の発達が見られることから、漁労に依存していた可能性も示唆されている。横峯遺跡は現和字横峯の台地斜面に所在する埋葬遺跡で、円形溝墓が1基検出された。上能野式土器段階に台地上の埋葬遺跡が出現し、弥生時代から九州に見られる円形溝墓が存在した。

上能野貝塚は住吉上能野の砂丘地に位置する遺跡宅地造成・県道・市道工事によって12体以上の人骨が出土している。上能野貝塚については、近年未報告であった遺物類の再整理が行われ、土器は上能野式土器（古・新）で構成され、石器は磨石・敲石を主体として、石斧、礫器、石鏃、線刻礫が少量認められる。貝製品は弥生時代とほぼ同様で、オオツタノハ貝輪、ゴホウラ貝輪などがあるが、ヤコウガイ貝匙、イモガイ加工品などは、鳥ノ峯遺跡・広田遺跡と同様に、古墳時代相当期になつてから加わるものであると考えられる。鹿骨製の大型管玉もこの時期に新たに加わる装身具である。貝塚からの上能野式土器にもイネの圧痕が確認されるため、弥生時代相当期から連続したイネの栽培の可能性が指摘できる。

第2編 古代

《西之表市史》第三編古代

第1章 古代の種子島

「日本書紀」の掖玖と「隋書」の夷邪久國

「日本書紀」に初めて登場する南島の人々を「ヤク人」である。推古天皇24年(616)には、合わせて30人のヤク(掖玖・夜勾)人がやって来て、林井(奈良市西本辻町や岸和田市西之内などの説がある)に安置したが、帰らないうちに皆死亡した。推古天皇28年(620)には2人のヤク人が伊豆島に流れ来た。舒明天皇元年(629)には、田部連をヤクに派遣し、翌年には帰朝した。さらに、舒明天皇3年(631)にはヤク人が帰化してきた。ここに見えるヤクは、南西諸島の総称と考えられる。

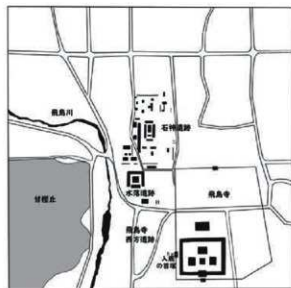
『隋書』流求伝によれば、皇帝(高祖)は、607年と608年に朱寛を流求に派遣し懐柔しようとしたが、流求が従わなかったため610年に兵を派遣し攻撃した。朱寛が608年に

流求から持ち帰った武器を見て、倭国からの使者が「夷邪久国^{ヤククニクニ}人^{ヤクノヒト}」が使用するものであると語ったことが記されている。この倭国からの使者は、小野妹子の一行であり、流求は奄美・沖縄地方を指す可能性がある。隋による流求への使者派遣や攻撃の目的は、朝貢を促すことにあり、奄美・沖縄地方で採れるヤコウガイの需要を満たすためであった可能性も指摘されている。

天武・持統期の南島・倭人政策

7世紀後半は、東アジア情勢が混乱した時代であった。660年、唐・新羅の連合軍によって倭国との繋がりが深かった朝鮮半島南部の百済が滅亡し、668年には北部高句麗も滅亡した。百済・高句麗のゆかりのある土地を唐が占領したため唐・新羅戦争が起こり、新羅は、唐との対抗関係上、敵対していた倭に接近し、良好な関係を求めるようになった。

671年から676年まで新羅軍と唐軍の



飛鳥寺周辺の遺跡



入鹿の首塚から飛鳥寺西方遺跡をみる



飛鳥寺西方遺跡（明日香村教育委員会提供）

交戦が続いたが、676年ついに新羅によって朝鮮半島が統一された。

このような東アジア情勢のもと、天武天皇の時代には、南方政策の中で、多彌島人の来朝や使者を派遣しての多彌島の探索など、多彌への政策が先行して実施されている。

『日本書紀』によれば、天武天皇6年（677）

に初めて多彌島人の朝貢が確かめられる。2年後の同8年（679）には、政府は多彌島を探索する使者を派遣した。そして、さらにその2年後に、使者は多彌島人を伴って帰朝し、探索の結果を報告した。

長い調査期間は、多彌島の調査だけではなく、種子島以南の島々や、隼人が住む南九州にも朝貢を促すためのものであったと考えられ、天武天皇11年には大隅隼人・阿多隼人、多彌人・掖玖人・阿麻弥人が来朝している。

多彌島人や隼人への饗応が行われた場所が「飛鳥寺の西」であった。これは、「飛鳥寺の西の槻の下」とも呼ばれる場所で、天武・持統期には蝦夷のもてなしも行われており、国家的な儀礼空間であった。その一部は、飛鳥寺西方遺跡として発掘調査が行われている。

天武・持統期の外国使節（新羅使）は筑紫でもてなされ飛鳥まではやって来ていないので、多彌島人・隼人・蝦夷は外国使節とは区別される集団であったことがわかる。

『統日本紀』によれば、文武天皇2年（698）文忌寸博士ら8人を南島に派遣した。この使節は国見使と呼ばれ、翌年、多槻・夜久・菴美・度感などの人を引率して帰朝した。度感らは徳之島のこととされ、度感はこの時初めて日本との関係を持ったとされている。国見使派遣の目的は、さらなる朝貢域の拡大と、こ

の後に派遣が予定されていた遣唐使のため、南島路を開発することであった。

日本古代の7世紀から8世紀にかけてつくられた中央集権国家を律令国家といい、大宝元年（701）には、大宝律令がつくられて、律令国家の仕組みが整った。

多槻嶋の時代

●多槻嶋の成立

現在の種子島・屋久島を中心とした地域は、8世紀初頭から9世紀前期にかけて多槻嶋という国に準じる行政単位に編成されていた。

『統日本紀』大宝2年（702）8月丙申朔（1日）条に「薩摩と多槻は天皇の徳のある政治が及ばず、命令に逆らっていた。そこで兵を遣わして征討し、ついに戸口を調査して役人を置いた。」とあり、この記事が薩摩国と多槻嶋の成立を示すと考えられている。大宝2年に役人が配置された多槻嶋であったが、地方行政機関としての多槻嶋の体制が整うには、もう少し時間が必要であった。

●多槻嶋の嶋司と郡司

政府が設置した律令制の国は、その財政規模や重要性によって大国・上国・中国・下国の4等級に分けられた。多槻嶋は、財政的に



多機嶋木簡 (奈良文化財研究所提供)

みると下国のはずであったが、政府の南島支配の拠点とされたことなどにより等級は中国とされ、守・掾・目・史生などの嶋司が政府から派遣され、行政を担当した。嶋司の給与は、基本時に大宰府が支給した。

昭和59年(1984)に奈良文化財研究所によって行われた平城宮第155次調査で、SD1164という溝から多機嶋に関わる木簡が出土した。この木簡は、溝の年代から、713年以降720年代に収まる時期に使用されたものと考えられ、多機嶋の役人(嶋司・郡司)の勤務評価に関する木簡である。

律令制における役人の勤務評定制度は考慮制度とも呼ばれ、考(毎年の勤務評定)と選(一定年限の考の積み重ねによる位階の授与)とから成り立っており、式部省が担当した。この木簡は、多機嶋官人の評定結果を記した

考文6巻とその審査材料を記した考状6巻、計12巻を一括したものにつけられた付札で、式部省において行われた考選の事務処理に際して付けられたものである。

『続日本紀』には、天平5年(733)に多機嶋の熊毛郡・益救郡・能満郡の郡司の一族などに姓を与える記事が見える。

郡司は終身の官で、地方政治において大きな権限を与えられていたため、同じ郡の中で同姓の者が郡司を務めることは禁止されていた。しかし、多機嶋では郡司の一族に同じ姓が与えられていたため、特例として、同姓の者が郡司に就任することが認められた。

●多機嶋の嶋府と嶋分寺の所在地をめぐって

一般に国司が政務をとる中心の建物群を国庁と呼び、国庁をとりまく一国の中心地を国府という。国に準じる嶋も同様である。多機嶋府の所在地としては、①国上説、②西之表説、③中田(中種子町)説、④島間(南種子町)説、⑤島間(西之表移動説などがある。古代史料にもその所在地を載せず、また現在までそれらしい遺跡も発掘されていないため、そのいずれとも決定できていない。

しかし、島間(西之表移動説は、西之表の立地などの指摘は説得力があり、種子島北部である熊毛郡の大領一族が有力者であることも相まって、西之表に嶋府があった可能性はかなり高いのではないかと考えられる。その場合の中心施設は、榕城小学校・旧榕城中学校付近であろう。

天平11年に因分寺建立の詔が出されるより前の段階で、「天平十年筑後国(現在の福岡県)正税帳」には、正式の手続きを経て僧侶となった2人の者に、多機嶋に帰るための旅費を支出したことが記載されている。その嶋分寺の位置は、不明とせざるを得ない。

●多機嶋の駅家をめぐって

駅家は、都と国府とを結んだ官道に置かれて駅使に宿や食料を供給した施設であるが、多機嶋にもその存在をうかがわせる史料がある。一つは「弘仁式」主税の「佐渡・隠岐・壹岐・対馬・多機等の国嶋の駅子や海を渡る送使に食糧を支給するのは、1日に桶4把」という駅子や送使に食料を支給する規定である。もう一つは「天平十年筑後国正税帳」であり、多機嶋人が官牛馬の皮を大宰府に運んでおり、渡海送使や馬の置かれた駅家が存在したのであろう。浦田港に近い国上、嶋府付近、島間、益救郡(宮之浦)、取謨郡(麦生)



海獣葡萄鏡



大広野神社

に駅家が置かれたとする説があるが、例えば嶋分寺候補地の国上寺之門に存在する太田遺跡からは、8世紀後半の須恵器や9世紀、10世紀末の土師器などが出土しており、国上にあったのは国府や国分寺ではなく、駅家であった可能性もあろう。

西之表市上西大崎所在の大広野神社には唐時代に中国で流行した鏡である海獣葡萄鏡が伝来している。この海獣葡萄鏡は、文様が鮮明でないことから、日本で奈良

時代に製作されたものと考えられている。この鏡が大広野神社に納められることになった経緯は不明であるが、大広野神社のある西之表市上西大崎は浦田港と西之表をつなぐ位置にあり、浦田港に入港した船からもたらされたものかもしれない。また、次に紹介する奈良時代後半以降に都から多岐嶋に配流された人物が持っていたものである可能性など、さまざまな想像ができそうである。

●多岐嶋にやって来た人々

舒明天皇2年(630)第1次遣唐使が派遣されてから、中



遣唐使のルート

古瀬奈津子「隋唐と日本外交」『日本の対外関係2 律令国家と東アジア』(2011年 吉川弘文館)の図を基に作成

止され派遣されることはなかった最後の寛平6年(894)の第20次遣唐使までの間に、多岐嶋(種子島・屋久島)に到着した遣唐使が、2回ある。天平5年(733)の第9次遣唐使と、天平勝宝4年(752)の第11次遣唐使である。

第9次遣唐使は、天平5年4月に船4艘で難波津を出発し、天平6年10月には蘇州を出発して帰途に着いたが、まもなく悪風に遭い、

	西暦	配流人	理由	備考	出典
天平勝宝6.11.丁亥	754	外従五位下大神朝臣多麻呂	呪殺の呪法を行う	宇佐八幡宮司 12年後に免赦	『続日本紀』
天平宝字4.5.戊戌	760	右大舍人允正六位下大伴宿禰上足	災いを十箇条記し、 世間に伝えた	據に左遷	『続日本紀』
天平宝字5.3.己酉	761	藤原王とその息子・娘6人	殺人	藤田真人賜姓	『続日本紀』
天平神護元.1.戊戌	765	大宰大貳從四位上佐伯宿禰毛人	逆党(藤原仲麻呂)に 坐す	守に左遷	『続日本紀』
宝亀元.8.庚戌	770	從五位下中臣習智朝臣阿曾麻呂	道鏡事件に関係	守に左遷。2年後 に大隅守	『続日本紀』
延暦22.8.辛卯	803	右京人正六位上長倉王	天皇への不敬発言		『日本後紀』
延暦24.10.戊午	805	播磨国伊弉吉弼侯部兼麻呂・ 吉弼侯部色雄等10人	野心が改まらず		『日本後紀』
弘仁3.8.癸巳	812	僧良勝	女性と同車	天長10年に帰京	『日本後紀』

多撰嶋へ左遷・配流された人々

4船は離散した。乗遣唐大使の多治比真人広成が乗船していた第1船は多撰嶋に着き、天平7年の3月10日に入京して節刀を返却し、25日に拜朝している。また、第11次遣唐使は、天平勝宝4年に4艘の船で唐に向けて出発、天平勝宝6年、唐僧鑑真を伴い、日本への帰国の途についた。第1・2・3船は阿児奈波(沖繩)もしくは沖永良部島)に到着。その後、第1船が座礁して動けなくなり、第2・3船は多撰嶋に向けて出発し、益救島(屋久島)に到着した。

流罪は律令に定める5種の刑罰の一つで、流刑に処することを配流という。史料で確かめられる多撰嶋への左遷・配流は、上の表のとおりである。多撰嶋司への左遷が3例、配流が5例確認できる。

多撰嶋への配流が確かめられるのが、8世紀後半からであるのは、この頃に受け入れ体制が整ったためであろう。特別な許しがなければ配流地で一生を終えることになり、赦免記事のある大神多麻呂、掃京記事のある良勝以外は、多撰嶋で一生を終えたと思われる。

●多撰嶋の廃止

大宝2年(702)に成立した多撰嶋であったが、天長元年(824)に多撰嶋は廃止のうえ、大隅国に編入された。その経緯は、

太政官が、天皇に多撰嶋の廃止を意見具申し、天皇は所管の大宰府の意見を聴取することを命じ、太政官は大宰大貳小野峯守の意見を聴いたうえで、正式に天皇に対して、多撰嶋廃止と4郡を2郡に減らしたうえで大隅国へ併合することを奏上し、天皇が許可を与えたということになる。

その太政官奏によれば、嶋司の給物は稲で3万6000束余りが必要とするが、嶋は鹿皮1000領余りしか納めておらず、損が多くて益が少ない、往復する役人や税を運ぶ人々の中に漂流し死亡してしまう者が多いことなどを直接の理由としているが、その背景には大きく2つの事情があった。

1つ目は、多撰嶋を維持し続ける積極的な意義が大きく減じていたことである。多撰嶋は南島人の朝貢支援、遣唐使の往來の支援、華人支配の後方支援などのために設置されたが、9世紀に入ると、これらの目的が達成され、あるいは無実化していた。

2つ目は、財政問題である。多撰嶋を維持するための財政負担が、疫病・飢饉による税収減やその救援のための支出増大によって財政難に苦しむ大宰府に重くしかかっており、税収確保や農民生活安定のため弘仁14年(823)に導入された公営田制(田地を国家が直接管理し、耕作させる制度)によって、

多楸嶋の維持財源であった公田地^{コノチ}（地主がいらない田を耕作した農民が払う賃借料（地子）などが激減して、多楸嶋司の人件費などを支給し続けることが困難になっていた。

第2章 多楸嶋停廃後

9 10世紀の大隅国と南島

多楸嶋は天長元年（824）に、それまでの熊毛・野満・護謨・益救の4郡を熊毛・護

謨の2郡に再編したうえで大隅国に併合された。大隅国は菱刈郡・桑原・噺歌・大隅・始羅・肝属・馭謨・熊毛の8郡になり、これが近世初期まで続くことになる。

律令制度は、戸籍などにもとづいて人々を把握し、税を取り立て、これによって国家財政を支えていたが、9世紀以降これがうまくいなくなっていく。そこで、政府は、赴任する国司の最上位者（受領）に、大きな権限を与えて、地方政治の運営と財源の確保を担わせた。大隅国でも、全国と同じような動向が確認できる。

一方、南島産品の需要は大きかったようで、

多楸嶋が廃止されると、その交易拠点を南下させ、喜界島（大島郡喜界町）に置いたとも考えられている。同町の城久遺跡では、大宰府との関係をうかがわせる遺物が確認されている。

旧多楸嶋の神社に関する古代の文献史料として、まず大同元年（806）の神社・寺院の封戸に関する「新抄格勅符抄」に「益救神一戸 多祢嶋」とある。この史料には、西海道で9神、南九州では益救神のみが挙げられており、益救神は南九州では最高位であった。

10世紀初頭の「延喜式」神名帳には、大隅国で鹿児島神社・大穴持神社・宮浦神社・韓国字豆峯神社・益救神社の5神、神名は省略するが日向国で4社、薩摩国で2社が挙げられている。このうち大座とされたのは鹿児島神社であり、南九州における益救神の位置付けは後述している。

天喜2年（1054）2月27日付「大宰府符写」を収める「調所氏家譜」は、薩摩藩の天保の改革を推進した調所広郷（1776～1849）の時代にまとめられたと考えられている。この大宰府符は、大隅国内の神々の神位を1階ずつ上げことを命じたものである。大隅国全体では、200以上の神名が挙げられていた可能性が高いが、終わりに近い部分の、郡名を欠く3神（おそらく始羅郡、



『調所氏家譜』（東京大学史料編纂所所蔵）



浦田神社

肝属郡49神、取誤郡13神、熊毛郡30神の全部で95の神階・神名が挙げられている。この史料に見える熊毛郡（種子島）の神位と神名は以下のようになっている。

従三位 国玉大明神・五国玉大明神・海子大明神・菅男大明神・海男大明神・稲男大明神・上社大明神・辟大明神・高屋大明神・下浦大明神・雄大明神・江良貴大明神・屎世大明神・神玉大明神・平世大明神・新島大明神・子奈儀比之瀬大明神
正四位下 豊嶽明神・真長明神・愛雄明神

従五位上 以世明神・妻明神・笠明神・談志明神・楊田明神・栗尿峯明神・大佐吉明神・瀬明神・永（水カ）上明神

ここに名前の挙がる神々がどのような神々であったのかほとんどわからない。その中で、大佐吉明神は、西之表市上西の大崎にある大崎神社の可能性もある。また、従五位上の最初に見える「以世明神」となっているが、「調所氏家譜」の写本にあたると、「以」は竹冠らしいので、「笹明神」とすることができると明神は、同市国上の浦田神社の古名であるともされている。

浦田浦は、種子島の最北端に立地する良港で、「薩隅日地理纂考」は浦田神社に関連し

て、「彦火々出見尊が海宮から帰還した際、五穀の種をもたらしてこの島に蒔き農耕牧畜を始めたので、種子島と名付けた」という古老の伝説を載せている。

この断簡で神位を見てみると、護謨郡（屋久島）の最高位は兼悉日明神の従四位下であって、肝属郡には従二位、熊毛郡（種子島）には従三位の大明神がまつられているから、『延喜式』神名帳から約1世紀を経たこの時期、屋久島にまつられた神は、南部九州どころか大隅国内においても大きくその地位を後退させている。

南蛮襲来事件と島津荘

長徳3年（997）、大宰府から政府に、奄美島人が、筑前・筑後・肥前・薩摩・老岐・対馬を襲撃して多くの人を拉致し、それ以前にも大隅国から400人を拉致したとの報告がなされ、翌年大宰府はキカイガシマに南蛮追討を命じた。寛仁4年（1020）に南蛮が薩摩の人民を拉致する事件が起こり、天喜2年（1054）にも南蛮の襲来事件が起こっていた可能性がある。この時期、夜久貝（ヤコウガイ）・赤木・檳榔などの南蛮産品がさかんに交易されており、薩摩・大隅の国司や地元有力者たちも南蛮交易に関わっており、

南蛮襲来事件の背景には、こうした交易上のトラブルがあったと考えられる。

万寿年間（1024～28）に、大宰大監平季基が関白藤原頼通に奇進することで、現在の宮崎県の都城盆地に島津荘が成立し、これは薩摩・大隅両国にも拡大した。また、大隅国内では、大隅正八幡宮の荘園も成立・拡大していった。11世紀後期以降の荘園整理政策などの影響もあったが、島羽院政のもとで藤原忠実の時代に、摂関家領島津荘は大きく拡大した。島津荘は、排他の支配が行われていた一円荘と、年貢の一部を国衙に納める寄郡からなっており、建久8年（1197）の「大隅国因田帳」によれば、種子島は一円荘の「多福島」となっている。「種子島家譜」巻一によれば、多福島は上郡・中郡・下郡に分けられ、それぞれ高野入道・野間入道・熊毛入道が治められているとあって、律令的な郡郷制が大きく改変されていることが分かる。

なお、西之表市現和西病院房遺跡では越州窯系青磁や長沙窯青磁水注が、南種子町基永の松原遺跡や日ノ丸遺跡では越州窯系青磁が出土している。こうした陶磁器は中国から輸入されたもので、種子島の各地に有力者が登場していることがわかる。

第3章 鎌倉幕府の南島支配

治承元年（1177）に、後白河法皇の側近である俊寛らは平家打倒計画に失敗し、キカイガシマに流罪となった。この島は、11世紀頃から日宋貿易の主要輸出品となった硫黄を産出するイオウガシマ（三島村の薩摩硫黄島）であり、鎌倉時代にもたびたび流刑地として利用された。

治承4年（1180）8月、頼朝の挙兵で始まった治承・寿永の内乱は、元暦2年（1185）3月の壇ノ浦の戦いで平家が滅亡して終わるが、その後、頼朝と義経の対立が深まった。

頼朝は、文治3年（1187）、義経の与党がキカイガシマに隠れているとの疑いから、九州に滞在していた天野遠景のもとに、宇都宮信房を派遣し、ともにキカイガシマを征討することを厳命した。

この時、頼朝が征討を命じたキカイガシマは、薩摩硫黄島ではなく喜界町喜界島であると思われる。喜界町喜界島の城久遺跡は、11世紀後半〜12世紀にかけて最盛期を迎えている。

さて、嘉祿3年（1227）10月10日付の左衛門尉惟宗忠義宛ての將軍藤原頼経安堵下

文には「島津庄内薩摩方地頭守護職並びに十二島地頭職」が見えており、「十二島地頭職」は頼朝のキカイガシマ征討によって設定された所職と考えられる。また、「平家物語」の諸本によれば、十二島は、端五島と奥七島からなるというが、奄美諸島には、何らの所職も設定されていない。

●種子島の地頭

この時期の十二島及び種子島の地頭について、『種子島家譜』巻一は、初代信基に関して、清盛―基盛―行盛―信盛という系譜を載せており、さらに、種子島氏の祖肥後守時信（のち信基）は北条時政の養子となり、時政の執奏によって当島（種子島）ほか十二島を与えられて当島に入ってきたとする。

十二島の端五島については、竹島・硫黄島・黒島・口永良部島・屋久島とする説と、竹島・硫黄島・黒島・宇治群島・草垣群島とする説があるが、『種子島家譜』では十二島を種子島・屋久島・永良部島・硫黄島・竹島・七島としていて、端五島に種子島を含めて、黒島を除いている。

なお、『平家物語』では、十二島を「さつまがた」としており、基本的には

薩摩国の枠内と認識している。応永15年（1408）10月8日付の島津元久宛行状には、島津元久は忠節に対する賞として屋久島・口永良部島を種子島清時に与えている。中世後期の段階では屋久島・口永良部島が薩摩国の一部として認識されていたことがわかる。ただし、種子島が薩摩国の枠内で認識されていたことは確認できない。



『種子島家譜』より大浦口氏部分

第1章 種子島氏の系譜

中世の種子島

中世の種子島氏の歴史は、肥後氏が入島し、やがて支配を確立、種子島氏を名乗るようになってから躍動する。図「種子島家略系図」に種子島家の歴代当主を示した。

初代信基の生没年は不詳である。父は平行盛と伝わる。信基は北条時政の養子となり、種子島・屋久島をはじめとする十二島の支配を認められたといふ。

しかし、このような「種子島家譜」の記述をそのまま史実とするわけにはいかず、慎重な検討が必要である（第2章「種子島氏の出自と入島」参照）。

中世期には、11代時氏の時代に法華宗への改宗、14代時堯の時代に彌寝氏による侵攻や鉄砲

伝来といった大きな出来事があった。

文化8年（1811）に成立した「種子島家譜」には、種子島家や種子島に関するさまざまな出来事が記されている。「種子島家譜」よりも古い史料として「種子島譜」（1677年）と「種子島正統系図」（1769年）が存在するが、いずれも近世に編まれたものである。

「種子島正統系図」と「種子島家譜」は、記事によっては、その記述の根拠となった古文書が書き写されている。これによって、近世

の時点で種子島家にどのような中世の古文書が伝来していたのかを知ることができる。古文書が書き写されている記事のほうが、書き写されていない記事に比べると記述の信頼性が高いといえる。

また、「種子島家譜」などの種子島家の公的な記録とは別に、家臣が個人的に記したものとして「御家記」「種子島譜略」「種子島家歴史譜写録抄」もある。これらの史料が含む豊かな情報を吟味することで、中世の種子島の実態に迫りたい。



種子島家略系図

第2章 鎌倉・室町時代の種子島

種子島氏の出自と入島

「種子島家譜」をはじめとする家譜では、いずれも初代「信基」の出自を次のように語っている。

平行盛は平清盛の孫である。平家の滅亡時に、行盛の幼い息子は母に抱かれて

鎌倉に逃れ、北条時政に庇護された。時政はこの子を養子にして肥後守「時信」と名乗らせ、三鱗の家紋と国宗の太刀一振を与えた。

さらに時政の執奏により、時信は多爾島・屋久島・永良部島・硫磺島・竹島・七島(吐噶喇列島)の計十二島を將軍より賜った。

この時の多爾島の地頭は大浦口氏であり、鎌倉にあつて島政を統括した。また、代官としては島に上妻氏を置いた。後に、時信は本姓を大浦口氏と同じ「藤原」に変更し、実名も「信基」と改めた。

平時信から藤原信基への不自然な改名には、北条氏(本姓は「平」で「時」を通字とする)と結びつける作爲が見えること、種子島を鬼界十二島の内とする孤立した史料であること、などから考えて、この説を鵜呑みにはできない。

とはいえ、種子島氏の家紋が北条氏と同じ三鱗であること、「肥後守」の官途に後述する肥後氏の家名が投影されていること、在島代官上妻氏存在など、史実と関係のある部分もある。

なお、この頃の種子島は上中下の3郡に分かれ、上に高野入道、中に野間入道、下に熊毛入道がいたとされ、本市西之表城に高野入



種子島家の家紋三鱗が入った大崎神社の瓦



高野神社 (左は石塔)





肥後氏系図 (「種子島家譜」)

13世紀には大隅国の守護と島津庄大隅方の地頭に任命されていた島津庄大隅方というのは、薩摩・大隅・日向の3国にまたがる荘園(島津庄)のうち、大隅国に所在する分のことである。名越家が地頭を務めた島津庄大隅方に地頭の代官としてやって来たのが、被官の肥後氏であった。そして、肥後一族の一部が、島津庄大隅方に含まれる種子島に入り、土着化して島主に成長していったと考えられる。

南北朝期の種子島氏

『種子島家譜』は5代時基までは記述が少なく、6代時充から記事が増える。病気となつて死を覚悟した時充は男子がなかったため、家を2代信式の曾孫にあたる又太郎に継がせることにした。しかし、病が癒えなうえに、息子(のちの頼時)も生まれた。そのため、時充は又太郎の殺害を考えるようになったが、家臣たちは賛同しなかった。そのような折、暦応・康永年間(1338〜45)に、肥前国平戸から松浦党の一族である遠藤頼堅という人物が来島した。時充はこの頼堅を家臣とし

て登用し、頼堅に又太郎を殺害させた。又太郎の殺害に家臣たちが同意せず、肥前から来た人物に任せざるを得なかった点に、又太郎の人望の厚さがうかがえる。また、肥前国と種子島の結びつき、すなわち、九州の西北部から南の島々に至る海の道が活況を呈していたことが想像される。

7代頼時は、貞治5年(1366)に島津氏久に従つて参加した肥後国での菊池武光との戦いで戦死したとされる。実際にはこの年に島津・菊池氏が肥後国で戦つたという史実はなかったと思われるが、頼時が何らかの合戦で戦死した可能性はある。頼時が若くして死去したことで、種子島で内紛が起きる。

当時、種子島氏は日向国の南部を拠点としていた野辺氏と深い関係にあった。時充の室は野辺氏の出身であり、時充の娘(頼時の姉

道を祀る高野神社もあるが、確かな史料による裏づけはとれない。しかし、種子島に1市2町がある現状と、どこか通じるものがあるようにも思われる。

『種子島家譜』に書写された15世紀初めの古文書では、8代清時が島津氏から「肥後左近将監入道」と呼ばれている。このことから、種子島氏がもともと「肥後」を名字としていたことが分かる。「肥後」というと、鎌倉時代の名越家の被官(家来)に肥後氏がいる。

名越家は有力武士である北条氏の一門で、



種子島氏と野辺氏

妹)は野辺氏に嫁いでいた。

この時充の娘が生んだのが野辺盛純(おのへ せいじゆん)である。時充は盛純を可愛がったため、家臣たちは盛純を憎んだ。「時充は所領を盛純に分け与えるつもりである」という家臣たちの偽りの話を信じた清時は盛純を殺害した。このことで時充の怒りを買った清時は島外へ逃げていった。

この時期、九州では島津氏と今川了俊との抗争が展開されていた。野辺氏は今川了俊に味方し、反島津の立場であった。「種子島家譜」からは今川了俊と種子島氏のつながりもうかがえることから、種子島氏も野辺氏同様、反島津の立場だった可能性が高い。さらには、野辺盛純を可愛がった時充とこれに反発した家臣たちの様子からは、野辺氏との友好関係を維持して親今川・反島津の立場を続けるかどうかの路線対立があったとも考えられる。やがて清時が種子島に戻り、家督を継承する。それは種子島氏の親島津路線の方針転換を意味しているのではない。

種子島氏と島津氏

応永15年(1408)、島津玄仲(元久)は肥後左近将監入道(種子島清時)と契状(起請文)を取り交わす。元久から清時宛のもの

が「種子島家譜」に書き写されている。互いに起請文(神仏に誓約する内容を記した文書)を取り交わすことで、種子島清時が島津元久を支持する代わりに、元久も清時の種子島島主としての地位を支持することを誓ったのである。これは対等な立場のもの同士の契約であり、この時点で種子島清時は島津元久の家臣ではない。また、このとき、元久は清時に対し、屋久島・口永良部島の支配権を認めている。2つの島の支配権を認める代わりに、島津氏への奉公を求めたのだと考えられる。

種子島氏はその後も島津氏と接近すること、島々の支配権を獲得していったようだが、逆に島津氏と緊張関係になった時にはその支配権を否定されることもあった。そうした中、1430年代には薩摩で「国一揆」が起きる。伊集院熙久・渋谷一族・牛屎忠・菱刈氏といった有力国衆が守護である島津忠国に反旗を翻したのである。やがて忠国は隠居に追い込まれ、忠国の弟の島津好久(のちの持久)が総大将となって「国一揆」鎮圧に乗り出した。好久は薩摩半島を制圧し、永享8年(1436)6月には伊集院熙久が島津氏に降伏、「国一揆」はひとまず沈静化した。

伊集院氏が降伏した2か月後の8月、島津好久は種子島清時と契状を交している。相手が一大事の時は助けることを誓った、同盟と

もいふべきものである。さらに同月、好久は清時に七島(現在のトカラ列島)のうち、伊集院氏が領有していた2つの島(臥蛇島と平島)を与えている。種子島氏はもともと伊集院氏(「国一揆」)の側にいたとみられ、途中で島津好久の側に寝返ったのだろう。種子島氏は「国一揆」という島津氏と有力国衆たちの争乱を乗り切り、トカラ列島への進出を果たしたのである。

第3章 中世種子島の社会と文化

律宗と法華宗

律宗は、奈良時代に栄えた南都六宗のひとつで、唐の時代に道宣が広め、日本へは奈良時代に鑑真が伝えた。

法華宗が流入する前の種子島の仏教は律宗であったといわれている。元禄2年(1689)に書かれた上妻隆直の「懐中鳥記」によれば、慈遠寺は大同4年(809)の建立で、当初は律宗南都興福寺の末寺であったとある。また、慈遠寺の社壇の上に丸山があり、春日山と号していること、昔、律宗であった頃、こ

こに奈良の春日社を勧請したことからのよ
うな呼び名が付いたという説が記されている。

慈遠寺は長享2年（1488）に法華宗に
改宗するまで、西大寺流律宗の末寺であり続
けたことになるが、詳しい活動などは知られ
ていない。

西大寺流律宗から法華宗への改宗事情につ
いて『種子島家譜』によれば、日典と日良の
布教によるものとされている。奈良で修学し
た沙門義賢（のちの日典）は、種子島に戻る
途中で法華宗に出会い、法華宗に帰伏した。
康正・長祿年間（1455～60）頃に種子
島に帰り、法華宗の布教を始めた。しかし、
種子島・屋久島・口永良部島の島民に受け入
れられることなく、寛正4年（1463）に
63歳で死去した。三島が法華宗に変わるこ
はなかったが、布教活動の先鞭をつけた（先
駆けとなった）というところで、「薩摩三島開
山」とされている。

遺志を継いだのが、日典と師弟関係にあつ
た日良で、島での布教が容易ではないと悟り、
茶坊主となって領主である種子島時氏に3年
間仕えた。その後、日良は時氏に事情を明か
し、受け入れられた。のちに、法華宗は三島
全島で信仰されることとなった。

日良は日典に次ぐ2代目ということで、「薩
摩三島二代」と呼ばれている。

中世の城郭

中世城郭は全国で数万ともいわれ、鹿児島
県内で800を超える城郭、種子島でも12の
城郭が確認されている。

『種子島家譜』によると、種子島氏の城郭
は、6代時充が本城に居を構え、その後の変
遷は不明であるが、12代忠時が池田黒山尻を
経て、大永5年（1525）、屋久田に移る。

『種子島家譜』には、16代久時が時堯旧宅の住
吉（住吉城）に居
したことが記され
ていることから、
屋久田の後、14代
時堯は一時期住吉
城にも居していた
ことがうかがえる。

住吉城は本市の中
心部から南へ約10
キロ離れている。
その後、時堯は本
源寺に館を構えた
のち、永祿6年
（1563）内城に
移り、久時は寛永
元年（1624）
赤尾木城に移る。



種子島・屋久島城郭分布

〔中世城郭跡〕『城郭大系』『データベース』を基に作成

赤尾木城は『種子島家譜』には「上之城」と
記されている。地形から見ると、内城と上之
城（赤尾木城）は、もとは一つの城郭で、そ
れぞれ曲輪（城や砦の周囲を土塁や石垣で囲
んだ区画）の一つだったと考えられる。そし
て、この2つの曲輪は空堀で仕切られていた。
つまり、もともと存在していた曲輪を整備し
てそこに居を移したということだろう。

種子島の中世城郭が描かれている近世の絵
図として天保6年（1835）の大隅国の

「天保国絵図」がある。種子島の「本源寺」の北側に小高い丘のような形で「古城跡」として描かれている。種子島氏が最初に居した本城のことであろう。しかし、薩摩藩が天保14年（1843）に編さんした「三国名勝図会」には種子島の中世城郭の記載はない。

ほかにも、屋久島にも種子島氏によって築かれた中世城郭があった。立地の面から見ると、種子島・屋久島の城郭の多くは、港を意識して築城されている。それが大きな特徴といえる。

種子島氏の家臣団

種子島氏による種子島統治の歴史は家臣団抜きでは語りえない。種子島氏研究の基幹史料である「種子島家譜」を中心とした近世史料には、主要な家臣団の名前を確認することができる。

また、中世末期の種子島氏家臣団の全体像を探る史料として、「慶長十六年高帳表」がある。慶長16年（1611）当時の家臣団約300人の名前と2〜100石ほどの石高、島内の村名のほか、一部には役職と思しき書付けや船頭衆・浜津脇衆など他家臣と区別された衆の存在が記されており、種子島家臣団を概観するうえで貴重な史料と考えられる。

『慶長十六年高帳表』で確認できる家臣団は次の79家である。

秋山、阿世知、荒木、有留、安城、池亀、池村、石堂、色中、岩石、岩川、宇田津、内田、榎本、榎元、遠藤、大山、岡留、加治、梶原、和氣、鎌田、かりや、河野、河東、木佐野、吉良、黒木、上妻、児玉、小牧田、さい河（犀川か？才川か？）、相良、桜井、佐々川、鮫嶋、佐免嶋、芝、下村、条川、白石、新原、田上、高場、田中、知覧、津曲、寺田、徳水、中田、水野、長野、中村、名越、西村、野間、桑山、羽生、春田、樋口、肥後、日高、平瀬、平山、古市、弁田、前田、牧、牧瀬、松下、村松、屋板、八ヶ代、屋ヶ田、山縣、山口、山崎、吉川、渡辺

なお、『慶長十六年高帳表』に記載される船頭衆の人数は20人いて、船頭衆の末に「合式拾」と記されている。この船頭衆は種子島家の二十人家に当たっているのではないだろうか。二十人家は種子島の水運に関わったと考えられる集団で、種子島氏からの信頼も厚かったとみられる。

また、浜津脇衆については、もともと種子島氏が派遣した屋久島付きの代官衆だったのではないかと考えられる。

『慶長十六年高帳表』以外の史料もふまえて

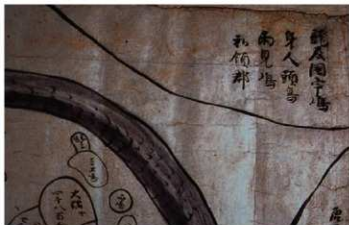
分析していくと、種子島氏の家臣団は、①種子島家の分家・庶家（西村氏など）、②種子島氏（肥後氏）が種子島に入る以前から島にいた勢力（上妻氏）、③南北朝期に九州各地から来島した人々（遠藤氏など）、④種子島氏と畿内との関係性を背景に来島した人々（古市氏や八板氏など）、⑤島津家と種子島氏との関係性を背景に来島した者（知覧氏）に分類できる。

種子島氏の家臣団には、名前だけは伝わっているが、出自や活動が不明という人物も多い。そのため種子島氏家臣団の新史料収集は今後も大きな課題である。

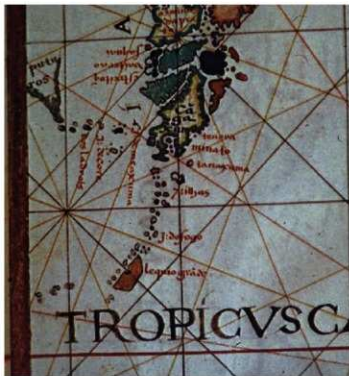
古地図の中の種子島

金沢文庫委託の称名寺蔵の地図（14世紀初期）は、日本の西半分が現存しており、西を右、南を上に出図を描き、その西半分に蛇（龍？）の胴体風のもので囲んでいる。「大隅」の右上に2つの島が接しており、より蛇に近い小さい島を「シタ子嶋」と読んでいる。「シ」については不明だが、「子」は「ネ」とも読み、タネシマと読むことが可能である。蛇は境界の表現であり、境内の中では、最も境界に近いところに描かれている。

ほかにも、広島県立歴史博物館委託の守屋



称名寺藏「日本図」(部分)



バルトロメウ・ヴェリユ (Bartolomeu Velho)
「西太平洋図」(Pacific Ocean) (部分)
(鹿島出版会『南蛮紅毛 日本地図集成』より)

第4章 鉄砲伝来と種子島

種子島と琉球、遣明船

種子島の歴史上、最も大きな出来事は天文12年(1543)(又は天文11年)の鉄砲伝来であろう。鉄砲が伝わり、島外へと広がっていったという歴史は、日本における種子島の地理的な重要性を示している。

琉球王国が日本とは別の一つの国家であった中世において、トカラ列島が日本と琉球との境界領域であり、武家の領主としては種子島氏が中世日本の最南端の勢力といえよう。

15世紀後半から16世紀初頭の琉球は海外貿易を積極的に展開しつつ、北へと勢力を拡大していった。一方、種子島氏も種子島の外へ、そして南へと影響力を広げている。種子島氏と琉球との交渉が史料上ではっきりと確認できるのは大永元年(1521)のことである。この時、琉球は種子島氏を自国に忠節を尽くす存在として位置付けており、種子島氏はそのような扱いを受けられることで、琉球との貿易を円滑に展開していたとみられる。

16世紀になると、種子島は中国(明)との貿易を目指す勢力に重要視されるようになっていった。畿内の細川氏、中国地方の大内氏といっ

コレクシオン「日本扶桑國之圖」(14世紀中期)では「鬼界嶋」と共に「種子嶋」が境内の最も外側に描かれている。鬼界島は日本の境界を表す地名としてさまざまな文学作品に出てくる。つまり、14世紀頃の種子島は鬼界島と共に、西の境界、日本国の西端と認識されていたのである。だが、そういった日本と外との境界としての性格は、1471年に朝鮮で出版された『海東諸国記』所収の地図では確認できない。種子島の境界性が失われたということだろう。

種子島がヨーロッパ製の地図に描かれる

ようになるのは1560年代からである。ポルトガル人バルトロメウ・ヴェリユ(Bartolomeu Velho)が製作した「西太平洋図」では、大隅南島の東南に丸い島が見え、「Tanaxunna」と明記されているのが種子島である。ヨーロッパ人によって作られた地図には、島名が記されていない島や、実際の島名とは異なる名(ヨーロッパ人による呼び名)が記されている島も多い。そのような中で、種子島という現地名がしっかりと記されたことには、鉄砲伝来という出来事も影響していると考えられる。

た有力大名が、中国への貿易船（遣明船）派遣にあたって種子島氏に協力を求めた。種子島では遣明船の建造や、船の派遣の準備（船の整備や商品の積み込み）などが行われたと考えられる。

また、異国の船が種子島にやってくることもあった。天保15年（1844）の「種子島家歴史譜写録抄」や元禄2年（1689）の「懷中島記」には、唐船の種子島への出現・接触が記述されている。近世に成立した史料なので、どこまで正確に当時の出来事を記して

いるのか、議論の余地は残るものの、16世紀の種子島に異国船の来航が続いたことが近世の人々に語り継がれていたことは事実である。

「鉄炮記」から見た鉄炮伝来

鉄炮伝来について考えるときの重要な史料が「鉄炮記」である。「鉄炮記」は、文之玄昌の筆になる「南浦文集」上巻に収められた文章のひとつで、慶長11年（1606）9月9

日に成立した。「鉄炮記」の主な内容は次のとおりである。

天文12年（1543）8月25日、種子島の西之（南種子町）という小浦に、船客百余人を乗せた大船が入港した。その船長が「大明儒生五峯」であった。この「五峯」は倭寇の頭目（リーダー）の王直のことである。倭寇とはいっても、知識人としての側面を併せもった人物だったといわれている。西村を治めていた織部丞は、砂の上に文字を書いて、五峯との間で筆談をした。織部丞は、乗船している客はどここの国の人か尋ねた。五峯は、彼らを「西南蛮種の買胡」（ポルトガルの商人）と説明した。

織部丞の指示で、船は、島主の種子島時堯がいる赤尾木（西之表市）の港に入った。「買胡の長」2人は、鉄砲を持参していた。2人の名は「牟良叔舎」と「喜利志多佗孟太」である。それぞれ「ムラシユクシヤ」「キリシタダモウタ」と読むらしく、ポルトガルの人名フランシスコ（Francisco）とクリストヴァン・ダ・モッタ（Cristovao da Mota）だとみなされている。彼らは、種子島時堯の目の前で、鉄砲を使ってみせた。鉄砲は火薬を使って鉛玉を発射するもので、弾丸が発射される様子は、電気が走るようであり、雷が轟くような音がした。その音を聞いた者は耳をおお



種子島時堯公銅像

わずにはいられなかった。時堯は、高額な鉄砲2挺を購入して家宝とし、家臣の篠川小四郎に火薬の調合方法を学ばせた。また、「鉄匠（刀鍛冶）数人に、鉄砲の鍛造・製造を命じた。その結果、外形はよく似たものがあったが、底をふさぐ技術（尾栓ネジの製法）がなかった。

翌年、「蜜種の買胡」（ポルトガル商人）が、種子島の熊野浦（中種子町）に来航した。「買胡」の中に「鉄匠」が1人いた。そこで時堯は、金兵衛尉清定に、底をふさぐ技術を学ばせた。技術の修得には時間がかかったが、1年余りの後、「数十の鉄砲」を製造することができた。

以上が、「鉄砲記」の内容を軸として再現した鉄砲伝来の具体像である。鉄砲伝来に関する史料は「鉄砲記」だけではなく、ヨーロッパの史料や中国・朝鮮の史料もある。どの史料に重きを置くのかによって鉄砲伝来の描き方も異なってくる。

鉄砲の原材料

種子島への鉄砲の伝来は、商品（兵器）として鉄砲が伝わっただけではなく、鉄砲を生産する技術が伝わったことを意味する。鉄砲の国産化が可能になり、その普及が進んだ。

その歴史的意義はきわめて大きい。では、鉄砲を製造するのに必要な原材料はどのように入手したのだろうか。

鉄砲の銃身と、銃身の後部をふさぐ尾栓ネジは鉄製である。銃身には板状の鉄を使用し、加熱・鍛打・鍛接（接合）して造形する。16世紀の中国の史料には「日本の鉄は脆い」と記されており、輸入された鉄が使用されていたことがうかがえる。

バネと火蓋は真鍮（銅と亜鉛の合金）を使用する。亜鉛が日本で国産化されるのは明治39年（1906）であることから、真鍮は合金の形で種子島に輸入されたものと推測される。

一方、火薬（黒色火薬）を造るためには硝石が必要である。「日本一鑑」には、「硝」（硝石）は日本では産せず、近い場所では中国と密貿易し、遠くは暹羅（現在のタイ）と交易していることを述べている。火薬の原料である硫黄については、その主要な産地は薩摩硫黄島（三島村）である。

鉛は銃弾の鉛玉に使用されるもので、鉛同位体の分析から、タイのソントー鉱山産の鉛塊が輸入されていたことが明らかにされている。

貿易船が往来していた16世紀の種子島では、これらの原材料を手でできる環境が整っていた。また、東南アジア産の原材料は、琉球経由で入手した可能性がある。

鉄砲が語る歴史

本市の種子島開発総合センター鉄砲館には、「伝来銃」「国産第一号銃」と称する2挺の鉄砲が保存・展示されている。

鉄砲伝来時に、鉄砲を伝えた船（明国船）の乗組員が種子島家（恵時と時堯）に2挺、地頭織部丞に1挺を仇（敵）でないとという証

天文12年（1543）	8月、鉄砲伝来。
天文13年（1544）	正月、種子島氏、屋久島の根占軍を攻め、屋久島を奪回。春、南蛮船再び熊野浦に到着。船客中に1人の鉄匠あり。八板金兵衛、これに銃座をふさぐ術を学んで数十挺を製し、これより鉄砲、世に流布する。
天文18年（1549）	ザビエル日本到着。
天文20年（1551）	ザビエル日本を去る。
天文23年（1554）	岩刺城を攻めた際、島津軍は初めて鉄砲を実践に使用。種子島氏も参戦し、戦功多し。
永禄5年（1562）	15代時次（7歳）死去により、本源寺を坂の上に改移す。
永禄7年（1564）	「定堅作火繩銃」製作される。
永禄9年（1566）	磯原重長、兵を竹島に遣して、一澳を侵略し、また永良部に火を放つ。このとき、平瀬石見は永良部にあり防戦。敵のために捕虜となる。数年にして、平瀬石見、佐多の辺原より、独り丸木舟にて帰る。時堯、難府を発して、帰島す。途中、舟を大泊に着け、西村時玄、上妻家統は上陸して、民家に火を放ち、浜村百軒余を焼く。

鉄砲に関する主な出来事

として贈っている。「伝来銃」と呼ばれる1挺は、西村織部丞の末孫にあたる西村時彦（天因）が、明治11年（1878）に種子島家に献上したものである。ちなみに、種子島家が入手した2挺は、「種子島譜略」によると、「腰指」「故郷」という名だったようだが、西南戦争で焼失した。

一方、「国産第一号銃」は、種子島鉄砲鍛冶の惣鍛冶家として中心的役割を果たしてきた羽生家から種子島家へ献上されたものである。この「国産第一号銃」は、八板金兵衛によって作られた火縄銃と言われていたが、この銃に「定堅」という銘が刻まれていることが1970年代に明らかになった。銃は国内最古式銃の形態をしているものの、「定堅」という職人は18世紀半ばの宝暦年間（1751）



伝来銃
(種子島時邦氏所有)



伝八板金兵衛清定作火縄銃
(種子島時邦氏所有)



八角柵子口



火ばさみ



不思議な象嵌（鹿?）



丸に十



種子島住定堅作



甲子永禄七歳



伝八板金兵衛作火縄銃



甲子永禄七歳種子島住定堅作火縄銃

銃の特徴

64)に確認される人名である。この年代のずれが疑問として残っていた。近年、「永禄七歳種子島住定堅作」という銘のある火縄銃が発見され、16世紀、戦国時代の種子島に「定堅」がいることが分かった。これは鉄砲鍛冶の平瀬定堅のことと考えられる。そうすると、同じく「定堅」の銘のある「国産第一号銃」は

鉄砲鍛冶

戦国時代の製造ということだろうか。製造時期を明らかにするには、今後、鉄の組成分析などの科学的な検証が必要となってくる。

鉄砲伝来当時の種子島の刀鍛冶として、八

板金兵衛清定、牧瀬（石原）慶定、平瀬国清が知られている。彼らの経歴を記す。

●八板家系図（抜粋）

八板金兵衛清定

文亀2年（1502）美濃国に誕生

元亀元年（1570）死去。法号妙有

濃州関の刀鍛冶で、種子島へ鉄砲伝来の時、刀鍛冶総動員でその模造に取り掛かり、1年猶子で完成させ、その中心の役割を果たした。

清定の娘の若狭は大水7年（1527）

生まれ。天文12年（1543）に種子島に来たポルトガル人の牟良淑（ムラタ）に嫁いだ。翌年に種子島の熊野浦に再来航。乗船していた鉄匠を父金兵衛に会わせたととで、金兵衛が鉄砲の模造に成功したと伝わる。

●牧瀬家（石原家）系図（抜粋）

慶定 四郎左衛門

牧瀬慶定は薩州谷山の刀鍛冶で、島主時堯公に仕えていた。

慶清 大学

生没年不詳である。時堯は、平瀬石見と牧瀬大学の造った刀で馬毛鹿を斬殺さ

せ、その利鈍を競わせた。時堯は「石見の刀剣は鋭利で、大学の刀剣は鈍である」と評したことから、大学は、即座に鉄板を見事に両断してみせた。「大学の刀剣は斬鹿には向かないが、甲を両断するに相応しい」と時堯より褒賞された。

●平瀬家系図（抜粋）

国清 岩見（石見とも）

国清の先祖は平氏で、信基が南海十二島を受封の時に随って来た。永禄年間（1558～70）、禰寝重長が竹島及び屋久島の一湊を侵し、又火を永良部に放つ時に平瀬石見、永良部にありて、之を防ぐ。遂に敵のため虜とせらる。禰寝にあること数年、後に佐多の辺塚より独り丸木舟に乗りて帰る。

清定 新兵衛

清定は国清岩見の嫡男で、種子島の名刀鍛冶の1人である。文禄2年（1593）16代久時公に従って渡韓し、たまたま、韓国の仏寺中にある珍しい形の三十三燈籠を見て、帰国後、之を模造し、本源寺に献じた。この灯籠は今日、西之表市指定文化財として保存されている。

第5章 戦国時代の種子島

天文の種子島氏内訌（内紛）

天文11年（1542）3月、種子島恵時・直時（のちの時堯）父子が対立し、禰寝左近大夫は直時に協力しようとして種子島に渡海するが、ほどなく帰ったという。

一方、父恵時は島津貴久に支援を求めたため、貴久は新納伊勢守を大将として兵200（一説には100）を派遣する。閏3月4日に坊津に下った新納勢は、6日に坊津を発ち、翌日屋久島に到達する。種子島恵時も屋久島に渡り、3島（種子・屋久・恵良部）確保が難しいので、貴久に進上すると申し出たという。結局、恵時と直時が和解したため、新納勢は撤退した。その際、恵時・直時父子は島津貴久の「御芳恩」を忘れない旨、血判起請文を献じたという。

禰寝左近大夫は、重長（1536～80）を指すとみられるが、重長はこのとき7歳であり、事実とすれば重長の父清年のことであろう。島津貴久が派遣した新納伊勢守とは、天文8年（1539）8月に薩州家から奪った市来城に地頭として配置された新納康久のことであろう。「箕輪伊賀日記」と「貴久公



御坊墓地の種子島時義公の墓石

記」とで微妙に記述が異なるが、父惠時は鳥津貴久方、子息直時（時堯）は彌寝方の立場を取り、それぞれに軍勢派遣を依頼して対抗したようである。結局、貴久が軍勢を屋久島に派遣したため、彌寝勢は種子島から撤退し、父子の相平が実現したということになる。

ただ、この天文11年の一件は、「種子島家譜」をはじめとする種子島氏の記録には一切記されていない。代わりに記されるのは、天文12年、種子島時述（惠時弟）・河内守時行（種子島清時の四男時里の孫）が謀叛を起こし、彌寝重長勢を種子島に招いたという一件である。種子島惠時の次弟時述は、家臣等の要請により奢侈にふける兄惠時をいさめるが、却って兄弟の不和を招く。

天文12年、時述は、一族の河内守時行とともに密かに彌寝重長の援軍を請い、同年3月12日、重長は兵200を率いて国上浦田に上

陸する。これを知った惠時は、直時に赤尾木の防御を命じ、自らは濱津脇から屋久島に逃亡する。翌日、彌寝勢の攻撃を受けた直時は、妙久寺に入り死を覚悟する。平山備中守友重宅に入った彌寝重長は、彌寝勢戦死者への補償と称して、屋久島3郡のうち一つの割譲を迫る。種子島氏家臣は屋久島全島の割譲で和睦を受諾し、重長が求めた直時の起請文は、家臣が偽造して与えたという。

4月、彌寝氏が兵を屋久島に送ると同時に、惠時は種子島に戻った。惠時は、5月15日、弟時述を自害させ、河内守時行らを誅殺したという。翌天文13年正月には、肥後下総守時典を屋久島に派遣し、彌寝氏の守兵を追い、屋久島を奪回したとする。

この「種子島家譜」等の記述は、種子島時堯の家督継承を正当化するために脚色されたものであり、実際は時堯が父と対立して彌寝勢を引き入れたのであろう。しかし、惠時が鳥津貴久を頼ったのでやむなく和睦し、彌寝勢も撤退したというのが真相とみられる。惠時が親鳥津貴久、子息時堯が反鳥津貴久・親彌寝氏の立場をとり、内訌（内紛）となったのであろう。

種子島氏の鳥津氏への従属

戦国時代の種子島氏は、鳥津氏に接近しなが

らも多方面外交を展開した。種子島時堯は鳥津貴久の妹を室として迎え、また、鳥津貴久が朝廷から官位を獲得する際に協力した。時堯の娘は鳥津義久（貴久の子）の室となった。一方で、彌寝氏との間にも婚姻関係を結び、豊後（現在の大分県）の大友氏に鉄砲を献上するなど、鳥津氏以外の勢力とも交流を深めていた。

特に大友氏との関係は深かったようで、ポルトガル人のメンデス・ピントが記した「東洋通歴記」によると、種子島直時（時堯）にとつて大友義鑑は「母の兄弟」であり、「妻の父」でもあるという。種子島氏と大友氏の間には婚姻関係があったということになる。この婚姻関係は「種子島家譜」では確認できないものの、「種子島家譜」には時堯が大友義鎮（義鑑の子）の息子を養子にもらおうとしたと記されており、両氏が深い関係にあったことは間違いない。

天正6年（1578）には高城・耳川合戦で鳥津氏が大友氏を破る。その翌年、天正7年に時堯が死去し、時堯の長男で12歳となっていた鶴梨梁丸が鳥津義久の加冠によって元服し、克時と名乗った。同じ頃、種子島では家臣たちの主導権争いが起き、それに勝利した西村時玄が力をふるった。この時期から種子島氏は鳥津氏への従属度を強めていく。天正8年、種子島克時は鳥津義久から「久」の字を拝領して「久時」と名乗る。

第4編

近

世

〔西之表市史〕 第五編近世

第1章 種子島の政治

近世種子島氏の形成と島津氏

近世の種子島の歴史は、種子島家当主の16代久時（慶長）から25代久尚（慶応）までの治世である。中世まで自立的領主であった種子島氏が、近世にどのようなようにして島津氏の家臣となっていくのか、その変容過程について、島津氏の権力編成との関係でみていく。

種子島は大隅諸島に属し、古来よりこの諸島の政治・経済・文化の中心であった。近世における種子島氏の領国は「私領」と呼ばれ、領内に家老や各種奉行を設置するなど藩と同様の組織を有していた。

建仁3年（1203）に北条朝時が島津庄の地頭となり、種子島には、その被官肥後氏が地頭代として下向し土着した。鎌倉幕府滅亡後に島津化し、のちに多祿島氏を称して、中世末に島津氏に服属、さらに縁戚関係を結びながら、島津氏の一門と化し、近世には藩の

家老職を務める種子島家に転身した。ただ、種子島氏は島津氏と良好な関係を保ちつつも、完全に島津氏に支配される存在ではなかった。島津氏は元亀元年（1570）には、薩摩・大隅両国をほぼ平定した。そして、天正期になると、島津氏は薩摩日目の在地領主層に対する統制を強化していく。

種子島氏は、天正5年（1577）になると、大隅国串良を島津氏よりあてがわれた。天正7年、種子島克時が元服の時に太守島津義久が加冠を行い、翌8年には義久から「久」の字の偏諱を受けているのである。以後、種子島家当主は代々「久」の字を使用することになる。

一方、島津氏と種子島氏との間に、次第に上下関係がみられるようになっていった。天正10年には、琉球との貿易、屋久杉の売買と対して島津氏が規制を加えるようになった。その後の豊臣政権期（島津氏の豊臣氏への降伏）では、中世以来の旧領である種子島・屋久島・恵良部島から一時知覧へ移封され、

旧種子島氏所領には島津以久が入っている。朝鮮出兵において種子島氏が朝鮮へ赴いているが、天正期の豊臣政権服属後も、種子島氏は島津氏と縁戚関係を結びながら、その関係を深め、さらに島津氏配下に自らを位置付けるようになっていった。

慶長3年（1598）、種子島久時は、島津義弘・忠恒親子が朝鮮から帰国した後、島津家の家老に就任した。種子島家の当主が島津家の家老に就任することは、種子島氏が島津氏との縁戚関係を結ぶこと、「久」の字が免許されたこと、本貫地から別の場所へ転封されたことなどあわせて、種子島家が島津家の家臣として取り込まれたことを意味している。

以後、種子島氏は島津氏との関係をさらに深め、その家臣として秩序付けられた。

豊臣秀吉が死去した後、島津義久は島津以久を鹿児島島の対岸に位置する要地である垂水に移封した。これに伴って、種子島氏は種子島に復帰することとなった。ただ、返地されるのは種子島一島で、屋久島・口永良部島に

ついでには触れられておらず、事実、返還されたのは種子島だけだった。屋久島・口永良部島は藩の直轄となった。

その後、島津氏が種子島家の家老の選任に大きく関与し、領内の沙汰についても報告義務を求めるなど、島津氏領国において島津氏（大名）―種子島氏（家臣）―種子島家臣の序列が形成されていった。

寛永19年（1642）には、種子島家当主夫妻に鹿児島へ上り奉公することが藩主から求められた。

こうした島津氏の種子島に対する一連の動向は、種子島家の領内運営への大名権力の介入であり、体制的に種子島家が島津家の家臣に位置付けられたことを意味する。

ただ、種子島氏は、島津氏が領内運営そのものについては否定せず、本貫地を安堵し、種子島家の存続の保障を行ってくれる存在であったことから、島津氏との主従関係を受け入れていったのであろう。

一所持と「私領」領主

近世の種子島は薩摩藩の「私領」の一つで、種子島氏は大名島津氏の家臣であり、かつ種子島を治める領主。「私領」領主でもあった。近世では各藩において武士の家の格が定め

られていたが、薩摩藩でも同じように家臣団の家格が定められていた。

一所持・一所持格は、一門家の次に位置付けられる家格である。古くは種子島家のようにな所の地を領した面々を、島津家の支族・他家によらず一所衆と称したが、正徳2年（1712）10月にこれを二所持・一所持格と改めた。

近世大名島津氏は藩領高77万石（薩摩・大隅・日向国、琉球高を含む）といわれる広大な領地を持つ国持大名である。したがって薩摩藩では、領内を113の「外城」（郷）と「私領」に分け、それぞれ前者に「地頭」、後者に「領主」を置いて支配させていた。藩内に「私領」は21存在し、島津氏の家臣である領主が支配していた。薩摩藩「私領」「二所持」「一所持格」については表「鹿児島藩「私領」「二所持」「一所持格」一覧」のとおりである。

このうち中世以来の領地を保持したのが、北郷家・種子島家・入来院の3家であり、彼らは近世においても自らの知行地を持ち、自律的支配を展開していた。

「私領」は地頭直轄地とは区別され、一般的に「藩内で上級家臣が支配する領地のこと」とされる。そして、「私領」には①近世期に島津氏によって新たに創出されたもの、②中世以来の在地領主の領地が、「私領」として位置

付けられたもの、とがある。②に該当する種子島家は、太閤検地前後に一時的移封されるものの、近世を通して中世以来の本貫地を知行し、自律的な領内支配を展開していた。

「私領」とは、家格は「一所持」に位置付けられるものの、その中でも郷単位以上で、比較的規模の大きい石高の知行地を領したものとえよう。

次に「私領」領主については、種子島家と同じく私領を有していた北郷家に関わる延宝4年（1676）、享保2年（1717）の史料には、直轄領と「私領」は分けて記され、前者の責任者は「地頭」、後者は「領主」と記されている。

同様に、種子島家の明和8年（1771）に藩に帰国の許可を願った史料では、自らの領地のことを「私領」と記しており、その地の領主と意識していたことを知り得る。

これらのことから「私領」を領する者は、直轄領の地頭とは区別され、藩から「領主」と把握されていた。「私領」領主は大名から自律的な知行地支配権を認められ、大名と同様の組織を有していたものの大名ではなかった。すなわち、島津家領国において郷単位以上で、幕府から認められたものではなく、大名の家臣になることによって、改めて大名から付与された領地を「私領」といい、その知

No	①家名	②石高	③現領地	④拜領年		⑤本領地	⑥武鑑	⑦家格
				元号	西暦			
1	北郷・都城島津	35,650.000	日向国諸県郡都城	慶長5年	1600	北郷	私領	一所持
2	加治木島津	19,538.000	大隅国始羅郡加治木	寛永8年	1631	加治木	私領	一所持
3	垂水島津	17,432.000	大隅国大隅郡垂水	慶長4年	1599	清水	私領	一所持
4	宮城島津	15,763.000	薩摩国伊佐郡宮之城	慶長5年	1600	鹿糠申良	私領	一所持
5	越前島津	14,487.000	大隅国始羅郡重富	元文2年	1737	越前播磨	私領	一所持
6	今和泉島津	13,758.000	薩摩国損宿郡今和泉	延享元年	1744	今和泉	私領	一所持
7	種子島	11,903.000	大隅国熊毛郡種子島	慶長4年	1599	多禰・屋久口永良部	私領	一所持
8	日置島津	8,754.000	薩摩国日置郡日置	文禄4年	1595	宮之城	私領	一所持
9	北郷・都城二男	8,207.720	薩摩国伊佐郡平佐	文禄4年	1595	都城	私領	一所持
10	佐多・知覧島津	6,776.850	薩摩国給黎郡知覧	延宝5年	1677	佐多伊敷	私領	一所持
11	花岡島津	6,287.000	大隅国肝属郡花岡	享保11年	1726	花岡	私領	一所持
12	伊勢	6,039.200	大隅国曾於郡末吉岩川村				一所持	一所持
13	肝付	5,508.330	薩摩国給黎郡喜入	文禄4年	1595	大崎	私領	一所持
14	永吉島津	4,474.000	薩摩国日置郡永吉	慶長17年	1612	佐土原	私領	一所持
15	喜入島津	4,049.470	薩摩国川辺郡鹿籠	寛永10年	1633	喜入	私領	一所持
16	額姓	4,017.000	大隅国桑原郡踵蓋谷原村			額姓・指宿・山川郡	一所持	一所持
17	入来院	3,999.800	薩摩国薩摩郡入来院	慶長18年	1613	入来院	私領	一所持
18	新城島津	3,355.000	大隅国肝属郡新城	寛永13年	1636		私領	一所持
19	佐志家	2,808.700	薩摩国伊佐郡佐志	明暦2年	1656	佐志	私領	一所持
20	吉利島津	2,616.380	薩摩国日置郡吉利	文禄4年	1595	禰寝	私領	一所持
21	敷根・市成島津	1,864.000	大隅国曾於郡市成	慶長19年	1614	敷根	私領	一所持
22	町田	1,741.000	薩摩国日置郡伊集院石谷村				一所持	一所持
23	市田	1,733.000					一所持	一所持
24	柳山	1,714.500	薩摩国伊佐郡藤牟田	慶長19年	1614	臼杵院	私領	一所持
25	豊州島津	1,398.400	薩摩国伊佐郡黒木	寛永11年	1634	帖佐	私領	一所持
26	川田	874.000						
27	比志島	370.670	大隅国桑原郡踵万膳村			比志島	一所持	一所持
28	新納	350.000	大隅国桑原郡踵三体堂村			新納・救仁郷	一所持	一所持
29	菱刈	308.200				菱刈院	一所持	一所持
30	大野	187.600				薩州家二男家	一所持	一所持
31	桂	160.000				志布志月野村	一所持	一所持
32	藤訪	159.000				日州海江田	一所持	一所持
33	崩山	155.000					一所持	一所持
34	吉利	4.570				薩州家準二男家	一所持	一所持
35	鎌田	1,311.000	大隅国肝付郡大始良南保村				一所持格	一所持格
36	忠広一流	686.000					一所持格	一所持格
37	宮城二男	614.900	大隅国曾於郡恒吉坂元村				一所持格	一所持格
38	久房一流	268.820					一所持格	一所持格
39	久明一流	263.200					一所持格	一所持格
40	伊集院庶流	259.310					一所持格	一所持格
41	宮之城庶流	184.000					一所持格	一所持格
42	豊州二男	173.000					一所持格	一所持格
43	久記一流	158.750					一所持格	一所持格
44	薩州准二男	132.410					一所持格	一所持格

(出典) ①-⑤薩摩武鑑(天保・弘化の頃。尚古集成館蔵本)

⑥「正徳2年10月朔日巻所持・色所持格・寄合・寄合並名書」(宮崎県史 史料編 近世5) 303頁)

薩摩藩「私領」「一所持」「一所持格」一覧

「初地人」を迎えるための「次第書」が残っている。

種子島の行政組織

薩摩藩の総石高は、寛永11年（1634）8月4日の判物で、琉球を加えられて、72万9000石余となっている。寛永11年における薩摩藩の領域と石高を示すと表「薩摩藩領域別村数・石高表」のようになり、藩領国は薩摩・大隅両国と日向国諸県郡、ほかに琉球一五島から形成されていた。

薩摩藩の行政組織は、藩の行政並びに支配、さらには家政運営を行っていくために編成された。藩主の下に城代が置かれ、家老・若年寄・大目付が三役と呼ばれた。その下に家老が直接命じる直触と称される上級の役職が置かれ、さらにその下に多くの役職が置かれ、藩の政務を担っていた。

種子島氏の編成した行政組織について示したのが表「種子島の行政組織」である。島主の下に三役、奉行、新規・臨時的奉行、掛、その他諸役があり、さらに在地の役人として村方役、村方諸役に大きく分けられることができる。家老・物奉行・用人の三役については、次のようである。

家老は藩においても政治・行政の責任者で

国名	郡名	村数	石高(石)	
薩摩	伊佐郡	52	38,401	
	薩摩郡	33	42,719	
	鹿児島郡	27	30,339	
	日置郡	48	51,648	
	阿多郡	20	23,570	
	河辺郡	35	35,045	
	姪島郡	2	2,791	
	鍋屋郡	7	15,939	
	楯宿郡	7	16,857	
	給黎郡	6	10,464	
	船山郡	6	15,047	
	出水郡	7	20,735	
	高城郡	8	8,445	
	大隅	葦刈郡	13	9,986
桑原郡		32	21,824	
始羅郡		39	26,643	
響歌郡		63	43,885	
肝羹郡		38	42,015	
大隅郡		32	20,192	
熊毛郡		9	5,205	
馱渡郡		4	1,080	
日向		諸県郡	164	120,024
以上合計			652	605,863
琉球15島			123,700	

薩摩藩領域別村数・石高表

あり、複数の人物が就任していた。家老の人数は6人程度で、物奉行・用人からの登用が一般的であった。歴代家老を見ると、就任しているのは、平山・西村・野間・上妻・肥後・種子島・美座・前田・知寛といった名前が見られる。幕末期の家老についてまとめたものによれば、先に記した名前に加えて、岩河・羽生・森の名前が見られ、ほぼ固定された家筋の者が就任していたといえよう。

家老は種子島と鹿児島屋敷で勤務していた。種子島氏は藩の役人も兼ねていたことから、藩主の使いとして江戸へ赴くこともあった。史料から江戸城登城時に家老が従っている事例がみられ、家老にはこのような任務もあつたことがわかる。

一方、藩の物奉行は、蔵の出納の総取締役であり、書役などを同行して、蔵役、蔵に納

める米を計算する榷取^{すくとり}などを指揮監督する役職であった。種子島の場合は、種子島家の三役の一つとして種子島における政治行政の責任者の一人として諸行事のほとんどに家老と列席した。役割は、米蔵の管理、米銭出納、種子島の経済力の管理等を任務とした。

幕末期の物奉行の就任者をまとめたものには、多いときには9人の名前が見られ、7人が同時に置かれていたといえよう。

次に用人は、家老・物奉行とともに三役と呼ばれ、諸行事への列席が多かった。用人の主な職務は家老の取次役であった。「種子島家譜」による幕末期の用人の就任者は、嘉永4年（1851）には16人の名前を確認できる。

なお、種子島家には組頭という役職もあつた。「種子島家譜」には、領主種子島久時が家臣を3班（3組）とし、島内を3郡（上之郡

を一番組、中之郡を二番組、下之郡を三番組)に分け、組頭各4人としたというもので、この時に組頭の職制ができたのであろう。用人の兼務も多く、就任している名前からもそれをうかがうことができる。

奉行には、高奉行や山奉行、船奉行、記録

奉行などがある。

藩の高奉行の職掌については「鹿兒島県史」に「飯米を出すこと、出物蔵差引、出来出登の事など」とある。また、種子島氏は種子島以外に日向国・大隅国に飛び地を領していたようで、その豊凶の状況を調べて年貢高を決

島主	種子島氏	—	—	—	—
三役	家老	物奉行	用人	—	—
奉行	郡奉行・横目	狩奉行	普請奉行	寺社奉行	船奉行
	高奉行	物奉行	山奉行	串目奉行	馬役
新規・臨時的奉行	兵具奉行	納戸奉行	記録奉行	—	—
	法事奉行	祭事奉行	中陰奉行	靈譜奉行	—
掛	文書方掛 (記録方掛・記録奉行)	異国方掛	勸農方掛・蔵物方掛	御菜園方掛・鉄掛	鉄砲製方掛
	牛酪製方掛	塩浜方掛	石炭方掛・寺見廻	葛方掛・細工見舞	奥医師 (後に待医)・講談役・助役
	雑紙方掛・学校所掛	波戸築方掛・波戸築方検者・波戸築方筆吏	税史・玉葉奉行	種痘方掛	松炭方掛
	改革方掛	産物方掛	宗門方掛	水車方掛	造船方掛
	菊油製方掛	油木方掛	海草方掛	地方検者	鉄山方掛
その他諸役	行司	検者-普請方史-惣大工	住職	船検者-船手下史-船匠-船巧者-水手	米倉検者・米倉監 (本出来米方掛)・倉方目付-年取-升取
	作見舞-甘藷見舞-川見舞	山役-植木見舞 (植木見舞)・杵灰山方見舞	牛馬皮方掛・牛馬口銭方掛・牧見舞-駒取	道具番・獄史	納戸見習
	祐筆	—	—	—	—
村方役	(小艘)	庄屋	横目	—	—
村方諸役	町頭	山役・樟脳山掛	作見舞・用水掛	甘藷見舞・砂糖製の長	植木見舞
	道具番	行司・犬使	牧見舞	—	—

(出典) 山口又夫「種子島統治機構と職掌」、『中種子町郷土誌』(1971)、『種子島家譜』

種子島の行政組織

めるのも仕事であったようだ。高奉行の人数は享保9年(1724)に4人で、その後増員した。なお、家老のように全ての家筋が固定されているわけではない。

次に、山奉行、船奉行であるが、山奉行は「山奉行一筆者一寄筆者一山見廻」という組織となっており、その任務は「材木払い、右金代銀を金蔵に納めること」であったという。

種子島にいつ山奉行が置かれるようになったかは定かではないが、遅くとも寛延元年(1748)には設置されていた。当時は高奉行座に置かれていたものが、宝暦4年(1754)に山奉行座が独立して置かれた。

船奉行の役割は、船手としては浦人支配、監視の任務であったという。『種子島家譜』での初見は、元禄15年(1702)で、領主種子島久時が日深大居士の49年忌のため種子島に帰島した時に船奉行が家老とともに同行している。

このほか、船奉行の役目は異国船が来たときに対応や、幕末には造船も担うようになった。記録奉行は、藩にも存在し、藩の行政文書の整理や系図及び地誌の編さんなどを担っていた。

種子島家の記録奉行は家老の兼務が多かった。種子島久柄時代の文化2年(1805)



「種子島家譜」
(種子島時邦氏所有)

には第3次家譜「種子島家譜」の編さんが行われた。「家譜」巻二十七（文化8年）から巻八十五（明治2年（1869））までは1年1冊形式で編さんされ、巻八十六（明治3年）～八十九（明治24年）は数年ごとに合冊され編さんされた。この編集業務は種子島の記録所が中心となっていた。

種子島の行政組織の特徴は、船奉行や塩の生産のための「塩浜方掛」など、自然のあり方に対処しながら、種子島の行政組織も編成されたといえよう。

種子島の身分制度

近世では、人々の社会的な地位は身分によって決まっていた。それは、大きく支配身分である武士と被支配身分である農工商に分かれていた。薩摩藩は武士人口が他藩と比較して圧倒的に多かったことが特徴である。表「貞享元年（1684）薩摩藩内身分別人口」は、貞享元年の人口について身分階層別に示したものである。これによれば、武士人口は薩摩国が21・1%、大隅国が18・9%、日向国諸県郡が29・5%となっており、3か国の合計では21・7%となっている。日本全国の人口における武士人口の割合は6～7%といわれているので、その差は歴然である。

種子島の身分制度については、やはり藩と同様の制度であった。表「貞享元年（1684）種子島身分別人口」は貞享元年の種子島の人口について身分階層別に示したものである。これによれば、種子島の中心地である赤尾木の士給人が1531人、それ以外の諸村に居住する士給人が2022人で、武士人口が全体の43・9%を占めている。武士人口が全体の4割以上を占めていることは、藩の武士人口の比率が21・7%であることと比較しても圧倒的に多いことが特徴である。

表中の「士給人」とは「武士で禄を給う人」を意味すると考えられ、つまり種子島家の家臣のことであろう。ここで特徴的なのは種子島家の家臣について、「赤尾木」と「諸村」が区別されて記されていることである。赤尾木は領主の居城であった赤尾木城（榕城）があった場所であり、種子島の政治行政の中心地（麓）であった。ここに居住する家臣はいわば上級の家臣であり、別途記載されたのであろう。そして諸村に居住する家臣は、藩でいうところの郷村に居住する武士、つまり「郷士」であろう。

次に被支配身分について見ると、「赤尾木町人」「島中百姓」「島中浦浜」「島中塩屋」があげられる。「赤尾木町人」は、赤尾木城の麓にあるいわゆる「城下町」の町人のことであら

う。島中の3種は、農民・漁民・製塩業者を「島中」として種子島全体で一括して把握している。海に囲まれた種子島ならではの身分として、浦人と塩屋の存在があげられるが、こうした被支配身分があったことが種子島家の特質といえよう。

また特徴的なのが「流人」の存在である。

地域	士身分者		町・在郷人等		合計 人口(人)	
	人口(人)	比率(%)	人口(人)	比率(%)		
国名	薩摩国	38,642	21.1%	144,734	78.9%	183,376
	内鹿児島人口	10,001	20.4%	39,095	79.6%	49,096
	内外城分人口	28,641	21.3%	105,639	78.7%	134,280
	大隅国	22,267	18.9%	95,316	81.1%	117,583
	日向国諸県郡	16,071	29.5%	38,357	70.5%	54,428
薩摩日	三力国人口	76,980	21.7%	278,407	78.3%	355,387

(出典) 尾口義男『薩摩藩の人口』(『黎明期調査研究報告』11、1998年)を加工して作成

貞享元年(1684)薩摩藩内身分別人口

種別		人口	男	女	
全体		8,100	4,359	3,741	
			比率(%)		
内	赤尾木	士給人	1,531	18.9%	43.9%
	諸村	士給人	2,022	25.0%	
	赤尾木	町人	197	2.4%	53.1%
	島中	百姓	2,829	34.9%	
	島中	浦浜	755	9.3%	
	島中	塩屋	517	6.4%	
	出家并寺門前	内112人出家	197	2.4%	
		流人	55	0.7%	0.7%
『懐中島記』による合計		8,103	3人の誤差		

(出典)『懐中島記』

貞享元年(1684)種子島身分別人口

種子島家当主の系譜

16代久時は、永禄11年(1568)10月28

種子島は藩や幕府による流人が存在しており、それが先に示した身分別人口の統計に反映されている。

日誕生。父は14代時亮、母は家の女房・黒木道純の娘で天正7年(1579)12歳の時に元服した。

元服には太守義久公による加冠がなされ、三郎次郎克時と改名。天正7年10月、久時が当主を襲封した。克時から久時に改名したのは翌年10月5日であり、太守義久公が義久の「久」字を克時に賜り、久時と名乗ったことによる。種子島家の薩摩藩藩政における地位が高まったことを意味する。慶長16年(1611)2月27日、久時は内城にて44歳で逝去した。

23代久道は、寛政5年(1793)10月23日正午頃、嫡男(鶴袈裟)として誕生。父は22代当主久照、母は島津図書久濃の娘(実は家の女房、新納全右衛門の娘)で、彦弓は北条十次。

文政12年(1829)5月13日、久道は午前2時頃逝去。37歳であった。夫人は髪を下して松寿院と号し、種子島家名跡として島政を担うこととなる。

天保13年(1842)、島津斉宣の12男(松寿院の異母弟)報七郎が久珍と改名し、種子島家24代当主になる。久珍は在位12年目の安政元年(1854)に種子島にて急逝した。この年の5月、久尚が正式に家督を継ぐが、生後間もない島主のため、実質的には松寿院

第2章 種子島の経済

藩検地と種子島領石高

薩摩藩による検地は、寛永年間（1624～44）、万治年間（1658～61）、享保年間（1716～36）の三度の検地が知られている。

種子島島内の石高の推移は、寛永検地の8273石から享保検地の9132石余となった。その後、天明・文化・安政・慶応検地で1万65石余となり、かなり開墾が進んだことを示している。また、種子島家の領地は島外にもあり、天明検地では、島外領地を含む合計1万1903石余で、種子島家石高が1万石とされる由縁である。

種子島では、藩による検地のほか、自治内検と享保内検の間の時期である元禄15年（1702）か



柳田来風画松寿院
(中種子町熊野神社所蔵)

が島政を担った。

松寿院の功績としては、「大浦川の川直し」「塩田開発」「赤尾木港の波戸築造」が有名であるが、そのほかにも島民のために果たした功績は多い。

25代久道は、嘉永7年（1854）正月9日、誕生し、以時と名付けられた。父は24代久珍、母は島津内匠の娘。安政元年（1854）5月15日に以時が家督を相続、翌年正月9日、以時改め久尚と改名した。

久尚の代に明治維新を迎え、従来の家格を廃せられ、士族の名を頂戴し、世禄1500石となり、明治15年（1882）7月13日夜半に逝去、29歳であった。

ら藩役人による検地も実施されている。

この元禄検地は、藩の役人である郡奉行や郡座の役人等が来島し、西之表村から検地を始めた。続いて同月25日には、「検地使」が下之郡に赴いており、これに種子島家の家老1人、物奉行1人、郡見廻2人が随行している。

検地結果は、種子島家の持留高が1338石2斗4升6合1勺1才であった。また、新田開発によって増加した「新仕明」「古荒起」「畑田成」も記されている。

その後も江戸後期になると、早損・風損被害から種子島家による検地がたびたび実施されている。これは、村側が年貢減免を意図して検

番号	村名	寛文4年 (1664)	元禄2年 (1689)	天保5年 (1834)
1	西面村	817.681	830.107	817.681
2	国上村	370.616	251.281	370.616
3	安納村		88.336	
4	現和村		452.803	
5	古田村		55.322	
6	住吉村	381.195	174.887	381.195
7	安城村		207.803	
8	増田村		471.200	
9	納官村	332.595	217.720	332.595
10	野間村	635.478	702.255	635.478
11	油久村	748.146	378.961	748.146
12	坂井村		647.449	
13	島間村	878.565	428.848	878.565
14	平山村		799.865	
15	葦永村	505.340	1,112.735	505.340
16	上里村		163.439	
17	中之村	536.103	1,289.335	536.103
18	西之村		440.774	
出典		「薩摩日并琉球高辻帳」	「懐中島記」	「郷村高帳(天保郷帳)」

種子島島中18力村石高表

地を願い出ており、それに応じて実施された。種子島の村数については、一般的には18か村といわれている。また、村高については、寛文4年（1664）の「郡村高辻帳」や元禄2年（1689）の「懐中島記」、天保5年（1834）の「天保郷帳」から、種子島島中18か村石高は表「種子島島中18カ村石高表」とおりである。

藩の財政改革

天保年間（1830～44）、種子島家は参勤交代随従、自然災害による凶作・飢饉などで財政は困窮していた。そこで、重豪公の命令により藩家老調所笑左衛門広郷、御趣法方



調所広郷肖像画
(尚古集成館寄託)

用人高田十郎右衛門が種子島家の財政建直しを図る。これは当主久道夫人・松寿院が藩主家筋であるために依頼に応じたものである。広郷は、種子島役人が積極的政策実行を怠ったので財政は行き詰まり、過分の借財となった。財政改革では田地手入を第一の事と心得とするようにと言いつけた。

種子島の主な生業

近世の種子島の主な生業は農業、牧、製塩業、漁業、水運業、製鉄業であった。農業では島の北端に位置する国上村の浦田地域に稲作が伝えられ、それが島の北部に栽培が広がり、やがて台地が広がる南部へと普及すると、島内一の穀倉地帯へと発展していった。

▽甘藷（さつまいも）と甘蔗（さとうきび）

甘藷の鹿児島への伝播は、前田利右衛門（薩摩国山川）、青木昆陽（江戸小石川）など諸説あるが、元禄11年（1698）琉球国王から甘藷一籠が当主久基に贈られている。これこそが甘藷の日本伝播の最初である。種子島家が家老西村権右衛門時乗に命じて西之表村石寺で試作したうえで栽培可能となった。

明治23年（1890）、宮内大臣土方久元に種子島家の家格を華族とすることを要請する

願書には、中世種子島時亮の鉄砲製作を「鉄砲の要器」とし、種子島の甘藷栽培を「民食の要品」と表現して、天下に種子島が果たした業績を示すことで種子島を誇示している。

一方、種子島の砂糖栽培については、種子島家が文化10年（1813）、家老知覧行寛に命じて藩庁に砂糖製造の許可を申請し、文化15年5月8日に藩庁から免許がなされた。

なお、嘉永4年（1851）には大島の東祖子が来島し、精糖の技術を教授し、種子島で先進技術の導入が図られた。

▽種子島の材木

種子島の材木は、寛文10年（1670）、貞享3年（1686）には二度にわたり、松、榎（タブ）の本数を改められ、藩御用は御用木として、それ以外は種子島家で伐採自由とし、伐採した数量は山奉行に報告し、帳面より削除することとした。帳面外の材木は届けの必要もなく、差杉の山方役人（森林行政を担当する役人）の人別も届け出る必要はないとされた。享保4年（1719）の帳付免木についても伐採は自由とされ、種子島はほかの私領主とは違い、全て先例のとおりとするとされた。

寛延元年（1748）には、材木667本（内訳は五葉松355本、黒松312本）を検

分、藩の後世の要用にするとした。

かつて検分した貞享2年は、五葉松247本、黒松692本であったが、寛政元年の検分では五葉松が108本増え、黒松が380本の減少となっている。

▽牧の歴史

種子島には、馬や牛などの家畜を放し飼いにして飼育する「牧」が多く見られる。

寛政元年（1789）、薩摩藩領内には牧数は17か所とされ、藩営最大の牧は大隅国福山牧で馬数1034匹である。

種子島では、寛政元年に最も近い年代の宝暦12年（1762）の藩庁への馬数検分報告



五葉松（ヤクダネゴヨウマツ）

には馬1591匹とあり、薩摩藩領では最大規模の牧であるといえる。また、「塩屋牧」と呼ばれる製塩の際の燃料林として海岸地帯に接して24か所設置された。

一方、種子島には、藩から種子島家に特別に飼育が命じられた馬の歴史がある。7、8匹の放牧が命じられた馬は「牛馬（ウシウマ）」で、鬣や尾は牛に似ているが、鬣があり、毛並みは毛縮れで曲がり、薄いのが特徴であった。

飼育は、藩主が必要な時はいつ、どのような状況下でも提供することが求められ、厳しい義務を課せられているが、繁殖飼育次第によつては販売し、財源としても良いとの条件も付けられていた。このことが、種子島家の



ウシウマ
(種子島開発総合センター-欽徳館所蔵)

財政回復の手立てとして、馬飼育努力の背景となった。

▽製塩業

種子島で特徴的なのが製塩業であろう。

『懐中島記』『種子島方角札帳』によれば、塩屋（製塩業者）は、大崎・石寺・上湊・下湊・沖ヶ浜田・浜脇・浅川・上能野・下能野・竹之川・下田・阿岳磯・屋久津・大川・中野・砂坂・牛野・川脇・小塩屋・上梶潟・下梶潟・飯宿・竹崎・中の塩屋・立石など島内に数多く存在していた。

安政3年（1856）には、松寿院が坂井村の大浦浜の塩田を拡張し、製法を改良させ



大浦塩田跡

た結果、島内の需要を賄うだけでなく、屋久島にまでも供給するほどの塩を生産できるようになった。松寿院は事業の成果を後世に伝えるため、藩士後醍醐院真柱に碑文作成を命じ、石碑を建立した。

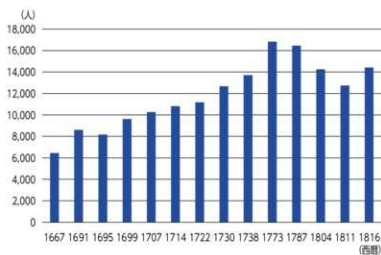
▽近世種子島の浦

種子島には、漁業を営む人々の住む浦が多かった。「種子島旧浦沿革書」によると、表「種子島の浦一覧」のとおり、18浦があった。浦の用夫人数についてみると、「懐中島

No.	浦名	浦の範囲	備考
1	浦田浦	西京川 ～ 馬毛田尻	
2	洲之崎浦	馬毛田尻 ～ 洲之崎(赤尾木港)	
3	池田浦	洲之崎 ～ 箱崎	
4	尼瀧(海士泊)浦	箱崎(長瀬) ～ 能野・上二ツ川	
5	住吉浦	上二ツ川 ～ 下二ツ川の中島	
6	浜津脇浦	下二ツ川の中島 ～ 瀬川	
7	大町田浦	瀬川 ～ 隈浜川	
8	熊野浦	隈浜川 ～ 豊崎	特別漁場
9	島岡浦	豊崎 ～ 門倉崎	
10	竹崎浦	門倉崎 ～ 葦永・平山村境	
11	浜田浦	葦永・平山村境 ～ 大浦川	
12	熊野浦	大浦川 ～ 乗浜	
13	犬城浦	乗浜 ～ 野間・増田村境	
14	岩屋口浦	野間・増田村境 ～ 増田・安城村境	
15	川脇浦	増田・安城村境 ～ 門ノ鼻崎	
16	庄司浦	門ノ鼻崎 ～ 馬籠川	
17	田之脇浦		
18	花之木浦	馬籠川 ～ 西京川	

(出典)『種子島旧浦沿革書』

種子島の浦一覧



種子島の人口の推移

記」に貞享元年(1684)の人数として、浦浜用夫755人となっている。「要用集」には正徳3年(1713)頃ののものとして浦用夫337人、「薩藩政要録」には文政9年(1826)分として浦用夫147人となっており、次第に浦浜用夫が減少していることがわかる。

種子島の人口推移

薩摩藩の人口については、主として宗門手

札の結果によって知ることができる。

『種子島家譜』による正式記録では、元禄4年(1691)に8609人となっている。その後、宝永4年(1707)に初の1万人を超え、安永2年(1773)には、最高値の1万6801人となっている。

なお、人口増減に極端な変化をもたらしたものに元文・文化の痘瘡(ウイルスによる感染症で、高い死亡率で知られていた。1980年にWHOが世界根絶宣言を行った)流行があり、両事例で2000人も死者を出した。寛文7年(1667)から文化13年(1816)までの種子島の人口の推移は、図「種子島の人口の推移」とおりである。

伊能忠敬の種子島測量

伊能忠敬の種子島測量は、文化9年(1812)4月26日に島間村に上陸し、本隊を伊能隊と坂部隊に分けて測量を行った。伊能隊は、5月3日から住吉村能野内浜、浜津脇を経て4日には赤尾木に宿泊した。

屋久島・種子島両島は、鹿児島城下から3月10日に乗船し、5月23日の帰着まで72日間の測量であった。

伊能忠敬測量隊行程図は図「伊能忠敬測量隊行程」のとおりである。

第3章 種子島家の外交

異国船種子島漂来

異国船の漂来について、幕府は「唐船が漂来・漂着したら長崎まで警護し届けること」という命令を出した。その場合遵守すべき処置を種子島家に通達したのが、宝永7年(1710)閏8月25日付「島津久貫外三名連署覚」で次の五か条からなる覚書きである。

- 一、唐船の上乗りを堅固に務め、唐人を上陸させないこと。また、人質唐人警護宰領のほかは乗船禁止のこと。
- 一、唐人より理不尽な申し出があるとも構うことなく、舵取りや案内に徹底す

ること。

- 一、商売は禁止、またどのようなことでも唐人との交換は大禁、唐人との文字のやりとり、少しの食べ物も授受してはならない。

- 一、衣類などは洗紙包に軽くして乗船すべきであり、人から頼まれ物を受けることは禁止である。

- 一、唐船出帆の時は天候、隠れ瀬、潮の流れや速さには十分に注意を払い、舵取りや案内に確認すること。

藩は、これまで唐船については多くの通達を伝えており、種子島がいかにも多くの漂着船、破船・難船が着き、航海上重要な海域であったかが確認できる。



伊能忠敬測量隊行程

種子島家の唐通事

鎖国時代、貿易に不可欠だった言語不通を補う通訳を仕事(現代の通訳兼外交官的役割)とする唐通事がいた。

種子島家の通訳関係者は、筆談・訳者という職名であった。「種子島家譜」では「筆談」としているが、正確には筆談通事のことであり、同様に「訳者」は通訳のことである。これは、藩の通事体制とは異なる独自の制度であることが指摘できる。

種子島は航海上重要な海域であったことから多くの漂着船、破船・難船が着いている。唐船漂着は長崎廻航という幕府の厳命があり、その対処には丁寧かつ敏速な対応を必要とした。種子島に漂着した唐船は、山川港に送り



伊能忠敬測量記念碑(南種子町)

届けるまで種子島家の責任とされ、その後は藩の責任において長崎港に送り届けられた。

『種子島家譜』から種子島への唐船漂着を精査すると、漂着事例は天文9年(1540)から弘化2年(1845)までに27回ある。種子島家は、漂着船処理を徹底することによって問題が生じないように配慮していた。

種子島家の唐通事制度を諸史料からみると独自の筆談通事と訳者の2段階の職階に加え、藩が認定した通事稽古職があることがわかる。なお、藩の唐通事制度は道之島(奄美諸島)にも及び、藩は安永7年(1778)の唐通事稽古職定数を、大島8人・徳之島5人・喜界島4人・沖永良部島4人をとすると決定した。

近世の種子島と琉球

種子島と琉球との交流は、中世と近世とでは、取り巻く環境は大きく異なっていた。中世では種子島氏独自の琉球通交が見られたが、近世には薩摩藩の一員としての種子島氏と薩摩藩支配下の琉球という形で関係が展開することになる。琉球からの書状も宛名は琉球国王ではなく「国司」とされている。

種子島・琉球間では、多くの書状が存在し、公的なやり取り以外にも、船頭の活動や漂着民をめぐるやりとり、種子島家臣と琉球官人との文化交流など、多くの史料が存在している。



中国船の種子島漂着の年世と漂流地

- ①1540 竹崎浦(葦束村)
- ②1543 門倉嶺(西之村)
- ③1544 熊野浦(福井村)
- ④1615 赤尾木浦(西之表村)
- ⑤1619 漂着地不詳
- ⑥1639 住吉村
- ⑦1640 熊野浦(福井村)
- ⑧1641 葦束村
- ⑨1644 浜田浦(平山村)
- ⑩1687 竹崎浦(葦束村)
- ⑪1694 赤毛船(漂着地不詳)
- ⑫1699 中山(野間村)
- ⑬1708 漂着地不詳
- ⑭1710 大崎浦(葦束村)
- ⑮1732 赤津船(納管村)
- ⑯1732 取次(能久村)
- ⑰1743 住吉村
- ⑱1773 熊野浦(福井村)
- ⑲1787 赤尾木浦(西之表村)
- ⑳1793 竹崎浦(葦束村)
- ㉑1801 庄元浦(昭和村)
- ㉒1808 壱田村
- ㉓1808 竹崎浦(葦束村)
- ㉔1808 竹崎浦(葦束村)
- ㉕1813 住吉村
- ㉖1839 新之浜(西之村)
- ㉗1845 西之村

第4章 種子島の宗教

種子島の寺院の三類型

種子島の仏教は律宗から法華宗となった。

赤尾木三箇寺は、領主種子島氏の居館があった西之表村赤尾木にある寺院で、同氏の菩提寺本源寺・祈願所慈遠寺・大会寺の3寺を指す。

吉祥山本源寺は、種子島時氏により文明元年(1469)に建立され、浄光院日良を開山とする種子島氏にとって特別な寺院であった。寺社奉行が置かれていたが、本源寺・慈遠寺・大会寺の3寺だけに見られる職で、ほかの寺院には置かれていない。

華藏山慈遠寺は、大同4年(809)の開基と伝えられる。種子島氏の祈願所であったことから、同氏が種子島から鹿児島に移動するとき、航海の安全を祈ったことが『種子島家譜』にはしばしば見られる。塔頭には本承院・山之寺・池之坊・妙法寺・満徳寺があった。龍華山大会寺は、応安年間(1368~75)に種子島頼時の菩提のために彼の妻が建立した。建造物には、仏祖一堂・社檀・拜殿・客殿・庫裏。門には番神堂・華表、瑞籬などがある。

「種子島廿七箇寺」は赤尾木三箇寺と全島18

か村の24か寺を合わせて27か寺としているが、この27か寺を「七箇寺」「八箇寺」「十九寺」と分けて呼称されることもあった。つまり種子島の寺院には、寺院の「格」が存在したということになる。

七箇寺は、赤尾木三箇寺と妙久寺・妙法寺・妙泉寺・満徳寺の4寺を指している。

法華宗寺院の僧侶

種子島全体の僧侶の数が判明する史料は少ないが、関連する史料も残されている。最も古い貞享元年（1684）の史料では、出家112人、嘉永5年（1852）は39人となっており、史料を平均した割合は、島内全人口の約1・38%を占めていた。

なお、薩摩藩全体の僧侶の数の割合は、0・12〜0・31%の中で推移しており、藩全体と単純な比較は慎まなければならないが、藩全体のおおよそ7・3倍の僧侶がいたことが判明する。つまり島内総人口に占める僧侶の数が非常に多かったことが明らかである。

生活と密着した法華宗寺院

法華宗は種子島で唯一の宗派であったので、当然島で生きる人々は身分を問わず、亡

くなったときはこれらの寺院を利用した。

葬儀・年忌法要は当然であるが、正月や祭りなどの年中行事のほか、雨乞い、虫戴い、病氣払い、安産、航海安全など祈禱・祈願に携わるものも多い。

キリスト教禁止と永俊尼

キリスト教禁止に関して、豊臣秀吉の禁令、江戸幕府が慶長17年（1612）、翌18年に発令した禁教令が知られるところである。

種子島家は法華宗信仰であったが、寛永11年（1634）に種子島に流罪とされた藩主関係者でキリスト教信者の永俊尼への16年間に及ぶ対応は難しいものであった。

第5章 種子島の文化

種子島家学問所・記録所兼大園学校

近世では、諸藩に藩校ができ、藩校が学問の中心であった。薩摩藩の藩校「造士館」は安永2年（1773）に8代藩主重豪によって開かれた。

安永7年8月、種子島家学問所兼記録所の

大園学校が郷校として内城内に設立した。

学問所は役所としての記録所を兼ね、大園学校は武芸所を付設し、掛役を配置し、児童を集め、素読、手習いを教えた。

藩政期に編集された「種子島家譜」

「種子島家譜」は、初代信基から、各編集期直近までの種子島氏の家督ごとに、その系譜と年次順の記事を載せる系図を作成し、明治期にも及ぶ領主種子島氏の編さん事業である。その記載量は、薩摩藩士の系図としては最多で、信頼性が高く、それゆえに「西之表市史」の中近世の叙述に重要な史料となっている。

近世の種子島の和歌

文政11年（1828）成立の「松操和歌集」に種子島久時・伊時（久基）父子の歌が見られる。久時は宝永7年（1710）に伊時（久基）に家督を譲って剃髪、山栖と名乗った。

一方、近世の種子島は流刑の地であり、優れた文化人が配流されることもあった。なかでも有名なのが山田歌子（1810〜60）である。京都出身の歌子は近衛家に仕え、和歌を香川景樹に学んだ。同じ香川門下で京都留守居役であった薩摩藩士の山田清安と知り合

い、やがてその妻となったが、清安がお由羅騒動で切腹、歌子自身も連座され、嘉永3年(1850)に種子島へ配流となった。「山田歌子刀自歌集」には次の歌が収められている。

ゆめにだに まだ知らざりし荒磯の
なみを枕のもとに聞くかな

意識すると「夢にさえ知らなかった、波が荒く打ち寄せる海岸。その海岸に寄せる荒波の音を、私は今こうして枕元で聞いているのだなあ」ということになる。この歌には「種子島へ渡りけるころ」という詞書が付いており、配流された時期に詠んだ歌と見られる。

西之表市の石造物

近世の種子島の石造物の特徴といえるのは、多くの墓塔で「南無妙法蓮華経」若しくは「妙法」の日蓮宗の題目が刻まれており、全島が日蓮宗である種子島の特異性を示している。また、その石材の多くは、山川石と呼ばれる指宿市周辺で産出する黄色溶結凝灰岩などで造立されており、鹿児島本土から大量にもたらされた。

近世の石造物で最も特徴的なものは、住吉深川の大碑文である。海沿いにある高さ4・4mの巨大な砂岩の路頭に「慶安五(1652)壬辰春時正月 南無妙法蓮華経 沙門日蓮

拝」と刻まれる。ほかの地域では見られない磨崖題目である。全島が日蓮宗であった種子島ならではの石造物である。

大的始式

大的始式は、12代当主の種子島忠時が明応9年(1500)に弓の指南役として招いた武田筑後守光長が宮中で毎年正月12日に行われる御的始式を、文亀元年(1501)に模倣したことに始まるとされる。軍陣温座祈念と同時に始められ、その年の悪魔災難を清め、平安・無病息災を祈願する古式豊かな行事である。

栖林神社(榕城中目)で、毎年正月11日に

齋行される。

午後6時から松明を焚き、三鱗紋(種子島家家紋)陣幕(陣地を囲う布)を張り巡らしたなかで、射手2人3組で各人6射をなし、36本の矢で径5尺(約150cm)の大的を射る。35本の矢が的中した場合、満つれば欠けるの戒めにより最後の1本は故意にはずされる。大的始式が「種子島家譜」に正式に記載されたのは、17代忠時の寛永元年(1624)である。

なお、大的始式は、明治4年(1871)廃藩置県の頃からほとんど止めていたが、明治22年に射礼を復活させた。



住吉深川の大碑文



大的始式 犬神蔵

第5編

近代

『西之表市史』第六編近代

第1章 明治維新と西南戦争

明治維新は、幕藩体制が崩壊し、天皇制統一国家が形成され、封建社会から資本主義社会へ移行した一連の社会的・政治的変革過程である。これにより、日本に近代化と西洋化をもたらした。

明治2年(1869)に、版籍奉還の命があり、私領種子島は終焉を迎えた。種子島の行政は、久尚公から、新地頭の平山竜助季雄に移行した。

明治4年には廃藩置県が断行され、旧薩摩藩は鹿児島県となった。種子島地頭所は、同年11月14日に郡治所となり、種子島の行政区を、上の郡・中の郡・下の郡に分け、各村の庄屋を戸長に任命した。明治6年、上の郡を縦に割って東西2区とし、東側は現和に戸長を、西側は西之表に戸長を置いた。西之表戸長には上妻謙蔵が、現和戸長には緒方仙蔵が任命された。

明治6年、征韓論をめぐる政変で下野した

西郷隆盛は、鹿児島に私学校を設立した。種子島も治める第八十八大区長に、私学校党の小倉壮九郎を任命、副区長には同じく堀与八郎が任命された。これにより、種子島の行政は、完全に私学校が掌握するところとなったのである。

明治10年、西郷ら鹿児島県士族による最大にして最後の土族反乱「西南戦争」が勃発した。種子島では、同年2月に種子島私学校が鹿児島県に向かい、到着後は既編成の各部隊に分散配置されたため、集団的行動はとれなかった。なお、大区長・副区長はかが従軍したため、行政は完全に停止した。島政の混乱を救ったのは数名の戸長であった。

しかし、西郷軍は熊本城攻略に失敗し、同年4月に城の包囲を解いて撤退した。以後は各地の戦闘に敗れるなか、種子島私学校は全



大牟礼南郷藩南洲翁財部彪賛
(鹿児島県歴史・芸術センター黎明館所蔵)



種子島私学校党の行軍

員帰順した。

種子島で、西南戦争に関する一切の事後処理が済んだのは明治12年5月と見られ、同年2月14日、県はそれまでの大区制の行政を廃し、郡町村制を復活した。

第2章 廃仏毀釈と宗教

廃仏毀釈は、明治元年（1868）に維新政府の神道国教化政策に基づいて起こった仏教排斥運動である。薩摩藩の場合、慶応2年（1866）頃から藩内各地で、神仏分離と寺院の合廃寺が行われた。明治3・4年頃には寺院が全廃された。

種子島も同様で、寺院の跡地には新たに神社が建てられたものもある。表「廃寺後に新建された神社」は、確認できる廃寺後に新建された神社である。

明治9年9月5日、鹿児島に「信教自由の令」が布達されると、種子島各地でも活発な再興運動が展開された。法華宗や浄土真宗本願寺派などが島内各地を布教していった。

平成10年（1998）における鹿児島県内の仏教系宗教学法人数について、包括団体別に見てみると、法華宗（本門流）が28ある。同

じ統計を種子島・屋久島に限定して見ると、浄土真宗本願寺派6、真宗大谷派2、真宗興正派1、真宗木辺派1、日蓮宗1、日蓮正宗1、法華宗23、単立1となり、合計で36法人を数える。このうち浄土真宗系の法人数は10あり、全体の27・8%になる。法華宗は23で、全体の63・9%となる。同宗は県全体で28あるうちの実に23（全体の82・1%）が種子島・

廃寺になった寺院	所在地	新建された神社	祭神	備考
満徳寺	西之表市上西横山	横山神社	大山祇神	
蓮勝寺	西之表市古田	豊受神社	豊受大神	
本隆寺	中種子町油久	油久神社	豊受神	廃寺後創建
浄光寺	中種子町坂井	坂井神社	豊受大神	廃寺後移転
蓮妙寺	南種子町葦永	宇都浦神社	豊玉姫命	
善福寺	南種子町平山	平山神社	豊受之大神	廃寺後創建
本因寺	南種子町西之	本村神社	豊受大神	
本妙寺	南種子町島間	上方神社	豊受大神	明治4年創建
金剛寺	南種子町西之田代	田代神社	豊受大神	明治2年創建
極楽寺	南種子町上中河内	河内神社	日悦上人・豊受大神	
極楽寺坊	南種子町上中本町	上野神社	豊受大神	

※鹿児島県神道青年会編「ふるごとのお社—鹿児島県神社誌—」、南種子町郷土誌編纂委員会編「南種子町郷土誌」、大石虎之助「種子島の社寺・民間信仰」等を参考に作成

廃寺後に新建された神社

屋久島地域に集中していることになる。

廃仏毀釈で一時的な断絶はあるものの、2島は中・近世の状況がほぼそのままの形で現代まで引き継がれている特徴的な地域といえる。

なお、種子島には、廃仏毀釈の難をくぐり抜けて現在にまで伝わる曼荼羅や仏像などが数多く存在する。

第3章 西之表市の移住と人口

明治以降、種子島は「移住の島」と呼べるほど、全国各地からの移住を受け入れている。県内の甌島・桜島・徳之島はもとより、静岡県や長崎県などからの受け入れもある。記録が残っている移住戸数は800戸を超える。

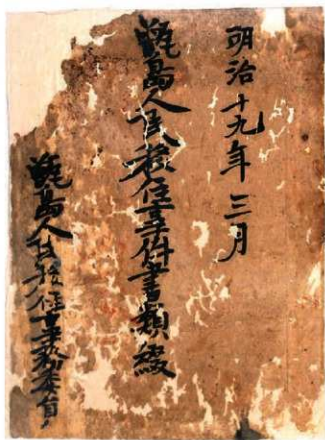
最も移住戸数が多いのが甌島である。甌島は、薩摩半島の西方約30kmの東シナ海上に浮かぶ島で、北東から南西に連なる上甌島・中甌島・下甌島の3島からなる島である。

甌島では、明治17（1884）・18年の台風襲来により大飢饉となり、さらに悪疫が流行した。県は島民からの窮状の訴えに対して、明治19年に島民を種子島に集団移住させることを決定した。

現自治体	村名	移住世帯数(戸)		字
		明治19年	明治20年	
西之表市	西之表村	15	16	石堂、今年川、鞍野
	国上村	13	12	野木平
	伊関村	16	7	柳原
	安納村	3	2	軍場
	現和村	22	8	川氏
	安城村	26	24	平山、平岡、大野
	古田村	25	0	上之町
	住吉村	11	1	形之山
	合計	131	70	
	中種子町	牧川村	4	0
納宮村		15	3	
増田村		24	15	
野隠村		24	14	
油久村		9	5	
田島村		14	5	
坂井村		17	6	
合計	107	48		
南種子町	中之村上方	25	0	股の口、長木田、大川
	中之村下方	11	0	真所、里、山神、郡原、豊田
	西之村	16	0	崎原、上瀬戸、立石
	島間村	20	0	浜久保、田尾、牛野
	合計	72	0	
総計	310	118		

(参考：野木之平移住百年記念実行委員会「野木之平百年」)

甌島移住民の島内移住状況



甌島人民移住事件書類綴

西之表村に甌島人民移住事務所、野間村・葦永村に出張所が設置され、移住の受け入れが始まった。明治19・20年の甌島移住民の島内移住状況は、表「甌島移住民の島内移住状況」のとおりである。

大正3年(1914)1月12日、桜島が54年ぶりに大噴火した。噴火5日後には郡長宛てに「桜島罹災民移住に関し協議の件あり。貴官及び三種子村長(北種子村・中種子村・南種子村)至急出頭されたし」という電報が届いており、罹災民の種子島移住計画が持ち上がっていることがわかる。

移住は、3月3日以降、10回にわたって行

われ、336戸・2193人が入植した。なお、移住は、国が国有林を県に無償で払い下げ、県はこれを罹災者に貸与し、開墾が完了して一定の年数が経過したら、無償で譲渡する仕組みであった。

これらの集団移住により、明治11年には8460人だった本市の人口は、大正14年には1万3646人と増加し、昭和34年(1959)の3万3637人でピークを迎えた。

第4章 太平洋戦争

昭和16年(1941)年12月8日、日本陸軍はイギリス領のマレー半島に上陸し、海軍はアメリカの海軍基地があるハワイの真珠湾(パールハーバー)を攻略するなど、中国での泥沼の長期軍事侵攻も続けながら、太平洋戦争を開始した。

昭和18年2月のガダルカナル島での敗退から、日本軍は次々と後退を重ねた。同年6月、種子島には特設警備第二三三大隊が配備された。翌19年7月には、独立混成第二十三連隊

を基幹に臨時に集成した砲兵隊を増強し、在島の特設警備隊第二百三大隊を配属する守備隊を編制して、独力で種子島の防備に充てた。

昭和20年4月、新たに四カ大隊が増強された独立混成第九旅団となった。人員装備は表「種子島駐屯独立混成109旅団人員装備」のとおりである。

この頃になると、西之表ではそれぞれが知人を頼り、麓や榎之峰、横山方面へ家財道具や商品の疎開を始めた。昭和20年3月18日には、米軍戦闘機による反復機銃掃射もあり、西町川端川までの中心街が焼け落ち、死亡者や負傷者、行方不明者を出した。また、翌月

からは学童疎開も始まり、家族は分散するに至った。

昭和19年2月、大崎から島間の西海岸一帯にかけて数百人の日本兵の遺体が打ち上げられた。また同様に、馬毛島にも1000人近い遺体が漂着し、島民によって引き上げられ埋葬された。

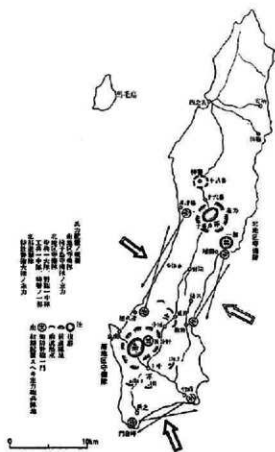
昭和20年7月からは、沖縄海域から飛来したグラマン戦闘機・コルセア戦闘爆撃機や南方から飛来するB24爆撃機の襲来も激しくなり、8月には全島民を集結させる計画が進められた。また、アメリカ軍ではオリンピック作戦（九州南部上陸）開始を前提に種子島上

陸が計画されていた。

この作戦遂行のための地図「SHIMAMANE」が東京都北区飛鳥山博物館に保管されている。

地図は、種子島の2万5000分の1の上陸作戦用地図で、地名は日本陸軍参謀本部陸地測量部発行の5万分の1地形図が使われている。

上陸作戦は、終戦によって実行されることはなかったが、実行されれば、種子島全体で沖縄戦のような地上戦闘になっていた可能性もある。

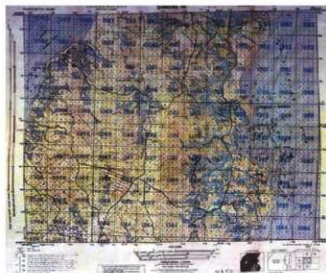


種子島守備隊兵力配置概要図
 (『戦史叢書 本土決戦準備』より)

将校	202	37耗連射砲	4
准・下士官	681	41式山砲	4
兵	5,014	噴進砲	50
馬	111	野砲	12
小銃	4,656	高速機関砲	3
重機関銃	13	乗用車	3
軽機関銃	149	貨物自動車	35
擲弾筒	122		

○仮編成の独立歩兵二大隊は含まない
 ○海軍所属の陸軍部隊は含まない
 [特設第五十五機関砲隊種子島戦記] 川添利男著より作成

種子島駐屯独立混成109旅団人員装備（陸軍部隊）



アメリカ軍が作成した種子島上陸作戦用地図「SHIMAMANE」
 (東京都北区中央図書館寄託「編纂朝成家文書」)

第5章 産 業

農 業

明治維新により地租改正が実施され、土地の私有化が認められたが、種子島では自給自足が中心で農業経営はおぼつかない状況であった。『鹿児島縣熊毛郡北種子村々是調査』全一によると、明治35年（1902）の北種子村の農業は、自作農家849戸、自作兼小作農家1457戸、小作農家285戸となっている。昭和初期も明治中期とはほぼ変わらず産業として確立していくのはまた後のこととなる。

甘蔗・製糖

甘蔗（サトウキビ）は、文政10年（1827）、23代島主久道の時代に、薩摩藩から種子島でのサトウキビの栽培を許可されたことに始まる。明治初期の糖業の発展は、自宅の畑に製糖工場を設け、合理的な製糖方法を工夫した飯島和七郎の尽力によるところが大きい。

明治時代中期の種子島における甘蔗栽培及び砂糖の生産高は、表「明治時代中期の種子島における甘蔗栽培及び砂糖の生産高」とおりで、明治17年の製糖伝習所（住吉村）設

年	甘蔗反別（町）	甘蔗収種（貫）	砂糖産高（斤）
明治21年	127.1	803,179	548,610
22年	195.4	1,278,000	764,569
23年	213.0	2,359,000	1,315,419
24年	219.3	2,553,914	1,156,875
25年	326.6	3,292,720	818,288
26年	595.3	4,315,485	1,574,906
27年	734.9	5,460,500	241,179
28年	709.4	4,267,368	292,991
29年	713.0	5,490,100	-

〔鹿児島県統計書〕

明治時代中期の種子島における甘蔗栽培及び砂糖の生産高

置で反別生産高が向上している。

しかし、大正13年（1924）に始まる世界的糖価の下落から、種子島の甘蔗栽培農家戸数も、農家戸数の40%以下になった。

昭和に入ると製糖技術の改善、蔗種の改良、規格の統一、さらに石油発動機を使用した圧搾などにより西之表町の生産額は飛躍的に増加した。

戦後は、沖縄や奄美諸島が米国の統治下に置かれたため、国内の甘味資源は底をつき、そのため種子島の黒糖がブームを呼び、昭和24年頃は、黒糖1斤（600g）が400円の高値をつけるなど価格が暴騰した。

茶

茶業について、県は明治19年（1886）に飯島から古田上之町へ移住した住民に茶の栽培を奨励していた。

古田番屋峯での本格的な茶業は、明治35年初代郡長牧野篤好が退職後、郷里の静岡で種子島での茶業を奨励したことに始まる。

古田では昭和41年（1966）から「ふるたわせ」という名で、日本一早い走り新茶を商品化している。



茶業記念の碑（左）

写真中央は移住百周年記念の碑、右は移住記念の碑

養 蚕

文化14年（1817）、羽生六郎左衛門道深によって初めて種子島に養蚕業を取り入れた。明治に入ると、西南の役で群馬県に投獄された種子島時康・肥後時宏の2人が、同地で養蚕技術を習得、帰島後に新方法で養蚕を始めた。その後、県によって北種子村に養蚕伝習所及び蚕種製造所が設けられた。

大正から昭和初期にかけて養蚕業は発展したが、戦後は化学繊維の爆発的普及により衰退した。

煙 草

煙草は、一説によると天文12年（1543）8月に種子島の南端門倉岬に漂着した南蛮船によって、鉄砲とともに伝来したと伝えられている。江戸時代初期、幕府は煙草の栽培を禁止していたが、「種子島家譜」によると、元禄16年（1703）に栽培が許可されたときには、すでに種子島では4町9反2畝15歩の耕地で栽培されていた。

種子島で煙草が産業として耕作されるようになったのは、昭和14年（1939）頃で、翌15年には西之表煙草耕作組合が設立された。

樟 脳

樟脳（クスノキ）（クスノキの木片を水蒸気蒸留して製造したもの）は、薩摩藩にとつて金、銀と並ぶ重要な輸出品だった。種子島では、明治15年頃に樟脳製造が始まり、大阪などへも出荷した。防虫剤や消臭剤、セルロイド原料などとして多用されたが、戦後は石油系プラスチックの台頭や安価な合成防虫剤の普及により需要は激減し製脳事業は衰退、西之表の樟脳製造事業も完全に消滅した。

畜 産

種子島は、温暖な気候で天然の牧草に恵まれ、牛馬の飼育に適した土地柄である。

畜産は、明治34年に「種子島産牛馬組合」を設立し、大正4年には北種子村に鹿兒島高等農林学校の種子島牧場が設置された。以後、酪農が発展し、大正15年には中種子町で婦人酪農業組合が設立され、県内初のバター製造が始められた。

漁 業

四方を海に囲まれた種子島は、古くから漁業で栄えた。明治中期になると、島内15浦で

漁業を業とする漁業集落が存在した。明治26年の北種子村の漁業戸数は309戸、漁業人口は1418人、漁船395艘、明治30年には、それぞれ380戸、1677人、349艘であった。

明治40年、西之表東海岸沖に平草漁場が発見され、漁具採集方法などを改良した「平草漁」が定着。漁は、現和の各浦はもとより、国上・浦田・湊・佐多方面からも加わり、大いににぎわった。

また、馬毛島周辺はトビウオの好漁場であり、漁が盛んに行われていた。



平草漁創始者顕彰碑（現和庄司浦）

製鉄・鍛冶・種子鉄

種子島の海岸では、容易に多量の砂鉄採取ができ、また広葉樹が多いことで製鉄に必要な

な多量の木材も容易に確保できたことにより、製鉄に必要な基盤が備わっていた。

天文年間（1532～55）にはすでに、製鉄技術は確立していた。このことにより当時の鍛冶の技術によって火繩銃の複製が可能となった。その後、鉄砲鍛冶が鉄鍛冶に移行し、種子鉄と呼ばれるほど全国的な評価が高まっていった。

明治24年の北種子村の売上金営業届によれば、鍛冶職（野鍛冶含む）24人、助人25人がある。

大正14年10月には、種子鉄同業組合が結成され、種子鉄はさらに発展した。生産は、明治42年に1万2000本、生産額は18000円、以降それぞれ、大正2年に2万8800



種子鉄

本、3168円、昭和7年に4万本、1万5000円、同10年17万本と徐々に増えていった。

第6章 交通

九州で最初の定期船といわれているのが、明治10年（1877）に鹿児島―西之表間を月1回運航した中村汽船である。

鹿児島県では、離島からの交通便の確保のため、明治23年、種子屋久島航路を命令航路とし開設した。月2回運航したが継続できず、代わって松崎汽船や深川運輸の就航によ



大隅国熊毛郡種子島沿海圖
(京都大学附属図書館蔵)

り、交互に月3回の運航となり、やや便利になった。その後も長崎・鹿児島・西之表の三角航路が運航している。

大正以降も、多くの民間会社が航路に参入し、競争が激しくなった。昭和20年（1945）3月には、戦災を避けるため、種子屋久航路の運航が禁止された。この頃から西之表もたびたび空襲を受けるようになった。運航が解除されたのは、同年9月であった。

一方、陸上交通は道路整備とともに発展し、明治の終わり頃になると荷馬車、客馬車の利用が開始された。自動車の利用はごく一部であったが、昭和初期に丸尾自動車会により、西之表・住吉・浜津脇・野間・上中で運行が始まった。

第7章 明治大正に活躍した医者

藩政時代、種子島の医療は、漢方医から西洋の医学を学んだ者が医者になるようになり、飛躍的に改善された。

安城村下之町生まれの上妻慎吾は、明治8年（1875）に西洋医学の手ほどきを受け、同14年に28歳で帰郷し、75歳で逝去するまで安城村上妻医院で診療を続けた。

最上宏は、東京帝国大学医学部専科に籍を置き、明治43年に帰郷。医療だけでなく、種子島の代表作物となった落花生の栽培奨励や、西之表市長としても多大な貢献をした。

馬場愛子は、大正12年（1923）に東京女子医学専門学校を卒業し、翌13年に中種子出身の馬場農夫雄と結婚。同年8月に西之表東町玉川招魂下に開業した。戦後は軍馬の払い下げを受け、起伏の激しい大字への往診には、乗馬して出かけた。

第8章 教育

明治5年（1872）の学制公布後、西之

表の学校（のちの榕城小学校）を種子島の母校とし、第七十三郷校として、同時に野間と葦永に分校を設置した。これが熊毛郡教育の発達の基礎となるものである。明治7年には、住吉・納官・国上・現和・坂井・増田・久久・西之・下中・平山・島間・安城の12村に各支校を設置した。

明治14年5月、「小学校教則綱領」が公布された。これにより小学校は、初等・中等・高等に分けられ、修業年限を初等と中等は3年、高等は2年とした。

明治中期の種子島における就学状況等は表「明治中期の種子島における就学状況等」のとおりである。

中学校は、大正15年（1926）3月に、県立第一鹿児島中学校として設立、昭和4年（1929）3月に、県立第一鹿児島中学校分校から独立し、県立種子島中学校となった。幼児教育は、大正13年に西願寺に開設された私立西之表幼稚園が最初である。

社会教育団体としては、婦人会と青年団が挙げられる。北種子村婦人会は、明治37年に発足し、戦前の昭和9年（1934）12月に西之表町

国防婦人会が発足。会員数は3000人であった。青年組織は、藩政時代には郷中会と呼ばれ、青年団組織への母体となった。種子島の青年組織は、明治23年に「青年会」が島内各村に組織され、大正6年に北種子青年団が発足した。終戦後の昭和21年、女子青年団を合併して、西之表町青年団が新たに組織された。

	明治23年	明治24年	明治25年	明治26年	明治27年	明治28年
学齢人員	3,818	3,706	4,644	3,933	3,668	4,153
就学人員	2,066	1,801	2,396	2,740	2,817	3,014
男	1,799	1,470	1,939	1,798	1,726	1,783
女	267	331	457	942	1,091	1,231
就学率（%）	54.11	48.6	51.59	69.67	76.80	72.57
就学率（県平均）	34.5	35.44	39.63	49.56	52.08	52.66
不就学人員	1,752	1,905	2,248	1,193	851	1,139
男	266	357	761	270	180	309
女	1,486	1,548	1,487	923	671	830
不就学率（%）	45.89	51.4	48.41	30.33	23.2	27.43
不就学率（県平均）	65.5	64.56	60.37	50.44	47.92	47.34
公立小学校数	25	26	25	25	25	25
簡易科	20	20	—	—	—	—
尋常科	3	3	22	22	22	22
尋常高等科	2	2	1	1	1	1
高等科	—	1	2	2	2	2

〔鹿児島県統計課〕

明治中期の種子島における就学状況等

第6編

現代

代

《西之表市史》第七編現代

姉妹都市

●ポルトガル共和国アルガルヴェ地方 ヴィラ・ド・ビスポ市

1543年、種子島に鉄砲を伝えたポルトガル人たちが乗っていた船はヴィラ・ド・ビスポ市にあるサグレス岬から出発したといわれている。西之表市とヴィラ・ド・ビスポ市は鉄砲伝来450周年の平成5年（1993）10月1日に姉妹都市盟約を締結した。現在も、鉄砲まつり等の市行事の招へいや、ヴィラ・ド・ビスポ市への訪問など交流が行われている。

第1章 西之表市の市政

西之表市の誕生

地方自治法の一部改正によって、市の人口要件に特例（時限措置…人口要件の引下げ）が設けられたことから、昭和33年（1958）10月1日に当時鹿児島県内で13番目の市となる西之表市が誕生した。



市 章

「西」の字の図案化であり、外側円形は海岸線を表わし、鋭角にのびるA形は市の飛躍的發展を意味します。



シンボルマーク

市の花「鉄砲ゆり」と市の蝶「ツマベニチョウ」、種子島をイメージさせる「波」がモチーフとなっています。



市の蝶
ツマベニチョウ
(シロチョウ科)

古くから人間に親しまれている蝶の中でも最も美しいツマベニチョウが、市の花木であるぶっそうげの花から花へ飛び交う風情は、南国的です。



市の花木
ブツウゲ
(アオイ科)

夏の種子島を代表する花木で、青い海・緑の島をバックに真紅に乱れ咲く姿は、南国情緒が豊かです。繁殖も容易で、開花期間も長く気候風土に適しています。



市の木
アココ
(クワ科)

天に伸びる生命力は市の発展を、気根が地中に入り新しい樹幹となる活力は市民の強くなぐたくましい姿を、幹と幹を寄り合わせ大地に立つ姿は市民の協働と連帯を表しています。



市の花
テッポウユリ
(ユリ科)

市内の原野に自生しているてっぽうゆり。その形状から名付けられたともいう鉄砲百合は、種子島欲を連想させ、親しみを感じさせます。



ロドリグス市長と榎本市長（平成5年）

●鹿児島県伊佐市（旧大口市・旧伊佐郡葦刈町）

第2次世界大戦中、種子島から大口市及び伊佐郡葦刈町へ集団疎開した縁によって昭和37年に両市町と姉妹都市盟約を締結した。その後、平成の大合併により大口市と葦刈町が合併し誕生した「伊佐市」と平成21年に改めて姉妹都市盟約を締結し、平成26年には災害応援協定を締結した。鉄砲まつりの招待や伊佐市のもみじ祭りへの参加、疎開体験を継承する取り組みや行政間での職員交流など、様々な交流が行われてい



西之表市・大口市
姉妹都市盟約締結



西之表市・伊佐市姉妹都市盟約締結調印式

る。

友好都市

鉄砲伝来地の種子島と製造地である大阪府堺市・滋賀県長浜市は鉄砲を縁として友好都市盟約が締結されている。

●大阪府堺市

昭和61年に友好都市盟約を締結して以来、友好30周年記念植樹式や相互の記念行事への参加などの交流が行われている。

●滋賀県長浜市

昭和62年に友好都市盟約を締結して以来、鉄砲隊やスポーツ少年団の相互交流、市職員との人事交流などが行われている。



左：種子島火縄銃保存会
中央：堺火縄銃保存会（大阪府堺市）
右：国友鉄砲研究会（滋賀県長浜市）

行政付属機関等（区会等）

世間一般的には町内会の世話人等のことを町内会長と呼んでいるが、本市の西之表町時代は「駐在吏員」と呼んでいた。その後「部落市政連絡員」と改称されたが、集落によっては「部落長」や「部落会長」と呼ばれるところもあった。その後、制度の見直しが行われ、「地域活性化推進員」を経て「行政連絡員」に改称されており、部落・町内会の名称は「自治会」に統一された。現在、本市には95の自治会がある。

また、本市には小学校区域を区割りとして12の校区があり、それぞれの校区に校区行政連絡員（区長）を設置している。



校区配置図

集落支援員制度

集落支援員制度とは、地域の実情に詳しく、知見を有した人材を市が委託し、連携することで地域の維持活性化を図る制度のことである。本市では全校区に集落支援員を配置し、各校区の実情に沿った支援などを通して校区運営のサポート活動を行っている。

地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、都市地域から地方へ移住し、様々な分野で地域の活性化を推進する活動を行いながら、定住・定着を図る取組のことで、本市では平成22年度からこの制



地域おこし協力隊 (令和7年度)

度を活用し、移住定住支援やふるさと納税促進、地域資源の活用や人材育成などの地域活性化活動の支援を行っている。

行政と市民の意見交換の場

「校区と語る会」

本市において、市長と地域住民が意見交換をする「市長と語る会」を開始したのは昭和61年12月のことである。現在は、「校区と語る会」と称し、市長が市の幹部とともに、各校区の公民館などに出向き、住民と自由な意見交換を行うもので、市長の施策方針を直接市民に伝える場となっており、各校区が抱える問題を市政に反映し、共に考え、行動する「共働のまちづくり」に取り組み機会になっている。



校区と語る会

ふるさと応援寄附金(ふるさと納税)

ふるさと納税とは、生まれ故郷や応援したい自治体に寄付を行い、その寄付額のうち2000円を超える分が翌年の住民税・所得税から控除される制度のことをいう。

本市では平成20年からふるさと納税の促進を図っており、平成26年度からは特産品等の「返礼品」の提供や、インターネットを活用した寄附金受付を開始するなどに取り組んだ結果、寄附金額を伸ばした。令和7年には約2億円の寄付を受け入れている。

ふるさと応援寄附金
ふるさと応援寄附金とは、生まれ故郷や応援したい自治体に寄付を行い、その寄付額のうち2000円を超える分が翌年の住民税・所得税から控除される制度のことをいう。

本市では平成20年からふるさと納税の促進を図っており、平成26年度からは特産品等の「返礼品」の提供や、インターネットを活用した寄附金受付を開始するなどに取り組んだ結果、寄附金額を伸ばした。令和7年には約2億円の寄付を受け入れている。

ふるさと応援寄附金の種類

- ふるさと納税**
ふるさと納税とは、生まれ故郷や応援したい自治体に寄付を行い、その寄付額のうち2000円を超える分が翌年の住民税・所得税から控除される制度のことをいう。
- ふるさと納税の特典**
ふるさと納税の特典とは、ふるさと納税を行った自治体からの特産品やサービスを受け取ることができること。
- ふるさと納税のメリット**
ふるさと納税のメリットとは、ふるさと納税を行った自治体からの特産品やサービスを受け取ることができること。
- ふるさと納税のデメリット**
ふるさと納税のデメリットとは、ふるさと納税を行った自治体からの特産品やサービスを受け取ることができること。

ふるさと納税返礼品パンフレット

平成の大合併

平成11年から22年まで実施された市町村合併のことで、県内では96自治体（14市73町9村）が43自治体（19市20町4村）となった。

種子島では平成14年に種子島地区任意合併協議会が設立され、合併問題に関する住民説明会、アンケート調査の実施や同協議会による協議を進めたが、1市2町による意見の合意に至らず、平成15年をもって協議会は解散し、合併は見送られた。一方、屋久島では、上屋久町と屋久町が合併し、屋久島町となった。



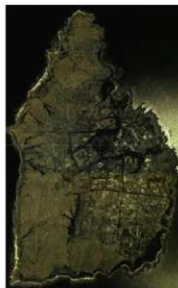
島内3か所で開催された合併問題講演会

馬毛島の沿革と概要

馬毛島は、本市の西方12^{km}の海上に位置し、周囲16・5^{km}、面積8・17平方^{km}の無人島である。明治期には、政府の綿羊飼育の試験場が開設されていた。戦時中は、岳之越に機関砲座を持つトーチカが構築され、海軍特設部隊が駐屯し、南方航路の防衛上の補助的基地の役割を担った。昭和26年の緊急開拓法の施行に伴い、農業開拓団39戸が入植し、集落を形成した。その後、昭和28年に西之表市立榕城小学校馬毛分校が、昭和30年には西之表市立榕城中学校馬毛分校が開校した。昭和39年には榕城小学校から独立し、馬毛小・中学校と改称した。



トーチカ



馬毛島（昭和40年）



馬毛島丸就航祝賀式



馬毛島小中学校校舎

昭和38年には馬毛島市営渡船馬毛丸が就航するなど、島民の人口は528人と増加した。その後、産業衰退や人口減少により、昭和55年に無人島となったことで、馬毛島小・中学校は休校し、平成8年に閉校した。その間、民間会社による馬毛島総合開発計画や、石油国家備蓄基地構想もあったが、いずれも実現していない。無人島となった後もトビウオ漁の漁業基地などに活用されていたが、現在は自衛隊馬毛島基地（仮称）の整備が行われている。

第2章 市議会

本市が誕生した昭和33年（1958）に西之表市議会が発足した。

発足時の議員定数は30名であったが、更なる合理的な議会運営を目指し、令和3年（2021）からは議員定数を14名とし、現在に至っている。

西之表市議会では、「議会だより」の発行や、市のホームページなどを通して、広く情報を発信している。平成25年（2013）からは、議会報告会及び意見交換会を開催している。また、令和2年の第3回定例会からYouTubeの生配信を行うなど、議会の見える化の取り組みを促進している。



現職市議会議員



現在の議場



昭和60年当時の議場

第3章 産業

西之表市の産業構造

本市の産業構造は第1次産業の農業と漁業が主である。昭和25年（1950）の国勢調査によれば第1次産業の就業者数の割合は79・4%を占めていた。その後の農林業・漁業の衰退と、担い手不足や高齢化などにより就業者数の割合は落ち込んでいるが、国・県と比較すると高い割合となっている。

農業

●さつまいも

江戸時代前半、日本各地では、食料飢饉によって、人々は苦しい生活を強いられていた。第19代島主種子島久基は、島民の生活を豊かにするために、元禄11年（1698）



榎林神社



安納いも



大瀬休左衛門夫婦の墓

に琉球国王尚貞からからいも1籠の寄贈を受け、家老の西村時乗に栽培を命じた。西村時乗は下石寺の農家の休左衛門に栽培を託した。休左衛門は苦勞の末、栽培を成功させた。種子島の人々は飢饉から解放された。なお、種子島久基はからいもの神様として栖林神社に祀られ、休左衛門は栽培の功績を称えられ、「大瀬」という苗字と短刀一口、生前に建てら

れる墓（寿像墓）が贈られている。なお、寿像墓は市指定文化財に指定されている。

安納いもは、糖度の高さや食味の良さから全国的に人気が高まっており、平成22年（2010）には「安納いもブランド推進本部」が設立され、栽培技術の向上や品質基準の統一を推進し、糖度基準を満たした芋を「安納いも」としてブランド認定している。令和3年（2021）には農林水産物・食品の名称を品質の基準とともに国登録し、知的財産として保護する制度である農林水産省の地理的表示（GI）に登録された。鹿児島県内では、桜島小みかんや鹿児島黒牛などに続き6例目である。平成30年に初めて国内で発症が確認されたサツマイモ基腐病は糸状菌というカビの増加が原因とされる病害で、感染すると地際の茎が黒変し、茎葉は黄色や紫色に変色して次第



安納いもブランド認証シール

にしておれ、枯死して腐敗する。本市においても令和2年度の生産量が前年から42%減するなど被害は深刻であったことから、令和4年4月にサツマイモ基腐病対策班を設置し、被害拡大を防いでいる。

畜産業

鹿児島県の畜産は温暖な気候や広大な畑地に恵まれており、令和5年度の県の畜産の出額は、375.4億円にのぼり、全国2位となるなど、全国有数の規模に発展している。

●肉用牛

本市を含む県内の島嶼部の畜産は、酪農とともに、肉用牛子牛生産が多くの割合を占めている。

島嶼部は温暖な気候と豊富な草資源に恵まれている一方で、飼料代や出荷経費などの海



肉用牛

糖業

さとうきびの生育の適温はおおむね25℃以上とされており、種子島はさとうきび栽培の北限地とされている。

種子島では、さとうきびのことを「オーギ」と呼び、島内に深く根ざした作物として古くから栽培されており、戦後は砂糖生産地である沖縄奄美を失ったことから、種子島の甘藷

明治42年に国や県の指導によって、ホルスタイン種が導入されると急速に飼養頭数を増やしていった。その後、搾乳工場の操業により搾乳量も増加し、婦人酪農組合によってバター製造も行われていた。

昭和25年には種子島酪農組合連合会が設立され、昭和40年には西之表市乳処理工場を建設し「種子島牛乳」を生産・販売するなど順調であった。

しかし、生産量に対して消費が伸び悩んだことにより経営が悪化したため、南日本酪農協同株式会社に事業を譲渡した。昭和63年には住吉地区に工場を新築移転し、種子島牛乳・

●乳用牛

上輸送コストが高い状況であることに加え、牛肉の輸入自由化や口蹄疫による影響を受けている。近年は、ブランド確立による影響を受けなどの振興が図られ、雌鳥有数の黒毛和牛の子牛の生産地として有名となっている。

現在の種子島内の畜産における和牛経営は、母牛を飼い、子牛を生産する繁殖経営が主となっており、西之表市生まれの牛が県内をはじめ全国の肥育農家に出荷され、各地のブランド牛として育てられている。

本市での乳牛飼養は明治中期から始まり、



種子島牛乳と種子島バター



南日本酪農協同会社 種子島クーラーステーション

バター・コーヒー牛乳などの生産を行っていたが、平成18年の工場再編に伴い同工場は閉鎖した。現在は、種子島クーラーステーションとして集乳・検査を行い、都城工場へ送乳している。



薩南諸島の黒糖製造技術（沖ヶ浜田黒糖製造）



さとうきびの刈り取り

糖は注目を集めた。

また、黒糖ブームの影響により、作付面積が急速に拡大し、農家の収入は増加した。

近年は、高齢化等による担い手不足などが課

題となっており、生産量の減少が続いているが、さとうきび増産プロジェクトをもとに、生産性の高い複数年株出栽培への移行や機械化移管体系の確立が進められている。

伊関校区沖ヶ浜田地域の黒糖製造は、「薩南諸島の黒糖製造技術」として国登録無形民俗文化財に登録されている。

水産業

種子島の漁業は藩政末まで船奉行の統制下に置かれていたため産業としては微々たるものであった。

大正時代になると多くの浦で漁業組合が結成されたものの小規模な組織であった。

戦時中は、軍需用・国民食糧としての水産

物の安定供給の役割を担っていたため、軍事産業に次ぐ地位が与えられていたが、戦局の悪化とともに漁業生産は急速に下落した。戦後はインフレもあり、漁業も好景気となったが、近年は漁業就業者の減少や燃油価格の高騰に加え、温暖化による海水温の上昇など水産業を取り巻く情勢は一層変化しており、本市では漁業の安定経営の確立と水産業者の担い手の育成、漁港施設機能の整備などを図っている。



水産物の賑りの様子

商業

本市は種子島の表玄関として商業の中心地を形成してきたが、昭和54年をピークに商店数・従業者数・販売額は減少を続けており、市や商工会等による振興策が図られている。近年は港町再生構想に沿って中心市街地の活性化を図っている。

●商工フェスティバル

平成5年に「にぎわいパーサル 種子島秋



西之表市商工フェスティバル（平成30年）

砲村祭り」として開催され、平成8年に現在の「西之表市商工フェスティバル」に改称されている。商工業の振興と経済活性化を目的に、特産品の販売、鉄砲太鼓の実演や歌謡ショーなどのステージショーが開催されている。

●種子鉄・種子包丁

本市の特産である「種子鉄」は、明治23年の内国勸業博覧会出品で広く知られるようになり、大正14年（1925）には種子鉄同業組合が結成され、戦前の生産量は17万本を数えた。戦後は、金型によって打ち抜き、成型さ



種子包丁・種子鉄

れる「抜き刃物」が盛んとなったため、種子鉄のような「打ち刃物」は勢いをなくした。現在は「梅木本種子鉄製作所」「池浪刃物製作所」「田畑刃物製作所」の3社のみが製造している。なお「種子鉄」は昭和63年3月31日に、「種子包丁」は平成5年3月29日に鹿児島県伝統工芸品の指定を受けている。

また「西之表の種子鉄製作技術」は、平成24年3月8日に、民俗文化財としては県内初となる国選択無形民俗文化財（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）に指定された。

鉱業

国内で砂鉄を原料とした砂鉄鉱業が本格化したのは大正期からで、戦後は高炉鉄の増産や技術的進歩などに伴い、加速的に発達した。

本市では、昭和32年に東邦金属株式会社の子会社として砂鉄採掘所が操業を始め、昭和37年には伊関



砂鉄採掘場（東邦金属株式会社）

校区の沖ヶ浜田に第2砂鉄採掘所が開設するなど、最盛期の従業員は100人を超えていた。しかし、安価で豊富な海外鉄鉱石の登場などのおりを受け、昭和40年代前半で操業を終了している。

観光業

本市の観光振興は、西之表市観光協会発足を機に急速に進んだ。西之表市観光協会は昭



太鼓山（川渡り）

和34年に発足し、その後、島内1市2町の観光協会が統合し、種子島観光協会が設立された。これまで、イベントの開催や観光誘致のPR活動等を行っている。

●種子島鉄砲まつり

不定期開催であった種子島鉄砲まつりは昭和37年の鉄砲伝来420年を契機に年中行事となった。同年の第1回種子島鉄砲まつりは、

10月12日に開催され、ポルトガル大使館参事官を招へいし、南蛮行列や民俗芸能の発表会等が行われた。昭和45年からは「種子島鉄砲まつり」と八坂神社境内を起点に市内を太鼓山・山車が繰り出す「祇園祭」と「港まつり」を一つに統合して7月に開催していたが、現在は8月下旬に開催している。

なお、太鼓山は市指定無形民俗文化財に指定されている。



こどもみこし



女山車



火縄銃試射

第4章 構築（建設・土木）

道路

国道58号は鹿児島市から種子島、奄美大島を通り、沖縄県那覇市に至る一般国道で、複数のフェリーによって結ばれる「海上国道」となっている。市内にはそのほかに、県道75号西之表南種子線や352号路線の市道がある。



橋

市内で最も長いカシミア橋は平成18年（2006）3月に供用を開始した。橋の長さは207mで、地元の安城校区・立山校区の「カシミア号乗組員を救助した美徳を種子島で一番長い橋の名前にすることで、後世に伝えたい」という思いから名付けられた。

カシミア号とは、明治18年（1885）に種子島東方沖で難波したアメリカ商船のことで、



カシミア橋

公園

●わかさ公園

昭和40年（1965）に開園したわかさ公園は総合公園に位置付けられる。昭和51年には山口県国機関区を走っていた蒸気機関車が設置され、鉄道の無い種子島の子どもたちに好評だった。昭和52年には客車部分を西之表市交通資料館として開設したが、腐食が進んだため平成5年に解体され、現在はわかさ公園内の遊具広場に車輪のみが残されている。

●あっぱーらんど

あっぱーらんどは、西京ダム周辺整備事業として着工し、平成12年に全面開園した。あっぱーらんどには、公園広場やゴーカート場、遊覧ボート・アスレチック・野外ステージ・多目的交流館のほか、多目的グラウンドや、グラウンドゴルフ場、屋根付競技場がある。なお、施設名称の「あっぱー」は、種子島の方言で「遊ぼう」という意味である。

立山海岸と伊関海岸に漂着した乗組員を安城村・伊関村の村民が救助し、手厚い介抱を行い、母国へ無事送り返したことに、感銘を受けた当時のアメリカ大統領より感謝状と金メダル、5000ドルの大金が両村に送られた。

カシミア号乗組員救助に関する石碑の一部



安城校区



伊関校区



立山校区



現在も残されている車輪



設置されていた蒸気機関車



あっぱーらんど

港湾・漁港

本市には10の漁港と10の港湾がある。また、国は災害発生時の緊急物資や幹線輸送の拠点として西之表港洲之崎地区複合一貫輸送ターミナル事業において整備を進めており、令和10年（2028）度の完成を目指している。



西之表市の漁港と港湾の位置図



昭和30年代の西之表港

第5章 衛生・環境

水道

本市の水道事業は昭和26年（1951）に甲女川の伏流水を水源とした「西之表市水道事業」として給水を開始するまでは、谷川の水や山間の湧水、井戸水を小集落単位で共同利用していたといわれている。その後、5次にわたる拡張事業を実施し給水区域を広げた。また、平成12年（2000）には阿曾浄水場の更新を行ったことで、浄水能力が向上し、安全・安心な水が安定して供給されている。



阿曾浄水場

生活排水（し尿処理）

昭和29年頃から上之原や城ノ浜の綿打川等にし尿処理槽を設置していたが、増加し続けるし尿に対応するため、昭和41年に住吉にし尿処理施設を建設した。その後、施設の老朽化や処理能力の低下から、昭和57年に大型し尿処理施設「西京苑」を伊園校区に建設した。平成28年には西之表市汚泥再生処理センター「西京苑」を建設し、従来のし尿・浄化槽汚泥に加え、西之表市立給食センターの生ごみ等の有機性廃棄物を受け入れ、汚泥と混合させた後、脱水し発酵させ、堆肥として再生利用（農地還元）を行っている。



西京苑

ごみ処理

本市では、昭和34年まで城ノ浜の綿打川の南側の谷間を廃棄場として活用していた。その後、下西校区の鞍男（現在の川迎）の谷間に変更したが、排出されるごみが急増したため、



資源ごみ拠点収集



種子島清掃センター

同地に焼却施設を建設した。平成24年には種子島地区広域事務組合（西之表市中種子町）による一般廃棄物処理施設「種子島清掃センター」が稼働した。種子島清掃センターは塵芥焼却施設とリサイクル施設、最終処分場を備えた複合施設である。また、家庭ごみの減量化に向けて、分別収集などのリサイクルの推進や有料ごみ袋制度を導入している。

第6章 厚生・福祉

西之表市遺族会

国は戦傷病者や戦没者の遺族へ「戦傷病者戦没者遺族等援護法」「戦傷病者特別援護法」等に基づく様々な援護を行っている。

本市では、昭和24年（1949）に西之表市遺族会の前身である西之表町遺族会が設立された。昭和30年11月には国家のために忠誠をもって戦争に出兵し、戦死した人々の霊に対して、顕彰し称え続けることを象徴とする慰霊塔を竣工した。現在、わかさ公園にある慰霊塔には約920柱の英霊が祀られ、毎年11月に戦没者追悼式が西之表市と西之表市遺族会によって執り行われている。



令和3年度 戦没者追悼式



わかさ公園の慰霊塔

児童館

本市は児童に健全な遊びを与え、幼児及び少年を個別的・集団的に指導して、児童の健康を増進し情操豊かにするとともに、子ども会等の地域組織活動の育成・助長を図るために「かもめ児童館」と「美浜児童センター」を設置している。

かもめ児童館は昭和47年に鴨女町に建設され、図書室や遊戯室などを有している。平成24年（2012）には改修工事が行われ、新たに「子ども発達支援センターY O U・友」が併設された。

昭和55年には児童の体力増進に関する指導機能を併せ持つ「美浜児童センター」を開館し、卓球台やトラップボールなどの体育用具を完備している。



美浜児童センター



かもめ児童館

西之表市老人福祉センター

西之表市老人福祉センターは市民の健康増進とレクリエーションの場として昭和58年に開館した。大浴場や大広間、集会室などを備えており、開設当初から高齢者の憩いの場として運営されている。

また、高齢者の介護予防や趣味活動、ボランティア活動なども行える施設であり、西之表市社会福祉協議会が管理運営を行っている。

西之表市社会福祉協議会

社会福祉協議会は、地域福祉の推進を図ることを目的に昭和26年に全国で発足し、現在も地域の福祉推進の中核としての役割を担っている。

西之表市老人福祉センター



西之表市社会福祉協議会は昭和29年に発足し、かもめ児童館や美浜児童センター、西之表市老人福祉センターの管理運営、ボランティア活動の推進や共同募金運動等を実施している。

保育園

昭和34年に本市初となる、かもめ保育園を開設した。その後、安城・住吉・現和・伊関・古田・国上に保育所や保育園が開所され、市立の保育園・保育所は7か所になった。しかし、平成中期以降、人口減少に伴う園児数の減少や、市の行政改革によって、市立保育園の民間移管・統廃合が行われた。現在、市内には認可保育所が4園、認定こども園が4園、幼稚園が2園の合計10施設がある。

西之表市保育所等位置図



西之表市保健センターすこやか



すこやかフェスタ

市民にとって身近で利用頻度の高い対人保健サービスを提供する施設として平成11年(1999)に「西之表市保健センターすこやか」が開設された。西之表市保健センターすこやかでは、予防接種や、健康診査、保健指導や母子手帳の発行、乳幼児健診等を実施している。

また、平成8年から健康に対する意識向上を目的に「西之表市健康まつり」を開催し、現在は「すこやかフェスタ」に改称され、生涯学習市民フェアと合同で「にしのおもて市民フェア」を開催している。

第7章 保健・医療

西之表市保健センターすこやか

種子島産婦人科医院

現在の種子島産婦人科医院が開院する前は、「医療法人信愛会 池田医院」が島内の出産を一手に担っていたが、平成19年5月に同年12月末をもって診療を停止することを表明した。そこで、島内1市2町は産婦人科医確保対策協議会を設置し、関係機関の協力のもと、医師の確保に努めた。その結果、鹿児島市医師会病院の住吉稔先生が着任し、平成20年1月に旧池田医院の施設を借りて、島内唯一の産婦人科医院「種子島産婦人科医院」を開院した。平成21年からは

島内1市2町で設立した「種子島産婦人科医院組合」による運営が開始され、平成28年に下西地区に新築移転した。

新築移転した種子島産婦人科医院（平成28年）



第8章 治安・消防

警察

昭和47年（1972）発行の『鹿児島県警察史』によると、種子島には明治13年（1880）に鹿児島警察署種子島分署が西町に設置されていた。明治18年には分署を廃止し、種子島警察署が創設された。

現在、下西校区に庁舎を構えている鹿児島県警察種子島警察署は西之表市・中種子町・南種子町を管轄している。



西町にあった旧種子島警察署

消防

本市に消防本部及び消防署が設置されたのは昭和42年のことである。その後、熊毛地域の広域消防組合構想に基づき、昭和63年に「熊毛地区消防組合」が発足した。また、平成2年（1990）には鴨女町に熊毛地区消防組合消防本部兼西之表消防署が設置された。



西町にあった旧西之表市消防署

第9章 交通

海上交通

本市の海上交通は、終戦後の昭和22年（1947）に第一照国丸が種子島・屋久島航路に就航した。そのほかにも昭和期には、「橋丸」や「屋久島丸」、フェリー「わかさ丸」、フェリー「出島」などが就航している。平成元年（1989）には高速船ジェットフォイル「トッピー」が初運行し、鹿児島港までの所要時間が1時間30分に大幅に短縮された。

なお、高速船就航後の西之表港における乗降客数は一挙に増加しており、平成7年には

4万8000人を超えている。その後、平成16年には高速船ジェットフォイル「ロケット」とフェリーの「プリンセスわかさ」が就航した。



高速船ジェットフォイル運航状況



フェリー「出島」



フェリー「プリンセスわかさ」



旅客貨物定期フェリー運航状況



高速船ジェットフォイル「ロケット」



高速船ジェットフォイル「トッピー」就航（平成元年）

陸路交通

本市の陸路交通は路線バスがあった。昭和3年に種子島自動車合名会社が、昭和7年には谷口自動車会社が運行を開始している。戦時中は、ガソリン車から木炭や薪を燃料とする木炭車に切り替えて交通を支えた。昭和27年には種子島交通株式会社が設立され、車両数・路線数・運行数が増加し、昭和40年にはバス36台、乗客者数は177万人を超えた。しかし、市民の自家用車の保有の増加によるバス離れが顕著とな



種子島交通株式会社



市街地巡回バス「わかさ姫」



デマンド型乗合タクシー「どんがタクシー」

り、平成21年に市内の路線バスは廃止となった。現在は、株式会社GLOBAL THINKが西之表市と南種子町間の幹線バスを運行している。さらに、本市では、市街地巡回バス「わかさ姫」、デマンド型乗合タクシー「どんがタクシー」、種子島空港予約型乗合タクシーが運行され、地域の移動手段を補完している。

航空交通

西之表市営飛行場は、昭和34年に安納校区に開設され、富士航空による不定期便が運航された。しかし、採算が合わなかったため昭和39年に富士航空は撤退し、昭和41年に飛行場は閉場した。

現在、島内の空港は中種子町の種子島空港（コスモポート種子島）のみとなった。



西之表市営飛行場（昭和34年）



種子島空港（コスモポート種子島）

第10章 教育

昭和27年（1952）に教育委員選挙が行われ、西之表町教育委員会が設置された。また、昭和33年には市制施行によって西之表市教育委員会に改称し現在に至る。

しおさい留学

近年、少子高齢化・過疎化を背景として離島などのへき地では児童数の減少により統合する学校が増加しており、児童数を増やすことが大きな課題となっている。

そこで、本市では市内の小規模校に転入学を希望する児童を「親子留学・里親留学・孫戻し留学」の3つの留学制度によって受け入れの推進を行っている。



西之表市「種子島しおさい留学」歓迎会

小学校

戦後の学制改革後、12校だった小学校は昭和28年に榕城小学校馬毛島分校が開校したことで13校（榕城小・上西小・下西小・国上小・伊関小・安納小・現和小・安城小・立山小・古田小・鴻峰小・住吉小・馬毛島分校）となった。その後、馬毛島分校、鴻峰小学校が閉校し、立山小学校が休校となっているため、現在は10校となっている。

中学校

平成18年（2006）に西之表市立中学校統合実施委員会を設置し、市内にある6つの



種子島中学校除幕式

中学校（榕城中・国上中・現和中・安城中・古田中・住吉中）の再編・統廃合を決定した。新設中学校は平成20年に閉校した旧種子島高等学校跡地に開校することとなり、校名は「種子島中学校」に

決定した。種子島中学校は平成21年に開校し、島内で最も大きい中学校となった。

高等学校

鹿児島県では、県内の公立高等学校の再編・整備を平成16年度から平成22年度までに段階的に実施する「かこしま活力ある高校づくり計画」を策定し取り組んでいた。

種子島高等学校及び種子島実業高等学校も再編・統合の対象となっていたため、市では、西之表地区高等学校振興対策協議会を設立し、地元住民の意見聴取等を行った。また、県教育委員会も住民説明会を開催し、住民の声を聴く機会を設けた。

その後、種子島高等学校と種子島実業高等学校の統合が決定し、平成18年に新設種子島高等学校として、種子島実業高等学校の場所で開校した。なお、種子島実業高等学校の2・3年生と新設種子島高等学校の1年生は同じ敷地内の校舎で授業を受けた。その後、種子島実業高等学校と旧種子島高等学校は平成20年3月に閉校した。新設された種子島高等学校は、令和7年に創立20周年を迎えた。



(旧) 種子島高等学校



種子島実業高等学校



種子島高等学校

生涯学習



マナビ

本市では、昭和63年に開催された第1回全国生涯学習フェスティバルのマスコミキャラクター「マナビ(学び蜂)」をイメージキャラクターとし、「いつでも、どこでも、だれでも学べる」をスローガンに生涯学習社会に向けた様々な取組みを展開している。

昭和42年には市内に住む60歳以上の市民を対象に「寿大学」を開校し、市民講座や自主講座の先駆けとなっていた。

また、市民講座の受講者等の学びの成果を発表する場として、平成3年から第



ふるさとまなび〜隊

給食

明治22年(1889)に山形県で始まった給食は、戦時中の中断を経て、戦後の昭和22年に再開された。

本市では、昭和23年に榕城小学校にて学校給食が開始された。その後、昭和34年の住吉小学校給食室の完成を皮切りに、市内の小中学校に給食室が設けられ、順次、完全給食が開始された。

平成13年には、安全安心な給食提供を行う施設として西之表市立学校給食センター「のびっ子」

びっ子」を建設し、翌14年4月から市内の小中学校へ給食を提供している。



西之表市内の小中学校・高等学校の位置



西之表市立学校給食センター「のびっ子」



給食風景(安納小学校)



生涯学習市民フェア（平成5年）



生涯学習市民フェア（展示）

1回生涯学習市民フェアを開催している。平成17年からは「にしのおもて市民フェア」と称して、生涯学習市民フェアと健康づくりへの理解を深めることを目的に実施している。「すこやかフェスタ」を合同で開催している。



市民文化祭（展示）



市民文化祭（コールわかさによる合唱）



市民文化祭（フラダンス）

市民文化祭は、芸術文化活動の発表の場として昭和47年の西之表市民会館完成を契機に、西之表市文化協会の主催により開催されている。舞台部門では合唱や日本舞踊、フラダンスなどが披露され、展示部門では書道や短歌などの作品が紹介されている。
現在では、市民の文化活動を象徴する恒例行事として定着している。

文化祭



華道の祭典in種子島

「第30回国民文化祭かこしま2015」は平成27年に県内各地で開催され、本市では「華道の祭典in種子島」と「黒潮文化交流の祭典」が開催された。
「華道の祭典in種子島」は、いけばなの根源といわれる華道池坊の普及に尽力した羽生慎翁の出身地であることから本市で開催された。鹿児島県連合華道会や種子島華道団体による作品240点が展示され、特別講演会やいけばな体験教室などが開催された。

国民文化祭

「黒潮文化交流の祭典」は、黒潮文化によって種子島にもたらされた鉄砲伝来と甘藷伝来をテーマに郷土の歴史文化を再認識することを目的に演舞団体や200人の市民エキストラが出演した合戦劇「戦国鉄砲絵巻」や甘藷にまつわるパネル展が開催された。

国民文化祭には島内外から多数の来場者が訪れ、郷土の歴史や魅力を再認識する機会となった。



黒潮文化交流の祭典 合戦劇「戦国鉄砲絵巻」

市民会館

公民館は生涯学習・社会教育の場として大きな役割を担っている。

昭和32年に東町に開設した西之表町中央公民館は、施設の老朽化等により学校講堂や集落の公民館等を転々とした。その後、昭和47年に建設された西之表市民会館に機能を移した。

当時の市民会館は、図書室、食堂、大広間が置かれていた。大広間では結婚式や披露宴が行われていた。



西之表町中央公民館



西之表市民会館

平成27年度には大規模改修が実施され、多目的トイレやエレベーターの設置などのバリアフリー化が進められた。また、収容人数433人のホールを整備し、総合文化施設として多くの市民に利用されている。

図書館

本市の図書館についての戦前・戦中における記録は残されていないが、大正4年（1915）には北種子村記念図書館が設立されている。

昭和24年には種子島高等学校の一室を間借りして西之表町立種子島図書館を設置したが、その後も移転を繰り返した。昭和47年に市民会館が完成したことにより、同施設の2階に移転し、新たに資料閲覧室が整備された。平成16年には楽習・交流プラザたねっこ（旧合同庁舎）の2階と3階に移転し、現在に至る。なお、同施設の1階には子育て支援センターと榕城児童クラブが設置されている。

また、市立図書館へ来館することが困難な市民に向けて昭和58年から移動図書事業に取り組んでおり、現在も、移動図書館車あおぞら3号に約800冊の書籍を載せ、巡回している。



移動図書館車 あおぞら3号



西之表市立図書館

種子島開発総合センター「鉄砲館」

種子島開発総合センター「鉄砲館」は、昭和45年に開館した市立種子島博物館の後継施設として、昭和58年に開館した。鉄砲伝来に因んだ南蛮船をモチーフとした外観となっており、国内外の古式銃約100丁をはじめ、鉄砲伝来を伝える回転ジオラマなどを展示している。また、1万3000点を超える取藏品を保管している。

令和6年(2024)11月には、入館者数160万人を突破している。



入館者160万人
セレモニー



種子島開発総合センター「鉄砲館」

社会体育(生涯スポーツ)

明治44年、体育協会の前身となる大日本体育協会が創立され、その後、日本体育協会を経て、日本スポーツ協会へ改称されている。西之表市体育協会は昭和22年に発足されている。

また、スポーツ少年団は、子どもたちがスポーツなどを通して心身を育て、地域の人々とともに成長することを目的とした社会教育団体である。昭和49年には西之表市体育協会の内部組織下に設立され、スポーツ活動だけではなく、文化・学習活動や社会活動など、幅広い活動に取り組んでいる。

昭和63年からは、友好都市である滋賀県長浜市のスポーツ少年団と相互訪問の交流活動



長浜市・西之表市友好都市少年スポーツ交流会

を行っており、長浜市でのスキー体験や西之表市での海水浴などを通じて親善・親睦が図られている。

スポーツ行事

●市民体育祭

市制施行後から開催され、第3回大会は当時の種子島高校グラウンドにて開催し、1万数千人が参加した。昭和45年から会場を市営グラウンドに移した。



市民体育祭

●市駅伝競走大会

昭和47年から開催し、昭和56年の第10回記念大会では、20区間37・6^{キロ}のコースで開催していたが、少子高齢化等により選手選出が困難となったため、現在は伊関小と現和の東海岸沿いのコース10区間14・4^{キロ}の道のりを各校区の選手たちがタスキをつないでいる。



市駅伝競走大会

体育施設

本市のスポーツ施設は昭和40年代半ばから順次整備が進められてきた。市制施行10周年には市営グラウンドが、市制施行15周年には市営プールが整備され、市制施行30周年には市民体育館が建設された。

ほかに、市営球場（安納球場）、美浜公園グラウンド、市営テニスコート、天倫館（屋内相撲場）などがある。



市民体育館



安納球場



市営グラウンド



市営プール

第3部

西之表市の民俗・文化

第1編

民俗

《「西之表市史」第八編校区史》

第1章 寺社・仏閣

神 社

種子島の神社の様子は、鹿児島県内でも少し様相を異にするように考えられる。例えば旧藩領内では諏訪神社（及び南方神社）がきわめて多く存在しており、これは島津氏が諏訪神社を守り神として崇敬していたことによるものである。これに対して種子島では、神社庁の所管していない神社も含めると、牧の神やエビス神社を除いても100社ほどあるが、諏訪神社は1社のみである。この諏訪神社は、10代種子島幡時が勧請したとされるもので、種子島氏が島津氏に臣従するはるか以前のことである。このことから種子島に

対する島津氏の直接的支配の影響が薄いことがわかる。

●浦田神社

浦田神社は種子島で一番古く、笹の宮が始まりとされている。その後稲の浦田大明神として崇拝され、1800年頃には、熊野神社の次に参拝者が多い神社であったようである。昔から浦田神社の祭典が終わらなければ、他集落の祭典はできなかつた。祭典順序は、1番は浦田神社、2番は奥神社（浦田の翌日祭典）、3番は寺之門神社（奥の翌日祭典）、4番は中目神社（寺之門の翌日祭典）と、それぞれ1日遅れで祭典が斎行されてきた。浦田神社の願成就は国上の総願と呼び、総願が終わってから、他集落の願成就が行われた。



浦田神社



伊勢神社

●伊勢神社（大花里）

藩政期に島の総領守とされていた伊勢神社は、平成28年（2016）に伊勢神宮第62回式年遷宮の際に古材36本を譲渡され、神明造りで建て替えられた。以来、初詣には4000人を超える参拝客が訪れる。

『伊勢神社縁起』によると、17代太守島津家久の娘が種子島17代島主忠時に嫁がれた折に従者であった緒方惟貞は、かつて父惟治が瀬戸太夫に請い、拝戴した御神鏡を持って来島した。そこで同僚と協力しながら成高山（現在地）に小祠を建てて祀ったのが伊勢神社の起源である。寛永18年（1641）のことである。その後、島主久達の娘永照院はことのほか信心が厚く、祭祀を行うほか副鏡を献納した。また22代島主久照は社殿を改築し、境内も整えた。このようにして伊勢神社は現在の形に近づいていった。

仏閣

●日典寺

根本山日典寺と呼び、日典上人を祀っている。日典寺は、もとは本堂・御廟・庫裡からなっていたが、近年、本堂や庫裡だけはその姿を残している。御廟（先祖などの霊を祀った官を敬つていう語）は大正7年

（1918）に造られており、種子島唯一の華麗な、優れた建造物といわれている。

日典上人が殉教死したのは寛正4年（1463）のことである。上人の法事は、古くは本源寺及び川迎にあった妙泉寺で行っていたが、真浄院という川迎の僧が上行塚（日典上人の古墓のあったあたりを上行塚といつた）に庵を建て、上人の菩提を弔った。これが日典坊の起源であるという。日典坊は、朝夕の題目法要を行う場所、大きな法事については、本源寺や妙泉寺で行われていたという。日典坊がいつ日典寺として建造されたかは明らかでない。

墓石を安置する御廟は『種子島家譜』、「宝永七年（1710）十二月、日典の墓を改めて建つ。石開みは赤尾木中の信者によって建てられた」とある。弘化2年（1845）にも改造されたという。大正7年（1918）には建て替えが行われ、宮大工は東町の柳田助右衛門、建築様式は以前のものをそのまま再現したといわれる。昭和37年（1962）に本堂が建立され、同55年に増築、さらに日典寺会館も建立された。史蹟は、誕生地・供養碑・御廟所。歴史資料として、曼荼羅と日隆・日典・日良・日増上人御真筆の4軸が保管されている。温座折念が行事として昭和46年に市の無形文化財に指定された。



日典寺の温座折念

◎吉祥山本源寺

慈遠寺、大会寺と本源寺を「赤尾木三箇寺」と呼び、いずれも京都本能寺・尼崎本興寺の末寺である。2つの寺は律宗以来の古刹であったが、本源寺は文明元年（1469）、島主時氏公の命により、浄光院日良法印が開山した。永祿6年（1563）、14代時義公の時代、その子どもである時次が7歳にて死去し、その菩提を弔うため、坂下（現在の市役所付近）にあったのを坂上（さかみま）の現在地に移し再建した。

元禄2年（1689）時の寺領は1000石だが、社領30石、位牌所20石で計1500石。山門は警察署（現在は移転）付近、裏門は市役所南側であったようで、この付近を現在も門前と呼んでいる。

廃仏毀釈後、明治11年（1878）から元鹿兒島正建寺住職柳田日皓の努力で、翌12年尼崎本興寺日経上人の来援を得て、西之表の春田日皎宅に仮説教所を設け、島内を巡回し布教した。復興に尽力した日経・日皓・日誘の各上人の墓は境内にあり、復興初祖二祖・三祖としている。明治17年9月に表門を新築するも、翌年8月の火災により全焼している。同年12月に庫裡を再建した。種子島家の住宅が寄付され、明治38年に本堂が再建された。廃仏毀釈の打撃を受けたが、島主家菩提寺と



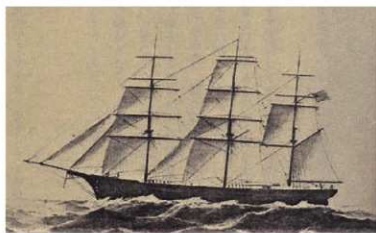
吉祥山本源寺

しての面目は保たれている。本源寺下の島主家墓地御拝塔は維新前の姿のまま保存されている。

第2章 カシミア(ヤ)号事件

明治18年(1885)9月12日、石油を満載した米国商船カシミア号は、種子島南東30^{キロ}の海上で猛烈な暴風雨に遭遇し、破船。乗組員15人のうち、船長をはじめ3人は波にさらわれ死亡した。残る12人のうち7人はボートで15日に立山舞床海岸へ漂着。残り5人は20日にかたで伊関流合の海岸に漂着した。両村民の手厚い救助・介抱により乗組員

12人は無事帰国。両村民の人道的行為に感動したアメリカ政府から、明治22年3月、大統領名で救助した2人にそれぞれ金メダルと25ドルが贈られた。明治18年9月15日、立山舞床海岸に7人が漂着し、救助したことを記念して立山港に石碑が建てられた。



建造当時のカシミア号
(南日本新聞センター「太平洋にける機」)



カシミア号漂着記念碑



水さし(市指定文化財)

伊関に漂着したカシミア号の乗組員が所持していたと伝わる。乗組員はこの水さしの中に入っていた酔を飲みながら飢えや脱水をしのぎ、イカダで漂流したという。



金メダル(市指定文化財)

第2編

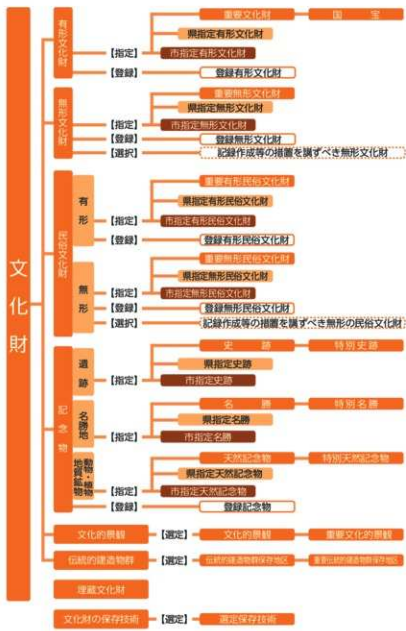
文化財

『西之表市史』第八編校区史

第1章 文化財の概要

文化財とは、長い歴史の中で生まれ、先祖によって守り伝えられてきた古い建物や美術品、技術、生活や習わし、遺跡などのことで、私たちの暮らしや心を豊かにしてくれるものであり、先祖が残してくれた文化財を未来に向けて確実に受け継いでいくことが大切である。そのため、国・県・市では文化財保護法や条例に基づいた取組を進めている。

また、文化財は、文化財保護法で定義される「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」「伝統的建造物群」の6類型と「埋蔵文化財」「文化財の保存技術」に分けられる。国・県・市の連携のもと、文化財保護法や条例で定める指定・選定・登録制度において重点的に保護するほか、記録作成等の措置を講ずべきものを選択し、その記録作成につとめている。



	建造物 美術工芸品 (絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、考古資料、歴史資料など)
	演劇、音楽、工芸技術など
	【有形の民俗文化財】無数の民俗文化財に用いられる衣服、器具、家具など 【無形の民俗文化財】衣食住、生産、信仰、年中行事等に関する民俗慣習、民俗芸能、民俗技術など
	【遺跡】貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅など 【名勝地】直隴、橋原、峡谷、海浜、山岳など
	【動物、植物、地質鉱物】
	地域における人々の生活や生産、地域の風土により形成された景観地 (棚田、里山、用水路など)
	周囲の環境と一体となっている伝統的な建造物群 (宿場町、城下町、農漁村など)

文化財の体系図

西之表市の文化財

本市には令和7年(2025)12月31日現在、国指定文化財6件、県指定文化財10件、市指定文化財58件、国登録文化財3件、国選択文化財3件の合計80件の指定等文化財がある。

No.	種別	名称	所在地	所有者・保存団体等	指定年月日	備考
●国指定文化財						
1	天然記念物	薩摩鐘	鹿児島県	所在市町村	S18.8.24	
2	天然記念物	地頭鐘	鹿児島県	所在市町村	S18.8.24	
3	天然記念物	アカヒゲ	トカラ列島、奄美大島、徳之島	所在市町村	S45.1.23	
4	天然記念物	オカヤドカリ	県本土南端部、南西諸島	所在市町村	S45.11.12	
5	天然記念物	カラスバト	飫島、三島、種子島その他	所在市町村	S46.5.19	
6	天然記念物	種子島国上湊川・阿蘇川のマンग्रープ林	西之表市国上湊	西之表市	R4.11.10	阿蘇川(中種子町)
●鹿児島県指定文化財						
1	有形(工芸品)	種子島銃	開発総合センター	個人	S30.1.14	ポルトガル初伝統
2	有形(書跡・典籍)	種子島家文書	開発総合センター	個人	S30.1.14	
3	有形(考古資料)	奥ノ仁田遺跡出土品	開発総合センター	西之表市	H11.3.19	土器130点 石器類73点
4	有形(考古資料)	鬼ヶ野遺跡出土品	開発総合センター	西之表市	H21.4.21	石器類604点
5	無形民俗	西之表市現和の種子島大踊	現和武部	種子島大踊保存会	S43.3.29	
6	無形民俗	西之表市横山の盆踊	上西横山	横山盆踊保存会	S43.3.29	
7	無形民俗	西之表市の面踊	住吉深川	深川めん踊保存会	S46.5.31	
8	無形民俗	西之表梧林神社の大的始式	栢城中目 梧林神社	大的始式保存会	H4.3.23	毎年1月11日実施
9	無形民俗	古田獅子舞	古田校区	古田獅子舞保存会	H16.4.20	
10	天然記念物	種子島のハナサンゴモドキ	上ノ古田港内・馬立の岩屋の海域・大塩屋港南側海域	西之表市・中種子町他	H31.4.19	
●西之表市指定文化財						
1	有形(建造物)	種子島家住宅	栢城中目	西之表市	H20.7.9	赤尾木城文化伝承館 月窓亭
2	有形(建造物)	赤尾木港の岸砦と築島	西之表港内(西町)	鹿児島県	H22.3.9	
3	有形(建造物)	旧上妻家住宅主屋	西之表9819	西之表市	R6.9.10	
4	有形(建造物)	旧上妻家住宅門	西之表9819	西之表市	R6.9.10	
5	有形(工芸品)	節籠征矢及矢尻	開発総合センター	西之表市	S37.8.30	
6	有形(工芸品)	鉦	栢城納曾	個人	S37.8.30	
7	有形(工芸品)	節籠征矢及矢尻	開発総合センター	個人	S37.8.30	
8	有形(工芸品)	小刀	栢城中目	個人	S37.8.30	銘 隅州種子島住国命
9	有形(工芸品)	能野焼花瓶	開発総合センター	西之表市	S39.2.20	
10	有形(工芸品)	脇差し	栢城松島	個人	S52.1.13	
11	有形(工芸品)	伝八板金兵衛浄定作火鑪銃	開発総合センター	個人	S52.9.8	
12	有形(工芸品)	太刀 銘「国宗」	開発総合センター	個人	H19.2.7	
13	有形(工芸品)	上西大広野神社の銅鏡	開発総合センター	大広野神社氏子	H28.2.3	5面
14	有形(書跡・典籍)	鉄砲鍛冶文書	開発総合センター	西之表市	S53.7.11	
15	有形(書跡・典籍)	川口尚葉の書	開発総合センター	西之表市	R1.10.10	
16	有形(古文書)	上妻家雅夫妻逆修寿像	開発総合センター	西之表市	R6.9.10	
17	有形(古文書)	新當流羅十間智合位許状	開発総合センター	西之表市	R6.9.10	

西之表市 指定文化財等一覧(令和7年12月31日現在)①

No.	種別	名称	所在地	所有者・保存団体等	指定年月日	備考
18	有形(考古資料)	上能野貝塚出土釣針	開発総合センター	西之表市	H28.2.3	
19	有形(歴史資料)	猿投窯灰釉長頸瓶	開発総合センター	西之表市	S53.7.11	
20	有形(歴史資料)	越州窯青磁破片	開発総合センター	西之表市	S53.7.11	
21	有形(歴史資料)	長沙窯青磁水注片	開発総合センター	西之表市	S53.7.11	
22	有形(歴史資料)	南宋龍泉窯青磁中型碗	開発総合センター	西之表市	S53.7.11	
23	有形(歴史資料)	金メダル	開発総合センター	安城校区	S55.7.1	
24	有形(歴史資料)	水さし	開発総合センター	西之表市	S55.7.1	
25	有形(歴史資料)	絵馬	開発総合センター	栢林神社	S58.6.25	
26	有形(歴史資料)	山の井様		種子島家住宅	H20.2.6	
27	有形(歴史資料)	カシミア号乗組員救助に関する石碑	伊関・安城・立山地区	伊関・安城・立山校区	H24.10.3	7基
28	有形民俗	丸木舟製作工具	開発総合センター	個人	S44.4.12	
29	有形民俗	丸木舟資料	開発総合センター	西之表市	S44.4.12	
30	有形民俗	本源寺石塔	栢城中目	本源寺	S46.5.13	13基
31	有形民俗	本源寺什宝	栢城中目	本源寺	S46.5.13	宝物9点
32	有形民俗	法華宗御曼陀羅	下西川迎	日典寺	S46.5.13	
33	有形民俗	御種子蒔石	国上浦田	浦田神社	S46.5.13	
34	有形民俗	石板碑	国上浦田	浦田神社	S46.5.13	
35	有形民俗	手洗鉢	栢城西町	八坂神社	S58.6.25	
36	無形民俗	源太郎踊	住吉	源太郎踊保存会	S39.2.20	
37	無形民俗	太鼓山	栢城西町	太鼓山保存会	S42.4.13	
38	無形民俗	舟祝い唄	住吉浜之町	浜之町集落	S43.12.1	
39	無形民俗	温座折念	栢城中目	本源寺	S46.5.13	
40	無形民俗	温座折念	下西川迎	日典寺	S46.5.13	
41	無形民俗	安納神謡	安納軍場	安納神謡保存会	S49.1.1	
42	無形民俗	古田神謡	古田校区	古田神謡保存会	H11.4.7	
43	無形民俗	ヨシシー語り	現和庄司浦	ヨシシー謡保存会	H23.3.2	
44	史跡	赤尾木城跡	栢城中目	西之表市	S34.8.10	現：栢城小
45	史跡	種子島家墓地	栢城中目・洲之崎	個人	S34.8.10	御坊墓地18基 御拜塔墓地78基
46	史跡	日典上人法華弘布並びに法難の地	下西川迎	日典寺	S46.5.13	
47	史跡	能野焼窯跡	住吉上能野	上能野集落	S50.2.13	
48	史跡	製鉄所跡	現和武部	個人	S50.10.9	
49	史跡	大瀬休左衛門夫婦の墓	下西下石寺	個人	H16.4.8	2基
50	天然記念物	ガジュマル防潮林	住吉中之町・浜之町	住吉校区	S34.8.10	
51	天然記念物	ソテツ自生群落	馬毛島嶼山	国・個人	S34.8.10	
52	天然記念物	ツキイグ自生群落	上花里崎	鹿児島県	S46.5.13	
53	天然記念物	ヤッコソウ	国上浦田	国上校区	S48.2.1	
54	天然記念物	滝痕	住吉深川	個人	S48.2.1	
55	天然記念物	砂火山	開発総合センター	西之表市	S53.8.8	
56	天然記念物	ウシワマの骨格	開発総合センター	西之表市	H4.12.19	第2平山号
57	天然記念物	ヘブ自生群落	国上太田	個人	H22.3.9	
58	天然記念物	西之表象化石	開発総合センター	西之表市	H28.2.3	7点

●国登録文化財

1	有形(建造物)	八坂家住宅主屋	西町6989	個人	H29.10.27	
2	有形(建造物)	遠藤家住宅主屋	西町7105	個人	R3.2.26	
3	無形民俗	薩南諸島の黒糖製造技術	鹿児島県	所在市町村	R6.3.21	

●国選択文化財

1	無形民俗(民俗芸能)	種子島大踊	現和武部	種子島大踊保存会	S49.12.4	
2	無形文化財(民俗技術)	西之表の種子鉄製作技術	西之表市	種子鉄製作技術保存会	H24.3.8	
3	無形民俗(民俗芸能)	種子島の盆踊	西之表市・南種子町	(西)横山盆踊保存会 (南)西之地区自治公民館	H30.3.8	

西之表市 指定文化財等一覧(令和7年12月31日現在)②

●国指定文化財

本市の国指定文化財6件のうち「アカヒゲ」や「オカヤドカリ」など5件は県内において保存団体等を定めない文化財である。

「種子島国上湊川・阿蘇川のマングロープ林」は、先行して指定されていた中種子町の阿蘇川のマングロープ林に追加する形で令和4年に指定された。

マングロープ林は熱帯から亜熱帯の汽水域に分布する森林で、アジア地域における自然分布の北限は種子島といわれている。種子島でも最北限に位置する国上湊川のマングロープ林は耐寒性が強いメヒルギのみが生育している。種子島のメヒルギは寒冷風の影響で低茎になりがちだが、国上湊川では地形によって風から守られるため、高さ10mを超える国内最大級のメヒルギが生育している。そのため寒



国指定文化財 種子島国上湊川のマングロープ林



県指定文化財 種子島銃
(種子島時邦氏所有)



市指定文化財 ヘゴ自生群落



市指定文化財 上妻家雅夫妻逆修寿像



市指定文化財 旧上妻家住宅主屋

冷に適用した低茎なメヒルギと地形に擁護された国内最大級の高さを誇るメヒルギが共存している貴重な環境である。

●県指定文化財

本市初の県指定文化財は、昭和30年(1950)1月14日に指定された「種子島銃」である。以降、「種子島家文書」や「鬼ヶ野遺跡出土品」などが指定されている。

●市指定文化財

本市初の市指定文化財は、「赤尾木城跡」などであり、昭和34年8月10日に指定された。以降、「伝八板金兵衛清定作火縄銃」や「種子島家住宅」「種子島家墓地」「ヘゴ自生群落」などが指定されている。

また、令和6年9月10日には「旧上妻家住

宅主屋」と「旧上妻家住宅門」が国登録文化財から市指定文化財に指定され(格上げ指定)、旧上妻家住宅から発見された、「上妻家雅夫妻逆修寿像」と「新當流鑑十間智合位許状」が新たに市指定文化財に指定されている。

なお、これら以外にも指定候補の文化財が多数存在しており、調査研究が進められている。

●国登録文化財

本市には港町に残る近世の町家として貴重な「八板家住宅主屋」、本市の中心部にあり、天保11年（1840）に建てられたといわれている「遠藤家住宅主屋」、種子島から与論島に至る鹿児島県の島々に伝わる伝統的な製糖技術である「薩南諸島の黒糖製造技術」の3件が登録されている。

また、民間主導によるリノベーションによって「八板家住宅主屋」はカフェとして「遠藤家住宅主屋」は宿泊施設として活用されている。



国登録文化財 八板家住宅主屋



国登録文化財 遠藤家住宅主屋



国登録文化財 薩南諸島の黒糖製造技術



国選択文化財 西之表の種子鉄製作技術

●国選択文化財

国選択文化財とは国指定や国登録されていない無形文化財や無形民俗文化財のうち、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として国から選択された文化財をいう。

本市では、現和武部の「種子島大踊」「西之表の種子鉄製作技術」「種子島の盆踊」の3件が選択されている。

なお、「種子島の盆踊」は本市「横山盆踊」と南種子町「西之本国寺盆踊」のみとなっている。

郷土芸能の保存

種子島は「芸能の宝庫」といわれるほど、数多くの郷土芸能が伝承されている。これら多くの郷土文化と融合し「地域の文化」として根付いている。近年は、少子高齢化や過疎化、生活様式の変化に伴う担い手不足によって継承が困難となってきた。西之表市無形民俗文化財保存連絡協議会では、各保存会の現状や問題点について意見交換等を行い、保存と継承に向けて取り組んでいる。



県指定文化財 西之表市横山の盆踊



県指定文化財 西之表市現和の種子島踊



県指定文化財 西之表梧林神社の大的始式



県指定文化財 西之表市の面踊



市指定文化財 源太郎踊



県指定文化財 古田獅子舞



市指定文化財 安納棒踊



市指定文化財 太鼓山



市指定文化財 ヨンシー踊り



市指定文化財 古田棒踊

●協力機関・協力者

西之表市立種子島中学校

校長 吉松 孝展

教頭 海江田 智成

国語科 高田 蒼太

樋口 実妃

社会科 大郷 謙一郎

村水 崇征

●西之表市史編集委員会

委員長 徳水 和喜（近世部会長）

副委員長 鮫嶋 安豊（校区史部会長・民俗部会長）

委員 寺田 仁志（自然部会長）

堂込 秀人（先史部会長）

永山 修一（古代部会長）

屋良 健一郎（中世部会長）

奥村 学（近現代部会長）

●西之表市史編さん委員会

会長 大平 和男（令和七年九月三十日）

小山田 八重子（令和七年十月一日）

副会長 佐藤 秀正

川村 孝則（令和七年二月十八日）

下川 和博（令和七年二月十九日）

塩崎 義政

徳水 和喜

鮫嶋 安豊

奥村 学（令和七年三月三十一日）

尾形 之善

岩下 真奈美（令和七年四月一日）

上妻 敏男

上妻 陽二郎

●西之表市史編集委員会専門部会

中世部会 村井 章介

高橋 公明

近代部会 森 友和

栗林 文夫

●事務局

企画課長

企画課長補佐

歴史文化活用係長

歴史文化活用係長

歴史文化活用係主査

歴史文化活用係主査

歴史文化活用係主事

森 真樹

田上 美子

山中 寿和（令和七年三月三十一日）

田上 美子（令和七年四月一日）

内田 智弘（令和七年三月三十一日）

川口 凌平（令和七年四月一日）

梶原 将貴（令和七年四月一日）

●関係機関

教育委員会社会教育課

社会教育課長

社会教育課長級参事

主幹兼文化財係長

文化財係主事

会計年度任用職員

沖田 純一郎（令和七年四月一日）

沖田 純一郎（令和七年三月三十一日）

和田 正樹

梶原 将貴（令和七年三月三十一日）

中園 愛

地域支援課協働推進係

荒河 翼

委託業者 株式会社ぎょうせい九州支社

西之表市史
ダイジェスト版

令和八年（二〇二六）三月三十一日 発行

編集 西之表市史編さん委員会
発行 西之表市

〒八九一―三一九三

鹿児島県西之表市西之表七六一二

印刷・製本 株式会社きよせい



Nishinoomotecity